
例えば勇者の模造品

零月零日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

例えば勇者の模造品

【Zコード】

Z73530

【作者名】

零月零日

【あらすじ】

魔力の存在が認められ、しかし魔法は表舞台に立てない世界。

試験で不正行為を働き停学、定職は無い、絶賛N E E T 生活中のainer。彼は『RPG』と呼ばれるHPとMPを生み出すスキル保持者であった。『勇者の模造品』と呼ばれるナインの意味は? 国を変える程の力を持つた物達の結果であり、魔力の存在が認められてから、たった四年後の世界のお話。

プロローグ（前書き）

4／19、思う所があり、入れ替えました。

プロローグ

少年は落日を見ながら公園のブランコに腰掛け、缶コーヒーを飲んでいた。学校帰りの解放感、残業開けの達成感とは違った感情を抱いて。

「仕事、か……」

頃垂れるナイン（十八歳）は、今日を持つてZETー一周年記念である。

真っ赤な夕日を見ながら、何とも言えない敗北感と一緒にコーヒーを飲み込み、寂寥感を溜息と共に吐き出す。リストラされたお父さん、そう表現するのが相応しい雰囲気だった。

何が悪かつたんだろう。

今日までに一体何度繰り返したであろう問答を、ナインは「」のZETー周年記念日にもしてみた。

「やっぱ、学校を停学になつた事かな……。それつきり一度も行つてない事もあるだらうじ、意外とその状態で生きられた事が一番かも」

ナインは自分の財布を見る。

クシャクシャに丸められた一万円札が一枚程、五百円玉と百円玉、それに十円玉だけで構成された小銭の集合。小銭がお札を入れる方に、お札が小銭を入れる方に分けている。それはただ単に小銭を探すのが大変だから広い方に入れようと思つただけのことなのだが、おかげで紙幣は常にヨレヨレである。

ZETのくせに金持ちだ、と言われた事が数回あるが、しかしこれが彼の全財産だといった事を考慮すると、多いのか少ないのかよ

く分からぬ。へそくりなど持ち合はせていないのだ。

収入はバイトのみで、それも不定期かつ危険極まり無いものだつた。しかしその反面、誰もやりたがらないといつ理由で高収入。彼の自堕落な生活を成り立たせる金額で、それが彼のNEET生活を長引かせていた。

「……結局悪いのは俺で、自業自得かよ」

最終的に行き着くところはいつもこれだつた。

他の皆がちゃんと社会に適応して行く中、自分が仕事も学校も無いのは、自分が何か悪い事をしたからだろう、と。

はあ、と大きな溜息を吐き、彼は何となくこんな事を言つてみた。

「俺つて、これでも勇者なんだよな

そう言つてみた。言つてみただけで、その真偽はかなり怪しいが。最近巷で売られている『寿命が延びる浄水器』とか、『天才の脳みそを食べると天才になれる』という噂並みに怪しい。

信じる者は救われる、と言つが、この場合信じてみても救われる者はいないだろう話だ。

誰にも信じられはしないし俺自身信じじてない、とナインは思つていた。

「仮にもし本当に俺が勇者なら、家宅に侵入して壺やら樽をぶち壊し、壁の小物袋やタンスの中身を漁り、上は金銀財宝、中は薬や武器、下は下着やペチコートのお召し物までをありがたく頂くんだけどな

あ。勇者は治外法権アリですかって話だな

最低の野郎だった。

だが、彼はちゃんと解っていた。

「しつかし、この世界に魔王なんていないじゃん。魔王がいなければ勇者の需要も無い。当然『家宅侵入罪』や『窃盗罪』が適応され、俺は見事に檻の中つてか？」

俺は囚われの姫様を助け出す人間だろうそれじゃ逆だろ、などと呟いていた。

危ない人間だった。

NET一周年のため若干ハイテンションなのかもしれない。本人も、そろそろ何かしないとヤバいんじゃない？と思っている。思っているだけで、行動は特にしていない。一応、バイトはしているので。

「よし、決めた！ 明日から頑張るつー！」

それは……結局しないフラグじゃないのか？ ナインは心の中で自分に問うてみたが、その答えは一文字で、肯定の意味の言葉だった。ちなみに、一年前と同じ答えだったとか。

コーヒーを飲みきり、律儀にリングブルを取り外し財布の中に入れる。そして空き缶は、自動販売機横のゴミ箱に入れた。ついでにそこらに散らばっていたゴミを拾い、きちんと分別し公園内のゴミ箱に入れる。

エコに協力する俺に、神様なんらかのお礼を下さい。現金で一万円、空から降らせてくれると嬉しいな。出来れば仕事も一緒に欲しいな、そうナインは思った。

現金な野郎だが、彼は彼で一日を生きるのにかなり厳しい生活を

送っているので、そこを察してもらえると彼は救われるだろつ。因果応報、という言葉で何かを察してほしい。

そして願い叶わず、彼の一日は終わる？？はずだった。

本当に現金でも降つてこないかと上を向いて歩いていたナインは、それをしつかりとその目に焼き付けた。

このタイミングで、それは起こつた。

だから、それはもしかすると、神様が彼にくれたエコ活動のお礼だつたのかもしれない。

それはーー。

空から少女が降つて來た。

まあ、だからと書いて驚く事は無いのだが。

今の時代、空からUFOが落ちて来ても可笑しくないのだ。実際、数年前には侵略者が宇宙船で襲来したのだから。

その際、侵略者を撃退するのに『魔法』が用いられ、現在では魔力を使うことが当たり前となりつつある。第一次世界大戦時に日本で敵の兵士を倒すため竹槍の訓練をしたような、そんな意味合いで魔力を使うようになつてしているのが、今現在のこの世界の現状だ。最も、竹槍と魔力では、その訓練の結果は大きく変わるだろうが。魔法と言えば、空を飛ぶ。

だから、少女が空から降つて来ても、何も可笑しくないのだ。

「あやんー」「あやつ

だからと書いて、降つて来た少女を受け止めへういしないと、押しつぶされるのは目に見えているが。

それがナインと少女、朝井愛葉との出会いだった。

「「めんなさい。大丈夫ですか？」

「……いいから、さつさと降りてくれ」

押しつぶしたまま問いかける少女に、呆れながらナインは答えた。
あ、すみません、と少女は謝りながら少年から離れた。

「ハツ！ なんだよ、逃げる事は無いんじゃねえか？ 生徒会長さんよおー？」

妙に変な口調の青年が、そこにはいた。突然現れたというように。
……いや、男の背後には十人以上の男がいる。どうやら、少女を追っていたらしい。

（あんまり穏やかな雰囲気じゃないな……）
立ち上がったナインは服に付いた埃を落としながら、男達を観察する。

だいたい自分と同じくらいの年の男達は、柄の悪い人相を醜く歪め、近寄りがたい雰囲気を醸し出していた。

その中でも、先頭の妙な口調の青年だけは、他と違い明らかに憎悪を溢れさせていた。

「ん？ なんだよ、その男。ハツ！ まさか生徒会長さんよおー、
そこらの一般人に助け求めんの？ ふん！ さすがは人間兵器だな
！」

「失敗作品が調子にのるな！」

と、隣にいた少女が怒声を上げた。

先ほどの落ち着いた感じの、丁寧な言葉遣いは一変していた。ど

「や、『セクハラ』が素のようだつた。

ナインは田紛しく変わる現状に混乱して来た。ナインは訳も解らず自分を攻撃した。

痛い！ やうやく現実のようだ。

「失敗作品だあ？ 誰が好きでそんなモンやつてるかよ！」

「アンタ達の行動は、不良行為よ！ 評価されたいなら、それなりの行動をしなさい！」

一触即発の雰囲気に、巻き込まれそうなナインは面倒になつた。ナインの悪い癖が出てしまつた。

「ちよつといいか？」

ナインは隣の少女の肩に手を置く。セクシャルハラスメントは性的嫌がらせ。もしも彼女がセクハラで訴えを起こした場合、少女は肩が性感帯でなければおかしな気がする。

「何？ セツキのは謝るから、あなたはセツキと逃げなさい」

「やうやく見よつともせず、臨戦態勢な少女。血の氣が多い事である。

ナインは溜息をついて、言つた。

「いや、見て見ぬ振りは出来ないから。『じめん』

「は？」

ナインは少女の怪訝そうに振り返る顔が見えた。

ナインは人差し指を小さく動かした。

その瞬間、ナインと少女は青年達の前から消え去った。文字通り、跡形も無く消え去ったのだ。

「……はん？」

男達は呆然と立ち尽くした。ほつと取り残された彼らは、酷く虚しい気分になっていた。

「ああいつ奴らとはあんまり関わらない方が良いこと思ひや。じゃあな

先ほどの公園から一キロ程離れた広場で、ナインは田を瞬く少女を置いて踵を返した。

若干、俺つて優しいなあ、なんて思いながら。

「ちよ、ちよっと待ちなさいよー。」

ナインは立ち去ろうとした……、しかし手を捕まってしまった！少女の柔らかで温もりのある手が触れ、ナインは精神的ダメージを受けた！

ナインはビックリして、「

「な、何？ お礼は要らないけど」

とは言いつつも、チラッと視線を向けるナイン。若干期待に胸が弾んでいる。

勿論、脳内であらぬ妄想を抱いて、だ。

（一体いくらくれるかな、お嬢様っぽいし……）

現金な野郎である。

「あっ、と、とつあえずありがとう〜〜じゃなくて！ 今は何？」

少女の反応を見て、ああ、まずったかな、とナインは顔をしかめた。それから、少女の不思議そうに自分を見つめる視線から逃れるように、明後日の方角を見る。

「…………なんだ、えっと……瞬間移動？」

「…………あなたのランクと学校、教えてくれない？」

ああ、嫌な予感がする。明らかに見せてはいけないレベルの魔法を見せてしまったな……。

ナインの後悔は遅く、少女はしつかりとナインの服を掴んでいた。どうやら見す見す離してはくれなさそうだった。

魔力が使われるようなつても、瞬間移動は珍しい力である。

「えっと、ランクは『9』。学校は通つてない

「通つてないつて、もしかして社会人？ 何歳？」

その質問の仕方だと、大人に対する聞き方としてはなつていない。明らかに自分と対して年が変わらないと意識している聞き方だ。事実ナインはそうだったが。

「十八。

……
ちなみに、NEETだ」

答えるのにかなりの沈黙を要した辺り、最後の台詞は言いつかぢづか悩んだようだつた。

その割には、凄く爽やかな笑顔で言つたが。
まるで、その事を自慢しているような、そんな錯覚を覚えさせる程の笑顔だ。

「NEET！？ 瞬間移動なんてハイスペックなスキルを持つてる
のに！？ 働けっ！！」

瞬間、怒鳴られた。罵倒された。全然ご褒美とかではなかつた。
(だから言いたくなかったんだよな……。言つからには自信を持つて言つけど)

初対面の少女に責められる自分を情けなく思いながら、しかしそれは自分の勝手だろうとナインは思つた。

「お前には関係ないだろ？ 僕が働いていよつといま」と。それと、
学校は停学中なだけだ！」

「関係ある！ 有能な人間がNEETなんて、見過ごせないわよ！
そして、学校は停学中だなんて自慢げに言つな！」

理不尽だな、とナインは思つたが、それ以上に理不尽なの meno の後だった。

「私が勝つたら、アンタを ZEE-T から脱却せむー。」

「どうしてそうなった！？」

思わず本音が口から出てしまつたナインだが、本当にその通りだつた。

勝つたらつて何？ 勝負するの？ なんだつて初対面の女と？
俺は女の子が苦手なんだけど？

クエスチョンマークのオンパレードだつた。

「アンタの所為で、私が逃げたなんて噂が立つたら、どうしてくれるのかしら？ アンタを連中の前に引き出して、こいつが勝手にしたことですつて説明するにも、それなりの立場がいるのよ。ZEE-T に連れていかれたなんて、説明できないでしょ？」

どうやらハツ当たりしたかっただらし。

先ほどの奴らから無理矢理逃がしたのがまずかつたようである。本当に、先ほどのお礼はとりあえずの感謝だつたようだ。

幸運か不幸か、空から降つて来たのは、仕事をくれる少女だつたのだが、仕事を手に入れるには、ボコボコにされなければならぬらしい。

「勝負ではなく、「ウチの学校に入らない？」とか、「仕事紹介しようか？」などと書いた優しい誘いがなかつたのは、憂鬱な晴りじのためだらう。

「それと、ナインのちやらんぽらんな態度が原因と思われる。
(こんな奴の世話になつて仕事に就いたら、一生こき使われるつー。)

危険信号を受信したナインは、目の前にある脱ノードを蹴り飛ばした。

元々、結構今の生活が気に入っているようでもあった。

「……わかったよ、勝つたら俺の好きにしていいんだろう？」

勝つ気は無いが、負ける気もないナインは、かなり眞面目に戦いに臨んでいた。
自分の自由のために。

そして、結果は彼の逃亡だった。

プロローグ（後書き）

十万語目指して頑張ります

第一章 R P G · 1 (前書き)

4 / 19、入れ替えました。

第一章 RPG・1

そこでは、引きつった笑みの少年と、不敵な笑みを浮かべた少女が対峙していた。

二人が対峙しているのは、街の中心部にある広場。広場の目的が目的であるため、周囲は樹木で囲まれ、広く大地が剥き出しどなっている。

少年の方は黒髪で平凡なルックス、それにこれまた普通……といふか着古しの服。

少女の方は月夜でも輝く金髪に、思わず息を飲んでしまいそうな程の美しい顔立ち。黒を基調とした制服姿。

少年、ナインは、夜の帳が降りた空で、儂くも輝く星に疑問を投げかける。

なぜ俺は女子高生に殺されなければならないのだろう……と。

「逃がさないわ。そして、勝たせてもらひわよ」

「いや、だからさ、俺は別にお前に勝つてないし、勝とうとも思わない。俺にはお前と戦う理由も無い。大人しく帰らせてくれません？」

「何度言つたら解る訳？ 私には生徒会長としての意地があるの。小さな噂でも、アンタみたいな得体の知れない奴に負けたと知られ

れば、学校全体の評価に響くのよ！だから、大人しく死ねっ！」

死ねって酷いな。でもまあ、その噂が生まれたのは俺の所為かもしれないし……。

ナインは面倒そうに頭を搔き、それでも仕方の無い結末だと内心思つた。

ナインと少女が出会つたのは一日前。

ナインは少女に馬鹿にされ、売られた喧嘩を買つた所、たつた一撃で敗北……しなかつた。だが、数秒対峙しただけで戦闘を放棄、全力で逃げ出したのだった。それは、少女のスキルが異常であったが故である。戦えば命が危ういと判断し、生存本能に従つたまでであつた。

だがそれは、『空全絶護』と呼ばれる少女、名門黒領学園生徒会長様にとつては驚愕の展開。ナインはナインで眼に涙を浮かべて逃走、しかし少女に取つて倒せなかつたという結果は、その役職に汚点を残す事。少女はナインを追いかけた。

第三者目線から見ても、『もう、待つてよ』『はははは、捕まえてご覧』といった桃色の追いかけっこではないのが解る、片方が血眼、片方が涙目と言つ嫌な鬼ごっこが数日に渡つて繰り広げられた。

そして日時は変わり、現在に至つた訳である。勿論、ずっとその追走劇が続いていた訳ではない。

「……解つた解つた。相手をすれば良いんだろ？ そんで俺が負ければ良いんだな？」

諦めたようにナインは少女の瞳を見据え、近くに落ちていた木の棒を拾い上げる。おおよそどここの店に出しても売り物にはなりそうもない、本当になんの変哲も無い木の棒だった。ひのきではない。

もしかすると、どこかの世界では買ってくれたかも知れなかつたが、この世界では無理な話である。

「それじゃ黙れ。やりせじや意味無いの。むしり、そんなやりせをした事で咎められるわよ。アンタは本気で私に掛かつて来なさい。それを私が叩きのめすから」

「……本気、ね」

本気出しても、俺じゃ勝てないだろうな。てか、なんで俺がこんなことに関わらなきゃ何ねーんだ？ 何が悲しくて負けるための戦いに身を投じなきゃならないんだよ。オカシイな、目から涙が出ないよ。そつか、もう使い切ったんだ。ナインは涙の流れない目を擦る。

「で、アンタはその木の棒だけでいいの？」

「あ？ どういう意味だよ、そりゃ」

少女は舐めきった視線でナインを見る。余裕が見え隠れどけるの話ではない、だだ漏れだ。

笑みを浮かべ、ナインの手に握られた棒を指差す。

「そんなショボイ武器で本当に私に勝てるとか思つてんの？ ま、どんな武器でも私に傷一つ付ける事なんて出来ないだろ？」

「おおつと、そんな事言つてると足下揃つてやるぞ」

武器は木の棒、防具は布の服。なんて最強装備だ。負ける気はない。魔王だつて倒せそつだ。

というナインの装備の貧相さは、確かに最強レベルであった。

ナインの着ている服は、どこでも売つていそうな普通の布の服……ではない。

その服は……古着屋でも買つてくれないだろうボロボロの物であった。特殊な効果もない普通の使い古した服、値打ちは付けられない。恐らく、売ろうとしても手数料を取られる一品だ。

対する少女の服装は、明らかにオーダーメイドの莊厳な制服。金の刺繡が見られ、恐らく特殊効果を持った一品。売れば高値で売れるだろう。どこかの世界では、買値の半額もしくは十分の一でしか売れないが、この世界では中古の品が高く売れる場合が多くある。美少女の着ていた服とか、オークションでは値段がうなぎ上りになるだろう。

「どんなスキルか知らないけど、逃げ出すようじゃ勝ち田が無いの解ってるんじゃない？」

ナインは苦笑いをし、少女は不敵な笑みを浮かべ、そして戦いの火蓋は落とされた。

少女は右手を前に突き出し、何も無い空間を刀でも掴むように握る。

瞬間、右手に目視が可能な程明白に渦巻く風の刀が握られていた。少女がそれを地面に向けて軽く振ると、風の刀はいとも簡単に地面を深く削った。

少女は見せつけるような笑みを浮かべると、ナインの間合いに入り、切り込む！

「それって生身の人間が喰らつていい物じゃねえだろ！」

ナインは握った木の棒でそれを受け止めようと、木の棒を風の刀の軌道に合わせて振る。

「解つて木の棒で受け止めようとするアンタは、やっぱり馬鹿ね！」

風の刀が木の棒とぶつかり合い、木の棒はあっさりと、ナインの体はざっくりと切断され？？なかつた。

木の棒は、しつかりその攻撃を受け止めていた。

「なつ！？」

見る者が見れば、ナインの持っている木の棒に大量の魔力が絡み付き、その強度を上げている事が解つただろうが、そのスキルの無い少女は驚きを隠せなかつた。

「甘いんだよ！ 木の棒だろうと、使い手が強けりゃ最終兵器にもなんだよ！」

木の棒で風の刀を押し返し少女との距離を取るナインは、ひくついた笑みを浮かべていた。内心冷や汗ダラダラだろう。

少女の手にある風の刀は、先ほどの攻撃で巻き上げた木の葉に触れた瞬間、細切れにしていた。

人の体だろうと、きっとその結果は同じだろう。

「調子に乗るな！」

ナインの軽口に少女は怒号を上げた。それと共に、風の刃は四方に弾け飛ぶ真空刃となり、ナインを切り刻もうとする。

ナインに迫る真空刃はその過程で、地面に厚さ十センチ程の溝をつける。殺傷能力は高い。

それをナインは避ける事も出来ず、それをモロに腕で受けた。

だが、風の刃はナインに傷一つ付けることも、ナインのボロボロの服を裂く事さえも出来なかつた。

(……な、なによこいつ！　あの攻撃を受けて何ともないのつー？
どんなスキルよつー！？)

心中でかなり混乱している少女。はつきり言つて、結構本気で焦つていた。

初めて、負けを意識したかもしれない。

しかし、ナインも焦つたように言葉を吐き出した。

「おいおい。『守備力強化魔法』から『吐息系軽減魔法』、『魔力吸收』に『防御』を重ねて358ダメージかよつ！　特殊防御高めなはずなのに……何なんだよお前つー！」

意味の分からぬ台詞を並べられ、攻撃を受けても無傷でいるナインに少女はキレた。

「それはこいつの台詞よー。そんなボロ布一枚で、なんでアンタは

「無事なのよ？」

「無事？ めっちゃダメージ受けたよー？ 死ぬかと思ったー？」

「……私は殺すつもりだったんだけどね」

怖い、と少くなくナインの心の中では、逃走といつ選択肢に再び票が集まり始める。

男に一言は無い、そんな時代は俺にはありませんでした……、と後に彼は語る。命より大切なプライドは持ち合わせていないらしい。ナインは少女をじっと見つめた。少女は何よと睨み返す。そして、

「ネーム『朝井愛葉』…………ね

少女の名前をよんだ。それは、呼んだ、というよりも、読んだと言つた方が適切な雰囲気だつた。

「ちょっと！？ なんで私の名前知ってるのー？」

ナインは面倒臭そうに少女、愛葉を見つめる。

見つめられた愛葉は、名前を言い当てられた事の困惑とナインの観察するような視線に困惑の表情を見せた。

愛葉は自分の格好を見直して台詞を思い出せば、もう少し冷静でいられただろう。

ナインは見つめて……、愛葉の質問は無視した。

「気絶させるのが簡単だと思つたんだけなあ。俺は攻撃魔法あまり

得意じゃないし、傷つけたくないし、何より死にたくない。……逃げるか

「ちょっと！ 逃がさないって言つてるでしょー！」

「やりとナインは笑つた。その笑みは、ここ数十分で見せたどんな笑みより自信に満ちていた。
いや、結局引きつっていたが、

「生憎、この世界ではイベントバトルでも逃げ出せるんだ。俺は無駄な争いは好まない質だし」

ナインの意味不明な言動に内心顔をしかめつつ、しかし愛葉は微笑を浮かべる。

逃走宣言が、愛葉の闘志に火をつけた。

「へえ、この『空全絶護』から逃げ切る自信があるんだ。さつきは諦めたみたいだけど」

自信に満ち溢れた顔で、愛葉は少年を睨む。けれど少年はそれを嘲笑うような笑みを浮かべ続けて言つた。

「まあな。それじゃあな、『騒然節子』さんっ！」

「誰が節子だ！」

瞬間、轟！ と暴風が吹いた。

見れば、軽自動車をも巻き込まんばかりの竜巻が少女の周りに出来上がっていた。一トンもの重量を持つ物体を軽く渦巻かせる風力

に、当然人間は地に脚をつけている事は出来ない。

ナインは消えてしまった。

「嘘……ほんとに逃げられた」

愛葉は笑えなかつた。

先ほど作り出した渦は捕獲用の物で、ナインを捕えた感触は確かに合つた。けれど、渦に捕えたはずのナインはどこにも見当たらぬい。それどころか、無理矢理渦を突破された感触さえ合つた。

愛葉は体が震えるのを感じていた。

夜の闇が深まり、肌寒く感じる気温となつてるのでそれは当然とも思えるが、『空全絶護』にそれは無い。

空氣に干渉する現象全てを操るスキル保持者、『空全絶護』は気温を常に自分にちょうど良いように合わせているのだ。

だから、その体の震えは、戦慄だったのかもしれない。

「危なかつた。まさかあの竜巻、真空刃やら石片を含んでいるとは思わなかつた。しかも若干捕われたし。生身だつたらピンチでミンチだな。今度会つたら注意しとくか？ いやいや、会いたくないな。あの手のタイプは負けず嫌いだからな。どうなるかは田に見える」「

ナインは心の底から溜息を吐き、床に座り込む。非常に虚しい独り言を呟いて。

そこは都心から少し離れた住宅街の一角にある、付近を林に囲まれた洋館だった。

池がある広い敷地内に、三階建ての古めかしい洋館。それを守るような立派な門と周囲を囲む柵が特徴だ。

少年は『RPG』を解き、『^{ステータスアイ}算出眼』で自分の状態を見る。

「あ～、HPが残り312、MPに至つては7かよ。冗談じゃねえな。俺の特殊防御は687あるけど、比較対称が無いから解らない。だが、きっと高い方だ。と言う事は、あの女の攻撃が強すぎるってことか。今度参考にステータス見せてもらつか……って、出会った瞬間バトルになっちゃえば意味が無いか」

世知辛い世の中だな……、とナインは呟いた。

第一章 RPG・2（前書き）

11 / 20、書き換え。

「ほら、俺逃げたじゃん。あれは負けだからさ、も‘止めよ’が？」

黒髪の少年、ナインは面倒そつに頭を搔いていた。

「逃げた？ なんで逃げられるのよ！ おまけに無傷とか、『冗談じゃないわ！ アンタをボコボコにするまで私のプライドが許さないのよ！』

金髪の少女、朝井愛葉は憤っていた。

腰まで伸びた奇麗な金髪にピヨコツと立った毛が特徴の少女である。大人しく座つていれば高嶺の花になろうが、今の彼女はさながらライオン。

予想以上に面倒だ、ナインは遠くを見ながらそう思つた。

場所は少女、愛葉と出会つた公園だが、時刻はいつもよりだいぶ早い一時となつていた。いつもは三時、学校が終わつた頃である。ちなみに、いつもと言えるくらい頻繁に遭遇するようになつてしまつていた。

「そう言えばさ、なんでお前今ここにいるんだよ？ 学校じゃ……、もしかして一般人相手に魔力使つたのがバレて、停学とか？」

「例えそうだとしても、アンタにだけは笑われたくないわ。人として最低限のルールを守れないアンタにはね」

むつ、と感慨深く悩んでしまうナイン。

ちなみに、この話題が原因で彼は少女と喧嘩、その後の逃走劇、

そして戦闘という過去がある。

「そうですね、試験で不正行為するような俺はお前を笑っちゃ駄目なんでしょうな。社会の底辺の俺は、社会の頂点のあなたに何一つ敵いませんからね。ごめんなさい、無事に帰してください。もう声かけませんから」

そこはかとなく馬鹿にしてる気がする、と愛葉は怒りに体を震わせていた。

ちなみに、その様子を食い入るようにナインは見ていた。いや、凝視していた。

「その社会の底辺に傷一つ付けられないなんて、社会の頂点として恥だわ……。ランク『9』のアンタをみすみす放つておくなんてね

「……ネーム、朝井愛葉。クラス、魔兵専門学校黒嶺学園生徒会長。ランク『S』。特性、物理特殊攻撃無効化。……まじか」

ナインは愛葉を見続けている。

「…………何言つてるの? なんだこっち見てるの?」

「スキル『空全絶護』、空気に関する森羅万象を操作する能力。……スペック高いな。さすが生徒会長」

ナインは愛葉を観察するよつと見ていく。

「ステータス。攻撃380、防御445、特殊攻撃1083!?
特殊防御514、素早さ812……ね。けど、『空全絶護』のスキルが大抵のステータスを増加させるな

「何こいつ見てんだ、この変態つー！」

よく今まで怒らなかつたと思える程、ナインは愛葉を凝視していた。愛葉の叫びは当然である。

瞬間、風の刃がナインを切り裂こうと放たれた。喰らえば四肢が切斷されるのは必至である。

「危なつー。」

それを転がるように避け、ナインはキッと愛葉を睨みつけた。

「危ねえだろ！ 避けなきや死んでたぞ」

「どうせ無傷なんでしょうー。」

そう言つて無数の風の刃を生み出し、次々と放つてくる愛葉。対して本当に無傷のナインは、

「ああくつそ！ 解つた！ ちょっとタンマーー 一回落ち着こいば
朝井！」

「だからなんで私の名前を知つてんのよー。」

火に油を注いで必死に逃げ回るナイン。

照れ隠しと言つよりは、機密保持の抹殺と取れるような攻撃をしかける愛葉。

平和とは言いがたい状況だつた。

しばらくそんな調子だつたが、不意に立ち止まりナインは高らかに吠えた。

「解った、相手してやるー。そのかわり俺が勝つたら飯をおいじってもらおうー。」

一時攻撃の手を止め、愛葉も同じように叫んだ。

「上等！ 私が勝つたら、アンタを血祭りに上げて曝し首にしてあげる！」

昼間だったが、走り回って以前に戦った広場に来ていたため、二人の発言は彼ら以外に聞こえていなかつた。

ナインは人目を気にして広場まで走つたのだが、愛葉はどうにもそんな事は考えていないようである。

きっと、人がいても先ほどの発言をしただろう。

（あれ、条件酷くね？ ってか負けたら俺死ぬじゃん。死に花散らしても良いけど、死に恥咲かせたくないぞ俺）

ナインのやる気が、死ぬ気に変わつた。
が、時既に遅し、ナインは風の渦に包囲されていた。

以前に見せた竜巻の改造版だろうか。その渦の範囲はとても狭く、ナインを中心に田舎しく回転している。渦の中には小石などが巻き込まれており、無理矢理突破しよう物なら、たちまちミンチになる所は以前と同じだった。

「チェックメイト、かしら？」

不敵に笑みを浮かべる愛葉に対して、ナインは動けなくなつていた。

勝負するなどと宣言する以前から、戦いは始まつていたのだった。

宣言したのも戦いの最中、宣言するため止まつたのも停戦中でない。この時代、重要なのは勝利と言つ結果だつた。

「正々堂々の戦いとかしないんだ。黒嶺学園生徒会長としての誇りとか無いの？」

苦笑いを浮かべながらナインは計算、そして指を立てていた。

(『守備力強化魔法』、『吐息系軽減魔法』発動)

「さつきからアンタ、どうしてそんなに私の個人情報知ってるのかしら？ その情報の出所を聞きたいや。教えてくれたら、曝し首は止めてあげる」

「血祭りは避けられないんだな（ナインだけに）」

ナインは自分のシャレに小さく笑いながら指折りを、愛葉は話すのを続けた。

(『魔力障壁』発動、『加速魔法』発動)

「勝てばランクが上がつて、負ければランクが下がる。ランクは就職に大きく関わつてゐるつて解つてるの？ アンタが無職で学校に通えないのも、その『9』なんてランクだからじやないの？ 仕事付きたかつたら、手段を選ばず勝ちに来なさいよ」

学校に通えないのではなく、停学後に通つていないので、対して差がないのでナインは無視する。

「本当に酷い格差社会だよな、今の世界。それで、お前はそれに納

得してゐるのか?」

「良いんぢやないの? 才能が有れば過(?)しゃすい世界よ?」

そつか、とナインは辛そうに咳を、指折りはもう止めており、そして。

「俺はさ、そんな世界が嫌なんだよ。ランクだとか、無理矢理戦う理由を作ってる氣がするし。魔法は争いのためにある物ぢやないと、俺はそう考へてる」

「……魔法?」

愛葉はナインの言動を訝しむ。

魔法。

それは何百年も前に忘れられた力。発展可能な科学と違い、魔法はその原理の解明が不可能であり、扱える人間を選んだためだ。

侵略戦争以後、魔法の存在を世界は認めたが、魔法の存在は埋もれたままだ。

現に、魔力を使う者を能力者と呼び、魔法使える者を魔法使いと呼んで差別している。

(もし)こいつが魔法を使えるのなら、私とやりあつて無傷でいられる理由も解る。『9』なんて巫山戯たランクも理解できる)

田の前に現れた好敵手に、愛葉は獰猛な笑みを浮かべた。

(私は勝たなきや駄目。絶対に引けない。負ける訳にも行かない。
勝たなきや??)

決意を新たにした愛葉の思考を読んだよう、ナインは言った。

「お前にどれほど理由があつとも、俺には関係ない。悪いけど、創られた感情は見飽きたんだ。負けてもランクは変わらないから、安心して負けな」

はつ、と愛葉はそれを笑い飛ばす。思考を読まれたことを感ずる。「アヒ。

創られた感情、その一言に搖さぶられた心を感ずる。アヒ。

「調子に乗つていいのかしら？ アンタ、私の巻の中にいるのよ」

その台詞を無視して、ナインは自分の言いたい事を最後に言った。

「ちやんと飯奢れよ？」

ナイン、今日の収入はゼロ。

晩ご飯の当ては……無かつた。

食べるために戦う。

なんというか、生物としては間違つていながら、人間としては最低な理由で、ナインは愛葉との戦いを認めたようだった。

理由が無ければ戦えない、逆に言えば、理由さえあれば戦うようだつた。

第一章 RPG・3（前書き）

12 / 2若干付け足しました

第一章 RPG・3

俺に戦う覚悟はあるのか?
誰かを傷つけてまで求める結果を、俺は持ち得ているのか?
答えは……。

ナインは愛葉に向けて駆け出した。竜巻など関係ない。

「え?」

ズタズタの血祭りになる、そんな愛葉の予測を裏切った結果になり、思わず声が漏れた。

ナインが竜巻に脚を踏み入れた途端、竜巻は弾け飛んだ。否、それは言うならば、無理矢理消し飛ばされた??、そんな表現が正しいだろう。

竜巻を破壊し、ナインは愛葉との距離を縮めるべく脚に力を込めた。

瞬間、踏みしめた足下から土煙が舞い、弾丸の如く加速させる。

「????????????????????」

「ゴッ! と空気が爆ぜる音がして、一人の間で大きな土煙が起つた。

迫るナインと自分の間に真空を作り出し、その真空に流れ込む空気の流れに身を任せ、愛葉は無理矢理ナインとの距離を取つた。

『空全絶護』の自動衝撃吸収機能を使い、愛葉は自分の背後にクツシヨン用のエアーを生み出し、地面に叩き付けられるのを回避する。

(真空刃でどうにかダメージを『えられたと思うけど……、それにしてもちょっと強引な避け方よね。空に逃げた方が良かつた?)

体勢を立て直しつつ、先ほどの自分の行動を反省する愛葉。 真空を生み出し、そこに流れ込む空気を利用して攻撃する真空刃だが、攻撃回避にはあまり向いていないのだと再認識する。 本来の彼女ならする事の無い失態。だが、本来の自分でいられなくなる程、愛葉は動搖していた。 そして、

「11ダメージ。完全に防げたと思ったんだがな……」

動搖させた人物、ナインは埃を叩き落としながら、平然と立っていた。爆発から1メートル程しか離れていない。

「……だから、なんでそんな布切れすらも無事なのよー。」

愛葉の指摘通り、ナインの服にはかすり傷一つない。完全に無傷だった。

……まあ、服の方はもともとボロく、一昔前のファッショニ似ていたが。

「理解できないだろ? から教えない」

「あつそ!」

愛葉の周囲を、彼女を守るように風が渦巻き始める。

それを見ていたナインは、一瞬だけ、右手の小指だけを折った。

瞬間、ナインの周囲にも同様の風の渦が出来上がっていた。

「……へえ、アンタも風使い?」

「まさか。『風護魔法』って感じかな」

だが、それは一瞬で弾けるように消え去った。

「残念。空気は私の味方よ?」

空気を掌握する能力『空全絶護』相手に、風を使って何かするの
は間違いだった。

ナインは肩をすくめ、ひつそりと次の魔法を発動させた。

「けど魔法……ね。それなり、これほどか。」

愛葉の声と共に、空間が歪んだ。

それはよく見ると、空気の槍がナインを囲むように展開している
ためだった。

1メートルを超える何百本もの風の槍が、隙間無くナインを取り
囲んでいた。

「一步でも動けば串刺しよ」

「……そりゃ怖いな」

だが、それでもナインは動いた。

瞬間、なんの躊躇も無く、槍はナインに全て直撃した。

だが、ナインの体に変化は見られない。

逆に、それを見た愛葉に変化が見られた。恐怖と驚愕に顔が強張つていた。

「……総計500ダメージ、か。『魔法反射壁』で相殺したと思つてたらこれが」

ナインは面倒そうに言つて、はあ、と溜息をついた。

「……やっぱ無理かな」

その弱気な発言に勝機を見出した愛葉は、ひつそりと能力を最大解放。

大気中に霧散している魔力をフルに活用する。

「……アンタさ、正直す」と思つわよ。私の攻撃で無傷なんてね

「そりゃどうも。無傷じゃないんだけどな」

「アンタのスキルがどんな物か知らないけど、絶対に弱点はある。アンタに勝つには、それを付けば良い話。そうでしょ？」

「そりだけど、解つてんのか？ 今まで何度も俺がお前の攻撃受け來たか。そして、その結果が無傷なのを」

愛葉は憎々しげに額をつつも、自分の出せる最高の力を放つ準備をする。

空に暗雲が立ちこめる。

「そうね。でも、アンタも解ってるんでしょ？ 私のスキル『完全絶護』の前では、どんな攻撃も無意味だつてこと」

「ああ解ってる。……だからって、引き分けに終われない事もな。解つた、受け止めてやるよ。お前の最高の力つて奴を」

愛葉のじょうとしている事を見透かし、ナインは笑みを浮かべた。

「アンタが立っていたら、アンタの勝ち。解りやすいでしょ？」

獰猛な笑みを浮かべ、愛葉言つた。
そして。

大地を震撼させる程の落雷がナインを直撃した。

『完全絶護』のスキルの最大能力は、天候すらも支配する事。天候・気温・湿度・気圧など、そのスキルの影響範囲は非常に多い。風を操るだけのスキルではないのだ。

攻撃という観点に関しては、例を挙げるならば気温調整・気圧変

化・酸素濃度調整などの特殊攻撃の方が優れているスキルだ。最も、物理攻撃に置いても、真空刃・竜巻・雷などがあり、十分な火力を持つ。リスクとしては、処理魔力が大きい事か。

だが、真空を生み出せる能力者である彼女が、大量の魔力を処理する物理攻撃をし、様子をみる必要性は無い。したがって、ナインには特殊攻撃が何一つ効かなかつたと言つ事である。

愛葉は先の戦闘で口にこそしていながら、既に特殊攻撃は仕掛けていた。

特殊攻撃を見透して防ぐ事は不可能に近い。気温、気圧、酸素濃度などは、眼に見える現象ではないからだ。

しかし、結果から言つてしまえば、それらの特殊攻撃はナインに防がれていた。

どんなトリックを用いたか定かではないが、ナインは汗一つ搔く事も、気圧減少によつて（大げさだが）爆発をすることも無く、酸素皆無の状態でも息苦しい様子を一つも見せなかつた。

そして、

「俺の勝ちだ、生徒会長」

「……嘘でしょ」

大地を削る程の雷を受けても、ナインはその服を焦がす事も無かつた。

愛葉のスキルで最高の威力を持つ雷をまともに受け、それでもナインは立つていた。

愛葉の持つありとあらゆる能力を全て無効化した、そう言える結末だった。

「飯、奢つてもらうぜ」

ナイインはにっこり笑みを浮かべた。

第一章 RPG・4（前書き）

今回は用語が多いです。

11／30、感想で指摘を受け、若干変えました。

2／5、一点変更。

「意外と律儀だな。俺は何を奢れとは言わなかつただろ？ そじらのジュース一本でも良かつたんだけど」

「そういう訳にはいかないわよ……。負けは負けだもの。安心して。ちゃんと私の奢りだから」

愛葉の意外に素直な一面を見ながら、ほっと安心したように溜息を吐くナイン。

夕方、彼らがいるのは普通の家族向けのレストランだ。先ほどの勝負の結果、愛葉がナインに食事を奢るために来た場所である。幸いかどうかは定かではないが、客は家族連れが多く、彼女達が浮く事はなかつた。

価格は家族向けと言う事も有り、無難にワンコイン、もしくは一枚で頂ける料理ばかりだ。

しかし、このナインと言つ少年に取つて、ファーストフードと呼べる価格以上の料理は、実は食べた事が無かつた。食べたいとも思わなかつたが。

そして、もしも奢りではなかつた場合、臨時皿洗いのバイト君になつてしまつような手持ちでもあつた。

「ありがとうー！」

「……………そんなにお金がなかつたの？」

先ほど自分を殺そうとした相手に感謝するナイン。それを複雑そうに眺める愛葉。

ナインの前には、ハンバーグ定食。愛葉の前にはシーフードバス

タが並んでいる。

一いつ合わせて税込み千円（内訳、ハンバーグ480円、シーフードパスタ520円）、それで殺人未遂事件は穩便に、平和的に解決を迎えていた。

「アンタ、本当に大丈夫なの？」

「…………実際はそんなに大丈夫ではない」

愛葉は、ナインの財布と先ほどの戦闘を氣遣つており、ナインは自分の先ほどのダメージを語っていた。

「やうなの？」

きつと財布の中身の話だつて、と愛葉思つ。なんだかんだ言つて、結局自分はこの少年に傷一つ付ける事は出来なかつたのだから。

しかし、ナインは若干とがめるように愛葉を見て言つた。

「あの攻撃が魔力で創られた雷だつたら、ノーダメージだつただろうけどじな。『魔法反射壁』で完璧に抑えられた。が、あれは天然物の雷撃…………つていう表現は変か。そんな事はどうでもいいが、アレは正直まづかつた。アレを受けて死なない奴なんてほとんどいないと思う。だから、使う相手を選んだ方が良いと忠告させてもらつかな」

「…………へえ。そう、今度から気をつけるわ

愛葉はさらりと言われたノーダメージ発言に若干むかつと来たが、しかし負けは負けだと諦める。そして、逆に自分がこの少年を追い込んだ事に驚いてた。

これまでの戦い、確かに少年はダメージを受けたと言い続けて来たが、それはどこか余裕のある台詞だった。しかし、今回ばかりは本当に危なかつたらしく、茶化したような台詞が戦闘後には見られなかつたからだ。

まあ、本気を出したのだから、それくらいの反応が無いと困る、というのが本音だったが。

「でも結局、アンタ無事なのよね」

「まあな」

ナインは忠告をほとんど聞いていない愛葉に若干危機感を覚えるが、それ以降は何も言わなかつた。

時代は、勝つ事を求めている。

相手の生存に関わらず。

この世界に魔力が満ちている事の証明は、奇しくも戦争中だつた。戦争、数年前でありながら今とはまるで違つ世界、世界がまだ科学だけを発展させていた時代。

宇宙からの侵略者に地球の科学は乗っ取られた。科学兵器は歯が立たず、情報は筒抜け、地球人の滅亡が眼に見えた、その時だつた。その人物達は、たつた七人で侵略を止め、そして侵略者を滅ぼした。

放された銃弾は空中で止まり、天候は指を鳴らすだけで変わる。爆発は时空の彼方に消え去り、死者は傷を治され甦る。

いくらか誇張されてはいるが、それはまぎれも無くその当時起きた事。

世界の法則を丸ごと変えてしまうような出来事。

それは奇跡としか形容できないような事件。

まさしく、魔法。

七人の一人、現日本首相、秋山雪日あきやまゆきのひは言った。

『世界には魔力が満ちている』

そして現在、世界は魔力の存在を認め、それを用いた技術開発に当たっている。

魔力の証明から数年、まだ魔力については解らない事が多いのは事実だ。

だが、高々数年で世界がここまで変わったのも、事実だった。

「ところで、アンタ。魔法ってどういう事？ 私の聞き間違いないいいんだけど」

「……魔法は、魔法だ」

「つてことは、アンタ魔法使い！？ でも、ランクがあるし、スキルを持つてるのよね？」

「そう。だから、魔法使いとは違う」

魔力の存在が世界的に認められ、侵略者には扱えない特殊なエネルギーとして開発が進む中、その問題は生まれた。

特殊な体质、血統を持つ者でしか魔力は扱えないという問題。

生まれながらにして魔力を扱える者……彼らを、魔法使いと呼ぶ。

ただの一般人が念じては、指先に火が灯る事も、空を飛ぶ事も出来ない。

だからと言って、魔力を扱える人間だけを兵士として育成するの
は、人種差別、ひいては魔法使いの独裁する世界となってしまう。
なんとかして、魔力を誰でも扱える物にしなければならなくなっ
た。

そこで生まれたのが、『スキル』だった。

特殊な機器を用いて、魔力をエネルギーとして変換できるように
脳にプログラミングを行い、魔力変換機とする。内容、『スキル』
は、人によつて違う。脳の処理能力が人によつて違うからだ。

例えば、魔力を炎に変換するスキル保持者は比較的多い。便利で
あるし処理が簡単で、ほぼ万人に使えるものだ。

例えば、空気を自在に操る『空全絶護』。この能力者は現在、朝
井愛葉ただ一人である。それは彼女自身が生み出したスキルであり、
脳のスペック的に彼女しか使えないためだ。

脳、そのメカニズムは未だに解明されてはいない。そのため、当
初はそれを非人道的だと非難する科学者もいたが、今では全人類が
受けていると言つても過言ではない。したがつて、脳の性能の良さ
イコール強さとも言える世界である。

例外は、魔法使いだろう。彼らは『スキル』無しで、魔力を扱う
事が出来る。

この技術により、魔法使いと同様に誰でも魔力を使えるようにな
つた。

全人類が魔力を操れるようになることで、魔法使いの目立つた差
別は生まれなかつた。

「それなら、アンタは一体何者なの？ 攻撃した私が言うのもなん
だけど、普通のスキル保持者じゃあの攻撃を捌けないとと思うんだけ
ど……」

それなら使うなよ、などと小さく咳きながら、ナインは水を飲む。

『RPG』

それがナインのスキル。

ありとあらゆる攻撃、森羅万象に対して干渉する万能の緩衝剤、HPを生み出すスキル。

自分が受けた攻撃を数値化し、それに応じてHPは消費される。そのかわり、自分に対する攻撃は完全に無効化するスキルだ。

ちなみに、その消費されたHPは食事、睡眠で回復される。食事、*1 kcal*につき、HPが1回復、睡眠で全回復するというようにプログラミングされている。

ナインは自分が受けたダメージは、奢らせて回復するという算段だったのだ。
しかし。

(……本当にあの攻撃はまずかった。今日は大体1500くらいHPがあつたのに、あの攻撃で一桁にされた。……正直、ここに来るまで攻撃されなくて助かった)

HPはカロリーとも置き換えられるが、だからと言って体を動かすために使うエネルギーをHPで使っている訳ではない。カロリーは変数でしかない。

今回のハンバーグでの回復は、およそ800。ちなみに、彼がいつも飲んでいるコーヒーは、200程度回復してくれる。

ちなみに、HPが0になつたからと言って、彼は死ない。

あくまで緩衝剤、彼の生命力とは一切関係ない。

戦闘以外で使つていると、小石がぶつかつた程度でもHPを消費するので、『RPG』は戦闘時のみ発動させている。

「そう言えば、負けてもランクが変わらないって言つたけど、それどういう意味なの？」

「……質問ばっかりだな」

「当たり前でしょ？ アンタは私の事をなんか色々知つてたけど、私はアンタのこと何も知らないんだから。不公平じゃない？」

「…………」

愛葉の台詞の裏には、次は倒す、という決意のよつた照れ隠しのような感情をナインは見た。

『ステータスアイ
『算出眼』

スキルとは別に、生まれ持つた特性と言つべき能力。

ネーム・特性・スキル・ステータスを見る事が出来る特殊な眼。これにより、相手の弱点を突く事が可能になるが、『RPG』発

動中にはネームしか見えないため、戦闘中にはあまり役に立たない。

『算出眼』保持者は他にもいるようで、それぞれ見える物は違うらしい。

「それじゃ、『ちやうせき』

「ん。どういたしまして」

食べ終え、食事中に大方話していたので、一人は外に出た。

「アンタ、私に勝てる程の腕前ならさつと学校通うなり、仕事に就きなさいよね？」

「……なんだ。心配してくれてんのか？」

「ちっ、違つわよ！ アンタがNEETのままだつたら、それに負けた私の立場が無いじゃない！」

「あつそ。ま、お気遣いどりも」

しつと返事をしたナインだが、その背後をジト目で睨む愛葉には気付いていた。

（そりいえばなんだかんだ言つて、最初に喧嘩になつたのも、俺を中心配してくれていたからか？ ……生徒会長を務めるだけあって、ある程度の人格者だな）

ある程度の人格者が、プライドのために自分を殺すような攻撃をするものだろうか？ という疑問をナインは抱かないようだ。

「それじゃ、じゅあひままでした」

「ん。次は負けないからね？」

「え？ 次なんてあるのか？」

「え？ 当たり前でしょ？」

「……嫌だ。血祭りで曝し首とか、嫌すぎる」

と、引きつった笑みでコチラを見るナインに気がついたのか、しれつとした顔で愛葉は笑つた。

「何言つてんのよ。あんなの冗談に決まつてるでしょ？ 私が勝つたら、アンタにはNEETを止めてもらつわよ」

さすがに少し不思議に思ったのか、ナインは愛葉に尋ねた。

「なんでそこまでして、俺のNEET生活に口出しするんだよ」

「なんでってそりや、有能な人材は有効活用しないと駄目じゃない?
アンタ、もう少し自分の価値を見直した方が良いわよ?」

愛葉の人を物扱いする台詞にナインは溜息を吐く。

(「コレくらいで苛つくなよ、俺。まあ、そんなこと言つても無理か。
だから? ?)

「だから俺はNEETなんだけどな」

誰でも魔力を扱えるのなら、他人より劣つたスキルの持ち主は必要ない。

それがこの世界の現状だ。

「じゃあな、もつこりごりだ」

ナインは自分を睨む愛葉の視線から逃れるようにして背を向け、
そして人差し指を折り曲げた。

瞬間、ナインの姿は愛葉の前から消えた。

「……結局、何者よ、アイツ」

愛葉は大きな溜息を吐いた。

愛葉が黒みがかつた空を見ながら、家へと向かつた。

同時刻、ナインは洋館、さつさと眠りこついていた。

『転移魔法』

マーキングした場所に瞬く間に移動する魔法。高速で空を駆けている。

ナインは、1024種類の魔法操ることが出来る能力者だ。

『守備力強化魔法』、『吐息系軽減魔法』などの補助魔法が大半を占めているが、中には『雷撃魔法』やら『重力魔法』、『再生魔法』などもある。

魔法は、RPGの魔法使い同様、MPを消費する。というよりも、

『RPG』のスキルがMPという制限をついているのだ。

HPがあるから、MPがある。

HPという万能の緩衝剤を生み出すには、彼の脳ではスペックが足りなかつた。そのため、本来ならば自在に扱えたはずの魔法に制限を掛けた。

MPはHP同様、飲食、睡眠で回復する。

HPは一時間ごとに500、MPも50回復する。ただし、寝ると最大値はHPが2000、MPは200に設定される。

寝ている途中にイベントが発生すると回復が中途半端だつたり、回復していなかつたりしてしまつ設定だ。

『RPG』は言つまでもなく、ロールプレイングゲームをモデルに創られた、お遊びのスキル。

魔法の代名詞とも言える詠唱が無いのも、ゲームでいうショートカットキーと同じよう、魔法を彼の指に連動させているからだ。

「勇者の模造品」と呼ばれるだけの力を、ナインは有していた。

第一章 RPG・4（後書き）

最後までちゃんと読んでくださった方、おつかれさまです。
次回からストーリー、ここまでがプロローグみたいな物です。

11/30 HPを一時間で500、MPを一時間で50回復としました。

2/5 『瞬間移動魔法』『転移魔法』に変更しました。

「本当に、やんのか？」

青年は顔に微かだが恐れを貼付け、少女に尋ねた。
黒い前髪が鬱陶しいほど伸びている、目つきの悪い青年だった。
その青年に話しかけられた少女は、黒領学園の制服を着ており、
恐らくその生徒だろう。

そうでなければ、コスプレ趣味となる。

「当たり前でしょ。今更怖じ氣づいたの？ そんなんだから？？」
「おつと、その台詞は禁止だ。俺達と共に行動する以上、その台詞
は止めてもらひうか」

少女の青年を見下した発言を、別にいた茶髪の青年が遮った。少
女は露骨に嫌な顔をするが、言いかけた台詞を改めて言おうとはし
なかつた。

「何よ、本当の事じゃない」

「確かに本当の事だが、しかしその単語は人種差別に値する。せめ
て『反乱分子』とでも呼んでもらおうか。その方がまだましだ。協
力関係にあるのを忘れてもらひうては困る」

「……ちつ」

「それでは、今後の計画について話そつ」

『幻想卸し』^{イメージダウン}と呼ばれる青年は、少女の態度に嫌な顔一つ見せず、

その計画の全貌を明らかにした。

四月も終わる今日、ナインは久々に取り戻した日常を満喫していた。

「うふ。やっぱり『うじや無こと』な、俺の生活は」

彼がいるのは、いつもの公園の「ブラン」。時刻は四時過ぎ、愛葉が来るいつもの時刻は三時。

という訳で、女子高生に殺されそうになる、そんな日常は終わりを告げたようだつた。

あの日の勝利以降、愛葉との戦闘行為は起つていない。愛葉と顔を合わせる事があつても、物欲しそうに田を向けては何かを奢つてもらつていいだけだ。

その度に、『捨て犬!』とか『ボロ雑巾!』、『餌付けされた家畜か!』などと罵詈雑言を浴びていたが、特に気にはしていなかつた。そして愛葉も、優しさか哀れみなのか、ジュースなどを奢つてあげていた。

……やはりこの男にプライドは無いんだろう。ナインだけに。

「平和万歳!　この一杯のために俺は生きている!」

一人、缶コーヒーで乾杯をしているナインは、もしかすると、とても痛い子かもしれない。仮にそうでなくとも、傍田から見れば痛い子だったが。

今日も今日とて、彼はNEETなのだ。

「しかし、本当にまずいな」

ナインは「コーヒー」を飲み終え、リングプルを回収。財布にそれを入れるため、財布の中身に手を落としながらそんな事を呟いた。空き缶を近くの「ミニ」箱に入れながら、彼はそれを二つ締めくへつた。

「「」のコーヒー」

「なら何故飲むのー?..」

と、誰もが思った事だがきっと口に出しては言わないだろう事を、愛葉は叫んだ。

「ん? いやね、決して嫌いという訳ではないんだ。たださ、苦い物はどうちらかと並つと苦手なんだよ」

「いや、それなら別の物飲めば良いでしょ?」

「そうですね。」の男は馬鹿じやないでしょ?」

「いやいや、ちやんと理由はあるわ。苦手な物も何度も食べてれば慣れるだろ? 朝井との関係と同じだ」

「……何さらりと酷い事言つてるのよ」

「「ん?」

と。

なんだか自分を小馬鹿にしている第三者がいるのにナインが気付くのと。

その第三者が、「」の男が会長に対してもう言を吐いたと氣付いたのは同時。

そして。

「会長を侮辱するとは何と無礼な! 死ねつー」

残念な事に、ナインが何かを言つ前に、手（暴力）が出された。

手。魔力で象られた、巨大な腕。

人の体程の大きな手が。

ナインを真横からぶつ叩いた。……ビンタ、と形容しても良いだらう。

「いつ――!?」

しかしナインは無傷（700ダメージを受けたが）、吹っ飛ばされる事も無く立っていた。

大ダメージ、しかし傍目から見れば無傷。

内心、本当に死ぬかもしれないと思つていた。冷や汗が止まらない。動悸も止まらない。動機は解らなかつた。

なんとか間に合つたレベルの防御だつた。その証拠に、『RPG』発動後に『守備力強化魔法』が使えず、『RPG』発動が間に合わなかつた場合にと、腕での防御もしていた。

「なつ――!？」

「…………」

「な、なななななななななな――!　いきなり何すんだよ!」

ナインに攻撃を防がれ呆然とする第二者。既に似たような経験があるがそれでも驚いている愛葉。平和な日常がものの数分で壊され困惑するナイン。

三者三様の反応、三人はお見合によろしく立ち尽くす結果となつた。

ネーム、倉崎リオ。ランク『A』。クラス・魔兵専門学校黒嶺学園副会長。特性・自動防御。
スキル『腕打振^{マジックアーム}』、魔力によって構成される巨大な腕を生み出す能力。

それがナインの『算出眼^{ステータスアイ}』で視れた第三者の詳細。

じつと見つめたのが悪かったのか、ステータスを見る事はできなかつた。

代わりに非難の目を浴びる事になったのは、些細な事である。人を観察するような目で見るな！ との事だったが、実際に観察紛いの事をしているので何とも言えない話だった。

「えっと、紹介するわね。」ちらウチの学校の生徒で、私の後輩、副会長の？？

「……倉崎だ」

倉崎は黒嶺学園特有の黒色学ランのホックを留め、同色の学帽を深く被つた、首筋まで伸びた黒髪と中性的な顔立ちの持ち主。

先ほど見つめていた所為か、かなり警戒したようにナインを睨んでいた。

いや、ナインが気付いていないだけで、最初から睨むような視線ではあったのだが。

「で、えつと…………。」ほん。といふでアンタの名前つて、なんだっけ？」

「あ～、そう言えば教えてなかつたな」

「会長！　名前も知らない奴だつたんですかーー？」

「そうね。でも、悪い奴じやないと思つわ」

「…………そりやどうも。少なくとも、出会い頭に突然殺そうとはしないぞ。…………どつかの学校の生徒会よろしく」

「貴様、死にたいのか？」

凄みを利かせナインを睨む倉崎に、愛葉は一言。

「大丈夫、気にしなくていいから。こいつの台詞には塵程も意味なんて無いから」

「わかりました会長。馬の耳に念佛、暖簾に腕押しですね」

倉崎はぱつと愛葉に笑顔を見せる。

そんな一人を見て、たつた数回の会話で、ナインは理解した事がある。

(俺はこいつらが苦手だ)

元々愛葉にしても苦手意識はあつたものの、先ほどの缶コーヒーと同様慣れて来ていた。しかし、ここにきて事態は急展開を迎えている。

愛葉が連れて來た後輩、倉崎は明らかにナインに敵意をむき出している。さらに愛葉は、後輩の前での面目を保つべく、粗忽な態度を取り始めている。

よく考えてみると、愛葉のその態度は、出会つた直後以外だいたいそんな態度だったが。

「で、アンタの名前は？」

「はて、一体どうして俺はそれに答えなければならないのだらう。

俺と朝井は友達だつただろうか？　いや、違つだらう。言い表すなら犬猿の仲だらう」

「……思つてゐる事がだだ漏れなんだけど」

「明らかにわざとですね。会長、こんな奴放つておきましょ。関わるだけ人生の無駄です」

愛葉の制服の裾を引っ張り、さつさと行きましょと急かす倉崎。対して愛葉は、どうにもそれでは駄目だと思つてこるようだ、なかなか動こうとしない。

「なんか用でもあつたのか？」

悪ふざけも行き過ぎれば憎悪の対称でしかない。そして、この展開は……。

ナインの働いていない現実とは別に、悪知恵は働いた。

「奢つてくれたら、それに見合つた話はしよう」

一体NETの俺に何の用だらう、などと考えてゐるナインだが、特に気にしなかつた。

とりあえず、弱みに付け込み晩飯を御呼ばれしようと企んでいた。

「現金な奴ね……。名前くらい教えてくれるんでしょうね？」

「料理次第かな」

「……現金な奴だな」

「いいのよ、リオ。言つてたでしょ、このうつ奴だつて」

その台詞は、事前にこのよつやり取りになることを打ち合わせしていた、という台詞だった。

どうやら愛葉が最近戦闘行為をしなかつたのは、この布石のよつ

だ。

久々の「」駆走（五百円程度の料理）に胸を高鳴らせてくるナインには気付けないようだが。

「……わかつたわ。じゃあ、前に行つたファミレスで話をしましょう」

「会長！ こんな奴と会食したんですか！？ 危険です！」

「あら？ 今回はあなたが一緒だから、大丈夫でしょ？」

「はい！ お任せください！」

倉崎の異常な愛葉への忠誠心というか、憧れにも似た感情を垣間みて、若干暑苦しいと思つナイン。ほんの少しだけ一人との距離を取つた。

倉崎の態度が、愛葉とナインで違いますぎだった。

ナインに暑苦しいと思われた二人は小声で話し合つており。

「ほら、簡単に買収できた」

「……腕はそこそこあっても、頭の方は駄目みたいですね」

まるでこの展開が全て筋書き通り、と言つた風に一人は笑みを浮かべていたりした。

そして、先を行く一人の話を聞こえなかつたふりをしながら、自分の名誉と命の危機に気付かないふりもして、それでもこの胸に溜まる鬱憤をどうにも出来なくなつたナインは、暗さが増して来ている天を仰ぎ、心中で叫んだ。

（やつぱつ……苦手だああああ…）

今なら逃げ出せる、それでも逃げ出さない。

生命の危機と食欲の間で葛藤しているナイン。

(……奢りなんて正直断ると思っていたんだけど、しぶしぶを装いながら承諾した所を見れば、あんまり穏やかな話じやなさそうだな。普通の荒事なら朝井一人で片付けられるだろうし、あの性格ならそうするだろ。その実力もある。が、副会長まで一緒に、それに俺に声をかける……ね)

「これはどうやら、名前を聞き出すための口実だけじゃないみたいだな。……はあ」

「なんか言った、フリーター」

「会長、こいつはホームレスでしょう？」

「……NINEだ」

威張れる事ではないがあえて訂正し、ナインは思った。

(こいつか……、ここの勇者だと言える人間になりたい)

その台詞を言えるのは、本当の勇者だけだろう。
愚か者という意味の、勇者だけだろう。

第一章 失敗作品・2

「……ほら、奢つてあげたんだから血口紹介くらいしなさいよ。しなきや支払いはアンタ持ち」

「え？ それ何？ 恐喝ですか。うわあ……最低な野郎だ」

「殺すぞ……底辺」

「……えつどごめんなさい」

殺意の籠つた凍えるような視線を受け、初っ端からやる気を削がれたナイン。

舞台はファミレス。テーブルには奮発したのか（といつても合計で5000円程度）。黒嶺学園生徒会長にとつては端金（）、高カロリーの料理がたくさん並んでいる。

十一種類の野菜のグラタン、魚介のミックスピザ、皮付きフライドポテト、醤油ラーメン、和風ハンバーグ定食、メンチカツセット、シーザースサラダ、水×3である。

料理のチョイスはほとんどがナイン。その選択は、明らかに先ほどの襲撃で受けたダメージを回復するという意味があるが、彼のスキルを知らない愛葉にしてみれば、ダイエットに響きそうなメニュー、という意見だった。

ちなみに、愛葉は和風ハンバーグ定食、倉崎は十一種類の野菜のグラタンを頼んだ。

「名前？ 好きなように呼んでくれていいいけど」

「貴様、巫山戯ているのか？ ゴキブリとでも呼ぶぞ？」

「リオ、食事中よ。言葉は選びなさい。悪いのはこいつだけだ」

「すいません会長。……さつさと眞面目に答える、社会の底辺」

巫山戯ていたつもりは全くなかつたナインだが、事情を知らない二人には詰まらない冗談にしか聞こえなかつたようだ。

「……俺の名前は無いんだよ。これで解つただろ？」

ナインは食事の手を止めたん止め、水を飲む。

「こちらの方が冗談にしか聞こえないが、真実だった。

ナインといつねは、昔とある組織にいた時付けられていたコードネーム。

それが本名であるはずは無いが、それ以外に彼は名前を持つていない。

組織から投げ出された今、その名前を名乗るのは適当でないとの判断だった。

が。

「そう。ナイン、ね。アンタ、ランクはそれに合させて付けられたの？」

「変な名前だな。言つておくが、僕はお前を名前で呼ぶ氣は一切無い」

勘違いはするし、その名前を呼ぶ氣はないといつ、すばりじく無意味な結果が帰つて来た。

「……もひづでもいいや」

別にこの名前を嫌つてはいないし、実際に学校にはこの名前で通つたのだから別に問題ないか、とナインはスルー。

「で、まさか俺に名前を聞くだけが目的ではないんだろ？」

フライドポテトを食べながら、至極どうでも良さそうにナインは核心を突いた。否、興味なぞしつな態度を装つて尋ねた。

二人はしばし顔を見合わせ、

「あら、バレてた？」

「さすがにバレますよ、会長」

軽く肩を竦めてみせた。ビリヤー隠す氣はあまりなかつたらしい。そして言葉を続ける。

「で、そんな事を聞いたやう辺り、話だけは聞いてくれるのね？」

「まあな。これだけ前金代わりの料理を食べさせてもらつて逃げる

のは、さすがに俺の良心が許さないさ」

「……貴様、こうなると解つていて大量に注文したのか？」

「そりや違つ。それはまた、別の理由がある」

「理由？ 空腹だからじゃないんだ」

「HPとMP回復のためさ、と頭の中で答え言葉には出さなかつた。で、話つて何だよ。仕事に就けとか、ウチの学校に入れとかは止めろよな」

「……アンタ、どこのまでNEETにこだわるの？ といふか、なん

でNEETなのか詳しく聞きたいかも」

「それは同感ですね。こんな奴でも、僕の『腕打振』を受けて無傷。

腕はある様ですから」

話の矛先を変更させられているのに気付きつつ、それでも場の雰囲気で話を先に進めるには語らなければならないだろうと悟るナイン。

しかし、本当は語りたくない話である。

「あへ、えつと……笑うなよ？」

無言で頷く一人を見て、これで退路を確保などと悟るナイン。

まあ、それはフラグなのだけど。

「……実は一年前、試験で不正行為を働きまして、その処置として停学処分になりました。その後は、たまに高額アルバイトをして生き延びてきた……という話？」

「最低」「肩が！」

笑われなかつたが、暴言を吐かれた。

早速のフラグ回収、お疲れ様です。

「思つた以上に肩ですね、この男。こんな男に協力を頼むのは間違つています！」

「解つてるさ、俺が悪いってことは！ はいはい、俺が悪いんですよ！ 真摯に非難を受けますよ

「開き直るな！」の社会の『』が！」「

「……そこまで言わなくて」も

「本当に最低限のルールも守れないのね。……………呆れた」

落胆を隠しきれない一人に対して、もう罵倒は聞き飽きているナインはさらっと話を戻す。

「で、そんな俺に一体何の用だつたんだ？　聞くだけ聞かせてもらおう」

とりあえず、用件だけでも聞いておこうと叫ぶナイン。

「ここまで来たら引き下がる気はない。

「……会長、僕はもうこれで失礼します。こんな奴と一緒にする事はないので」

そう言つて倉崎は席を立ち、ファミレスから出て行った。

愛葉はそれを咎めるとはなく逆に、気をつけてね、と声をかけていた。

「あれ？　あいつお前を守るためにいたんじゃないのか？　いいのかよ、肩の俺とお前を二人きりにしても」

今となつては痛くも痒くもない自虐ネタを使いながら、白々しい台詞を述べるナイン。

「問題ないわ。アンタが私を傷つける事なんて無理でしょ？」

若干、感づかれたかもしないと冷や汗を垂らして居る愛葉だが、氣丈に振る舞い誤魔化す。

「そりやそうだな」

だがナインは特に疑う素振りも見せず、納得したように肩を竦めた。

以前の勝負、ナインの勝利で結末を迎えてはいたが、ナインは愛葉に攻撃を喰らわせることは出来ていないのだ。

『空全絶護』は伊達じやない。

「で、散々話をばぐらかしてくれたが、何の用だ？」

「……正直、アンタの碌でもない経歴を聞いて、逆に安心して話せ

るわね。アンタが、関わったばかりに死んだ、とか言つても気にならないもの」

「そりやどうも」

散々な評価だが、そんなものはもう氣にしていないナイン。説教なら、試験での不正行為直後に散々受けているのだ。聞き飽きている。

愛葉は少し辺りを見渡して、傍目から見れば氣に障る程ナインに近づき、小さく呟いた。

「……アンタ、人喰いジョーズって知ってる?」

「セカンド移動開始。ビーすんだ?」

ナイン達と同じファミレスにいた青年は、倉崎がファミレスを出した直後、怪しまれない程度の時間を空けてファミレスを出ていた。ちょうど用件を話し始めた愛葉は、それに気付く事は無かつた。

『セカンドの行動を捕捉しておけ。襲撃のタイミングは自分で決める』

「りょーかい」

『一応忠告しておくが、奴はセカンド。お前の命とは代えられない。まずいと思つたら、すぐに逃げ出せ。死ぬ事は許さないからな』

「……りょーかい。アンタの方も気一付けんだな』

『解つていて。俺達に守るべき過去は無いが、生きてみたい未来はあるのだからな』

青年は通信終了後、耳に入れるだけで相互通信が出来る最新型の

無線機を取り外した。

時刻は五時半過ぎ、空には微かに星が見える時間だ。

田の高さまである鬱陶しいくらいの長さの前髪。その狭間から微かに見える青年の目は、前を走っている倉崎に注がれていた。
彼は、数日前に愛葉を追いかけていた青年だった。

「さて、謝肉祭の開幕だ」

人喰いジョーズは、数年前にも噂になつた都市伝説だ。

数年前、それでも随分と昔に感じるのは、この数年の間に世界が大きく変わつたためだろう。

科学を用いた技術が主流だつた数年前、その噂は街を埋め尽くした。

『喰われた者には二度と出会えない。なぜなら人喰いジョーズはその荒々しい性格から、血も肉も涙も、全て喰らい尽くしてしまうのだから』

骨だけ残す殺人鬼。

行方不明者を三十人以上生み出した人喰いジョーズ。

その結末は、犯人逮捕……とはいからず、ちょうど侵略者戦争前にその活動が止まつたこと。

人喰いジョーズは宇宙人でスパイだつた、という噂が戦争直後はされていたが、今となつては遠い昔の話である。

「……人喰いジョーズ、ねえ。で、それがどうしたんだ？」

「それが復活した、という噂があるの知つてる？ そして、その噂と同時期に何人も行方不明者が出ているのも事実。都市伝説なんて言つてゐる場合じやないのよね」

愛葉は神妙な顔でそれを言つと、近づけていた顔を離した。

若干、顔が赤くなつていたが、ナインは気付かなかつたようだ。

「なるほど。その話からすると、お前の学校の生徒で犠牲者がいるのか。で、生徒会長のお前は、事の真相を突き止めたいと」

そつなんだよね、と頷く愛葉を見て、しかしナインは首を傾げた。

「んで、なんで俺にそれを話すんだ？」

愛葉は遠慮する事無く（ナインを碌でもない奴だと解っているので）言った。

「アンタが人喰いジョーズじゃないの？」

ナインの動きが止まった。

「…………は？ いや、無い無い。あり得ない」

ナインは冷や汗一つ流さず首を振る。

「いくら食い扶持に困ったとしても、人を食つような真似はしないぞ。俺を馬鹿にしてるのか？」

「馬鹿。その人喰いジョーズだつて、本当に人を喰つてる訳無いでしょ？ 殺してる、つて意味よ。で、やつぱり違うか」

「…………穢やかじやないな」

粗方食事を終えているとはいへ、食事中にする話じやない事は確かだらう。

「アンタ、日中から街中うろついてんでしょう？ なんか手がかりになりそうな話とか無いの？」

「無いな。普通そういう奴は夜中に行動してるんじゃないかな？」

「けど、それは人喰いジョーズの噂を使った、何らかの陰謀だとは思うな」

「…………どうじよ

話の内容が内容だけに、一人の声は小さくなる。従つて、二人の距離も近くなる。

「今噂になっている人喰いジョーズと、昔噂になつた人喰いジョーズは別物だと俺は思う」

「…………理由は？」

ナインは少し辺りを見回して、誰かが聞き耳立てていなか伺う。

店内は賑やかで、盗み聞きされる心配はないとナインは判断し、

少し迷つてから小声で愛葉に教えた。

「…………前の人喰いジョーズは死んだからだ。那人喰いジョーズは、本当に人を喰えたらしいがな」

眞面目な顔でナインが語つてゐるため、本當だと悟りながら、愛葉は尋ねる。

「アンタがなんでそんなに昔の事に詳しいのかは置いておいてあげるわ。じゃあ、アンタは今の行方不明者は一体どうこいつ事だと思うの？」

「それは解らないな。でも少なくとも、昔との関連性はないと思つぞ」

「…………あつそ」

少し考えて、愛葉は席を立ち上がつた。ナインもそれに続くのだが、それに愛葉は怪訝そうな顔をした。

「…………何？」

「いや、心配だから

「つー？」

急に赤面し、ナインに指を向ける愛葉。向けた指が震えている。「ちよつ、な、何いきなりそんなこと言つてるのよー。」

怪訝そうに首を傾げるナイン。

「いや、俺はお金持つてないからわ。もつ話は済んだんだろ？ 食べ終えたし」

財布を振つてお金がない事を示すナイン。料理の方も綺麗に食べ終わつてゐる。

「あつ……

瞬間、自分が何か勘違いしていた事に気付く愛葉。顔の赤みが引いて行く。

「ん？」

「何が何だかわつぱり解らないといつ顔のナイン。

「…………何でも無い」

ふいとそつぽを向き、会計を済ませる愛葉。まだ若干顔が赤かつ

た。

「何だよ、変な奴だな」

二人は気付かなかつた事だが、このファミレスの気温が急激に上がつたり下がつたりしていたりする。それが都市伝説になつてしまつたりするのも、二人は知らない。

愛葉のスキル『空全絶護』は、空氣に関する全てを操る。気温も、例外ではない。

同時刻。

魔兵専門学校黒嶺学園内部、図書館。

黒嶺学園は日本で最高の魔兵専門学校である。魔兵、魔力を扱う兵士、それを育成するのがこの黒嶺学園だ。設立から四年とまだ歴史は浅いが（といつても、魔力の証明から最も早くに設立された学校だが）、その分施設は新しい。

敷地面積、教員数、生徒数、設備、その全てが日本一、魔力研究の最先端の学校。

その内部にある図書館も、膨大な量の情報を抱え込んでいる。

魔導書こそ無いが、日本の学生の情報は全てそこに集められている。許可無く侵入しようものなら、それに使用した機器本体及び周辺電子機器全てを破壊するプロテクトが掛かっている。もはやそこまでいくとウイルスにも思えるが。

逆に、許可さえもらえばある程度の情報は手に入るということだ。

生徒会副会長、倉崎リオは、閲覧用のパソコンを前に震えていた。

「……そんな。アイツは??」

倉崎の前のディスプレイには、とある生徒の名前とその在籍する学校、その成績が映し出されていた。

スキルや個人情報に関しては、さすがに生徒会でも簡単に閲覧する事は出来ない。まして、気になったから、という理由では当たり前だ。

「ちょっと気になる奴がいてね、そいつの情報を調べてほしいんだけど」

倉崎が愛葉にそう言われたのは数日前のことだ。

情報閲覧の許可を取るのに数日が経ち、そう言えば名前を聞いていなかつた、怪しいから自分も付いて行きます、それじゃあ名前を聞いたらすぐ調べてくれない、わかりました、という経緯で今日の事件に至っている。

愛葉から事前にどんな奴か聞いてはいたが、会つてみれば恐ろしい程おかしな男だった。

倉崎のスキル『マジックアーム腕打振』を真っ正面から受けても無傷、すごい腕があるのかと思えば、その経歴は酷いものだった。

経歴は酷かつたが、その腕は確かにあったが。

学校側が情報規制を敷いているのでニュースになつていながら、黒嶺学園の生徒ばかり狙つた殺人（行方不明なだけでまだ殺人だとは決まっていないが、倉崎は既に行方不明者は生きていないと思つてている）を起こす腕はある、というのが倉崎の評価だった。

黒嶺学園の生徒だからランクが高いという訳ではないのだが、実力に関しては日本トップクラスなのは公然の事実だ。

行方不明が次々とでている事から、大きな手傷を負う事も無く生徒を殺害、もしくは誘拐しているのだろう。

副会長の自分でさえ傷つける事ができなかつたのだ。一般的の生徒では手も脚も出ないだろう。

ナインに対し、倉崎はそう判断していた。

もし愛葉がナインに一度負けを認めたと倉崎に話していれば、倉

崎は決して愛葉を一人にはしなかつただろう。それくらい、警戒すべき相手だと倉崎は思っていた。どんな結果であつてもおかしくない、と思っていた。

そう思っていたにも関わらず、倉崎は声に出わずにはいられなかつた。

ディスプレイに表示されていたのは、ナインの情報だった。

登録に偽名を使うのは違法ではない。そのため、ナインという名前でも調べる事が出来るだらうと踏んでいた倉崎だが、本当に登録名もナインだつた。

倉崎はすぐにパソコンを終了させ、図書館から駆け出した。夜の帳が下りた街が見える。時刻は六時半。

「早く会長に知らせないと……」

倉崎が学校から出て大通り、路地に入り、先ほどのファミレスへ近道をしようとした時だつた。

倉崎の体が、突如壁に打ち付けられた。

「つー？」

それはまるで、サイコキネシスで操られ壁に打ち付けられたような、見えない腕で攻撃を受けたような、不自然な動き。

倉崎はまともに壁に打ち付けられた。しかし、背後にクッションでもあつたかのように、壁とは直接ぶつかっていない。それでも、地面に崩れ落ちた。

「はっ！　おいおい、副会長つてのも意外と大したことねーんだなあ？」

と、突如目の前に青年が現れた。

まるでレポートで現れた、そう言わんばかりに、青年は突然、倉崎の前に現れた。

「んん？ 随分弱えな、こりや酷え。よく俺達を馬鹿にできたもんじゃねーかよ」

青年は地面に崩れ落ちた倉崎を蹴りつけた。

否、その蹴りはリオの軽く手を振り払う動作で弾かれた。

「！？」

青年が驚き距離を取ると、倉崎が立ち上るのは同時だつたが、青年の顔には焦り。倉崎の顔には薄らと笑みが見えた。

「馬鹿にしないでほしいな。僕にたてついた事を後悔させてあげるよ

「ふう……」

青年は焦りを落ち着かせるために息を吸う。

「まつ、こんなもんじや氣絶しねーか。やつぱり生徒会は簡単にはいかねえか」

「……まさか、お前が人喰いジョーズなのか？」

「人喰いジョーズ？ んだよ、そんな噂になつてんのか？ そりやなんてーか、皮肉な話じゃねーか。噂なんて形が変わるもんだけどよー、よりもよつてそーなるか」

青年の瞳に狂気を垣間見た倉崎は、体が震えるのが解った。

これ以上雰囲気に飲まれてはならない？？、そう判断した倉崎はスキル『腕打振』を発動する。

倉崎をすっぽりと隠せる程の大きさの手が、そこに魔力で具現化される。目を凝らせば薄らと見える、そんなレベルである。

倉崎の背後から生えていくように見えるそれは、巨大な魔力で創られた右手である。

「はっ！」

倉崎の腕の動きに連動して、魔力で創られた手が動く。倉崎が軽

く手を振つただけで、土煙が青年を襲つた。

「……んだよ。反則じゃねーのか、コレ」

そう言いながら、逃げる素振りは全く見せず、土煙を避け青年はさらに倉崎と距離を空ける。

「手間が省けて良かつた。どうやら、ここ最近ウチの生徒が行方不明になつてゐるのは、お前が原因のようだな」「なんだよ、今頃気付いたのか？」

「では、お前を捕まえて洗いざらい吐いてもらおう」

「……これから強者の台詞つて奴は嫌いなんだ」

青年は詰まらない物でも見るかのように倉崎を見て、大きく長い溜息を吐いて。

消えた。

(テレポートか？ 超能力者、みたいなスキルを持っていたな)

青年が消えたが警戒態勢を怠らず、倉崎は周囲を見回す。数秒後だった。

「はっ！」

青年は倉崎の真横に現れた。現れた瞬間には既に拳は振り上げられており、拳は倉崎の脇腹を狙つて打ち込まれた。

受け止める事も避ける事もできないタイミングだった。

だが、

「……ちっ、やっぱ届かねえか」

青年は田の前で自身の拳が魔力の右手で受け止められているのを見つめて、当然の結果と思つたようだ。

「愚か者め」

倉崎が右手を払い、魔力の右手によつて青年は吹つ飛ばされる。地べたに叩き付けられた青年だったが、すぐに立ち上がつた。

「自動防御、か。反応出来てなくとも、反射で防御されんのか。さすがは天下の黒嶺学園、つてか？」

最初の奇襲こそ成功したが、それ以降の攻撃はまるで成功しないと言つのに、青年は笑みを浮かべた。

それは決して自虐の笑みではない。

「……お前、何が目的だ？」

くくくと青年は笑い、そして言つた。

「知つてるか？ 天才の脳みそを喰えれば、天才なれるつて噂」

そう言つと、青年は再び消えた。

不意に、突然、瞬間移動テレポートでもしたかのように。

「つ！ まずい！」

倉崎の表情が強張り、愛葉のいるはずであるファミレスの方を向き、そして。

「しつつもーん。黒嶺学園に通う生徒の何人が天才でしょ？」

倉崎の目の前に青年がいた。そして、腹部に拳銃を押し当てている。

その質問に答えようとすると、元気に銃が吠えた。

「てめーも天才だろ？ 副会長さんよ」

倉崎は倒れた。

第一章 失敗作品・3（後書き）

遅くなりましたが、感想ありがとうございます。
楽しんでいただければ幸いです。

時計の針は七時を指していた。

「こつちは上手くいつたぞ。後は、本命だけだ」

青年は倉崎をアジトの奥に閉じ込め、今は外で『幻想卸し』^{イメージダウン}と呼ばれる仲間と連絡を取っていた。

『よくやつた。『不可視力』^{インビジブル}、怪我は無いか?』

青年、『不可視力』は笑みを浮かべる。

「正直、ラッキーパンチだつたぜ。あいつが冷静になつてれば、俺は今頃ミンチだな」

『黒嶺学園副会長、倉崎リオ。奴はその精神面からランク『A』判定を受けているようなものらしいからな。スキルとしては『S』だろ? だから、精神を搖さぶれば勝機は見えると踏んだ』

「まあ、済んだ事はどうでもいい。んで、アンタはちゃんとやれんのか?」

一度言葉を切り、青年は重みを持たせて言つ。

「『空全絶護』、朝井愛葉を倒すなんて」

「当たり前だ。俺を誰だと思っている?」

無線機越しでも解る、自信を持つた声で『幻想卸し』は『不可視力』へと言葉を送つた。

「朝井のスキルは恐ろしい。だが、恐ろしいのは朝井のスキルだけだ。朝井自身ではない」

『そーかよ。んじゃ、俺もすぐそっちに行くわ待つっているぞ』

通信の切れる音を聞き、『幻想卸し』は無線機を外した。

彼の前にはスクリーンがあり、そこには一人の人影が映っている。その映像を撮っているのは、黒嶺学園の制服を着た一人の少女。そして、写っているのも黒嶺学園の制服を着た少女、それと黒髪の少年。

「ファーストには犠牲に、本命には礎になつてもらおう」

「うーん、結局大したことわからなかつたわね」

愛葉は背伸びをし、長い金髪が夜の闇に舞つた。

「どうもすいませんね。俺は生憎誰にも求められない人間でしてね皮肉気に言つたナインは首の後ろで手を組んでいる。

時刻は七時。すっかり夜となつた街は、街灯のイルミネーションで綺麗に彩られていく。

「…………」

そんな中、一人は無言で歩いていた。愛葉がナインの少し前を歩いていると言つたか、ナインがそれに付いて歩いているといつか。

「あー、えっと、ちょっと聞いて良い？」

沈黙に耐え兼ねたのか、愛葉は振り返り、ナインを指す。

「ん？ 別にいいけど？」

特にこの状態に居心地の悪さを感じなかつたナインは、どうでもよさそうに返事をした。

一人真面目になつてている自分がなんだか恥ずかしくなつてしまふ

愛葉。

「……えっと、なんでアンタは私に付いて来るの？ いつもはこの時間帯になつたら瞬間移動がなんかで消えてるでしょ？ なんで今

田はいるの?』

「あれ? 本当に言いたい事とか無いのか? それなら俺、帰るけど」

てつあつまだ何かあると思つたけど、とナインは言つ。

「うう……、何にも無いわよ!」

何とも口メンテしないで呻き声を上げた愛葉は、最後は怒鳴るよう言つた。

「本当か? そつやあつがたこ。ちよつと用事を思に出したからさ、俺はこれで帰らせてもらひつわ。『うそつせん!』

もう言つと、ナインはぐるつと踵を返して走り出した。

「えつ! りょ??」

用事はないと言つたのに、愛葉はどうしてかナインを呼び止めようとした。いや、本当に言つべき事があったのだ。

愛葉の声に呑わせるように、走り出していたナインが止まった。

「??あ」

しかし、落ちていた木の棒を拾うとナインは再び走り出してしまつた。

結局、愛葉は何も言えなかつた。

愛葉とナインがいたファミレスから少し離れた木陰に、その少女はいた。

「ファーストと本命、別行動を始めたけどどうするの?」

黒領学園の制服を着た少女、『写撮許可』は無線機越しに『幻想卸し』に尋ねる。

『本命の方を追え。ファーストの方は別に構わん』

『了解、ってあの女違うの疲れるんだけど』

『準備が整い次第、こちらから接触を仕掛ける。それまでの辛抱だ』
「はいはい、解りました」

『写撮許可』はにんまりと笑みを浮かべ、風に流すよじに言葉を

呟いた。

「謝肉祭はもう始まっているのよ、朝井愛葉」

時刻は八時。

ナインがいるのは、もはや廃屋と言つても差し支えないような建物だ。二階建ての一般家屋だが、壁は黒く煤けており、扉は開けようとすれば軋む。

ナインは当然のように十足で入り込み、そして奥へと進む。

「なんだ、君か」

家の一番奥にあるドアを開けると、そこには大きな部屋が広がつており、いつものように一人の男が椅子に座つていた。

その部屋は膨大な数のパソコンで埋め尽くされている。

機種、サイズ、スペック、必ずどこかが違う様々なパソコンを起動させ、そのディスプレイだけで照らされたこの部屋は、さながら潜水艦の中のようだつた。

「俺以外にも客人なんて来るのか？」

ナインは驚く事もせず、その男に話しかける。

男は黒くボロボロになつた年代物のローブに身を包み、ファンシーナ髑髏の面を顔の横に付けていた。病的なまでに白い肌、濃いグレーの髪が特徴的だ。一見すれば女の子にも見えなくもない顔立ちだが、本人はそれを酷く嫌つている。

しかし相変わらず趣味が悪い、とナインは思つた。

「人喰いジョーズの亡靈さん」

同時刻。

愛葉は夜の街を歩き回っていた。

「……リオ、遅いわね」

ナインの情報を調べに行かせた倉崎を気にながら、愛葉は人気の無い場所を選んで歩いていた。誘拐か殺人が行なわれるならば、人気の無い路地だろうという思考が働いたためだ。

何度かチャラい男達に声を掛けられたが、愛葉が『空全絶護』だと知ると男達はさっさと逃げ出した。命を危険に曝してまで獲たいと言つ程の魅力が無いのかもしれないし、相手が単に賢いだけかもしけなかつた。

しかし、これでも花の乙女、少々傷ついていたりする。

（私つてそんなに魅力が無いのかしら？ 暴力的、って言われたことはあるけど？？いかんいかん、今は行方不明になつた生徒の搜索兼犯人逮捕に集中すべきだ）

緩みかけていた気を張り直し、今日こそ犯人を逮捕しようと意氣込んだ愛葉だつたが。

「会長！ 朝井会長！」

不意に背後から呼び止められ、愛葉は気構えて振り返つた。

「た、大変です！ 副会長が！」

そこにいたのは、同じ黒嶺学園の女生徒だつた。

白河しらかわという一年の生徒に連れられて来たのは、カラオケだつた。

白河は数日前から行方不明になつていた生徒の一人だつた。

彼女が言つには、数日前、突然一人の男に襲われて氣絶し、どこかに監禁されていたといふ。

倉崎も同様に襲われたらしく、監禁されたらしい。

そして、自分を助け出してくれた人が、自分ではこれ以上助ける事が無理なので、相談したいと言つ。

その話し合いの場がこのカラオケだといった。

ここなら学生がどれほど集まろうが怪しまれにくい、との話だつた。

「ああ、君が朝井会長か。初めまして、俺は霧道鏡介むじうきょうすけという」

霧道と名乗つた男は、ナインと同じ年くらいの好青年だつた。

「さつそくだけど、彼女も君の学校の生徒だよね？」

そう言つて霧道が扉の外にいた少女を招き入れた。

「春日さん！？」

春日と呼ばれた少女は、全身に小さなかり傷を負つてはいたが大きな怪我は無く、はい、と力強く答えた。

しかし、彼女は行方不明になつていらないはずであつた。

「彼女はちょうど俺がそのアジトの近くを歩いている時連行されいたんだ。で、俺が助けて、中に突入して近くに捕われていたこの子を助けたのは良かつたんだが……」

次第に声が小さくなる霧道。その後を白河が引き継いだ。

「どうやらこの行方不明事件、複数犯、もしくは組織が動いてるみたいなんです。まだ何人か捕まつているみたいなんで、そいつらが動く前に助けられませんか？」

「……大体理解したわ」

愛葉は頷き、霧道に向かつて頭を下げる。

「我が校の生徒を助けていただき、本当にありがとうございます」「いやいや、……俺が不用意に突っ込んだりしなければ、ちゃんと

全員助け出せた。すまない」

霧道は申し訳ないと頭を下げる。

「いえ、あなたのおかげで犯人達のアジトは突き止めているも同然でしょ。今からでもまだ間に合つと思います」

と、二人の会話に春日が割り込んだ。

「あの……会長。私のスキル『^{プロジェクト}写撮許可』で犯人が記録されているので、……見てください」

「本当? 助かるわ。ありがとうね」

「いえ、その……、と春日は俯く。言いにくそうに春日は付け足した。

「ただ、その、酷い暴力だつたので……」

「あつ、ごめんなさい。無理はしなくていいから、ね?」
はい……と氣弱に春日は呟いた。

『写撮許可』

それは自分の見た物を他の物に投影する能力。黒嶺学園では珍しい(というのも、戦闘向けのスキルとその能力の開発が盛んなため)、非戦闘諜報員用スキルの一つだ。

春日は部屋の壁に、その映像を投影した。

一人の男が、倉崎を殴りつけていた。

地下室のような場所で、その暴行は働くかれていた。

倉崎は両手を天井から伸びた鎖で繋がれていた。

また腹部に血が滲んでいる事から見て、『^{マジックアーム}腕打振』は発動出来ていないのでだろう。

基本的にどんなスキルを発動するにも、脳を酷使する必要がある。意識の朦朧とした中ではスキルを使う事は出来ないという事だ。

目の焦点が合つておらず、口から血が滴り落ちている。

男が蹴つて、倉崎が身を仰け反らせて、男が殴りつけて、倉崎は呻いて。

今にも呻き声が聞こえてきそうな映像だった。幸いと言うか、『写撮許可』は音声を再現出来ない。しかし、その暴力映像は、目を背けたくなるような物だった。

魔力による攻撃を軽減する黒嶺学園の制服は、度重なる暴力でちこちが擦り切れてはいるが、大きな欠損は見えない。

しかし、顔面に刻まれた青黒い内出血から、その服の下が見えないだけで酷い事になつてるのは理解出来た。

見えない分だけ、躊躇無く攻撃を加えられているようにも見えた。一方的に片方が傷つけられる。抵抗する事は出来ない。自分を守ることも出来ない。

映像は、男が倉崎の腹を強く蹴りつけ、倉崎の体が鎖を張つたところで、倉崎が気絶した時点で途切れた。

映像が途切れたとき、しつかりとそれに目を向けていたのは愛葉一人だつた。その愛葉も、体が震えていた。

霧道は愛葉の横顔を見ていたし、春日はスキル発動の集中をするために目を閉じていた。白河はその映像から目を背けていた。

「…………どうする？」

霧道は愛葉に尋ねた。

「警察に連絡、は出来ないんだつたか？ 黒嶺学園が情報操作しているからな。そんな事をすれば、君は退学では済まないだろう」「…………」

面目を何よりも重んじている黒嶺学園。それははつきり言つて異常なレベルだつた。

しばし沈黙が流れ、そして愛葉は言つた。

その声は、酷く冷静だつた。

「霧道さん。…………このアジトの場所を教えてくれませんか？」

「良いが、もしかして一人で行くつもりか？ 危険だ。……とは言わないが、大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です。これは、私一人で決着をつけたいんです」

霧道はしばし愛葉の顔を見つめていたが、了解だと頷いた。

「白河さん。ちょっといい？」

「……なんでしようか、会長」

不意に白河に話しかけた愛葉は、白河を部屋の外へ連れ出し、こう聞いた。

「あの映像の男、本当にあなたを襲つた男だった？」

白河はビクッと体を震えさせ、恐る恐る答えた。

「……そうです。間違えようも無いです」

「…………そつか。変なこと聞いて御免ね」

そして一人は再び部屋に戻つた。

その後、白河は気分が優れないと言い、この事件の口止めを約束してから自宅へと帰つた。春日と霧道はアジト突入で疲れたのではしばらく休んでから帰ると言つた。勿論、口止めを了承した。

そして愛葉は、一人霧道に教えられたアジトへと向かつていた。

映像で倉崎に暴行をしていた男に復讐するために。

映像で倉崎に暴行をしていた男、ナインに復讐するために。

「あの女、簡単に騙されたね」

春日は小さく笑みを受けべていた。

「簡単ではないさ。一人は真実を語つっていたのだからな。俺達だけでこの話をすれば信じられなかつたかもしれないが、本当の被害者がいたのでは話は違う」

霧道は無表情でそれに答えた。

「おまけに証言は本当の事を言つてるからね。私達の事は少し疑つてたみたいだけど、あの白河つて子は信じてたみたいだし」
無言で頷き、霧道は言った。

「暴行を行なつたのをファーストだと誤解させる。

『幻想卸し』の名は轟かない。故に意味がある」

「あの子には『不可視力』がやつてるように見えて、本命にはファーストがやつてるよう見える」

「犯人が自分の知り合いであるなら、それを知られないように尋ねるだろう。間違つてアイツなどと馴れ馴れしく呼べば、自分の信頼性も疑われるだろうからな」

「結果として、違いに気付かなかつた。……でも、もしバレた場合はどうするつもりだつたの？」

「それはそれとして策はある。出来れば披露する機会は訪れない事を願うがな」

霧道は立ち上がり、カラオケを出る。

「準備はいいか？」

カラオケの外で待つていた『不可視力』に声をかける。

「ああー。アンタこそ、本当に大丈夫か？　『幻想卸し』」

無論だ、そう言つて霧道、『幻想卸し』は決戦の地へと向かつた。

ナインは单刀直入に話を切り出した。

「ジョーズ。いま巷では、人喰いジョーズの噂がされてるんだが、知つてたか？」

「勿論。俺を殺した奴も焦つて情報収集していたよ。復活なんてあ

り得ない、だが奴ならしかねない？？そんな台詞が聞こえそうだった

た

亡靈のジョークに、笑えば良いのかどうなのか解らないナインはスルーする事にした。

「で、当然どういう事なのか知ってるだろ？」

「勿論。俺の過去以上に血生臭い話だが、聞くか？」

そりや遠慮するとナインは断り、ジョーズは当然だらうな、とパソコンの一つを操作した。

「それなら真相は教えない事にしよう。求めている情報はコレだろう？」

そう言つて、パソコンのディスプレイに表示されている情報を印刷し、ナインに手渡す。

「今回は俺の目的とは関係ないんでな、悪いが行動けない。俺もしかるべき時まで、ひつそりと根を伸ばしてみたいんだ」

「この地図だけで十分だ。感謝する、ジョーズ」

「そんな感謝、要らないな。本当なら俺も一緒に行く話だからな。罵倒してくれて結構だ」

「じゃあ、たまには家の掃除くらいしろ」

「そうだな。そうするよ」

ナインの冗談半分の台詞を本気で気にしたのか、ジョーズは掃除機を探し出す。

呆れた顔でそれを見ながら、ナインはその廃屋から出た。

『人喰いジョーズは死んだ』

そう愛葉には伝えていたが、それはある意味本当のことでの別の意味では嘘。

しかしそれは彼女達には関係ない話である。

「……さて、どうすつかな」

地図には一つの場所が記されていた。

第一章 失敗作品・4（後書き）

しばらくシリーズ回になりそうですね。

時刻は九時。

霧道に教えてもらつたアジトは、十年位前に潰れた工場跡だつた。不景氣で潰れた訳ではなく、それほど荒れてはいない。ちなみに、以前この工場で造られていたのは、人肉の缶詰だ。

愛葉が風を操り、工場を囲つていた柵を飛び越え工場内に入ると、ソイツはすぐに出迎えた。

「意外と遅かつたな、朝井」

ボロい服を着た黒髪の少年、ナインはそう言つた。

その顔には、今まで見た事も無い歪な笑顔が張り付いていた。

「……アンタ」

「いや、俺が早すぎるだけか？ そつかそつか、お前には瞬間移動なんて出来ないもんな。悪かつたわ。社会の頂点さん」

「……アンタ、やけに饒舌じやない？」

「そうか？ まあ、そうかもな。しうがないだろ？ セつかく捕まえておいた奴には逃げられるし、新たに捕まえた奴にも逃げられるしな。全部バレちまつたんだから、しうがないだろ？」

ナインは肩を竦めてみせる。

愛葉の周りで風が渦巻いていた。

「しかし、黒嶺学園つてのも案外しょぼいよな？ まさか副会長まで簡単に捕まえられるとは思わなかつたよ。イレギュラーさえなければ、もう少し集められたな」

「……集める？」

怪訝そうに尋ねる愛葉に、ナインは上機嫌で答えた。

「そうだ。収集、つて奴だ」

「……何が目的よ」

ナインは笑つて答えた。

「何つて、そりや喰うためだよ」

何のためらいも無く出たその台詞に、愛葉は顔が強張るのを隠せなかつた。

「知つてるか？ 天才の脳みそを喰えれば天才になれるつて噂」
ナインは愛葉との間合いを計るように歩き出し、それでも喋る事を止めなかつた。

「お前さ、なんで俺が強いか解るか？」

ナインは笑つていた。

その笑みは、狂氣としか言い表せない笑みだつた。

「結構美味かつたぞ、人間の脳みそは」

愛葉は自分の周りで風が唸りを上げているのに気付かない。

「喰えれば喰う程強くなつてる実感があつた。んでさ、朝井」

ナインが愛葉を見た。

その日は、獰猛な捕食者の物だつた。

「お前の脳みそはどんな味だ？」

舌なめずりするナイン。そして、その手を愛葉に伸ばした。

「つ！－」

瞬間、愛葉の体が見えない力で吹き飛ばされた。

それは偶然。

『プロジェクト』、春日が『不可視力』が見逃した愛葉を探していた

時だつた。春日が街の中央にある広場付近を歩いていると、怒鳴り

『プロジェクト』

声と唸る風の音が聞こえてきた。

聞き覚えのある声だったのでその様子を見てみると、案の定、会長が。そして、一人の少年が戦っていた。

戦いは一方的に会長が責め立てているようだったが、しかしその光景を春日は訝しんだ。

愛葉のスキル、『空全絶護』の前では何人たりとも満足に行動する事は出来ない？？それはもはや常識だった。酸素濃度から気温、さらには気圧などを変えられては、十分な生命活動をすることだって難しい。

それなのにその少年は平然と動き、そして攻撃を交わしていた。

「面白いな。どうやら、この少年には『空全絶護』が誇る特殊攻撃は効かないようだな。そして、それを理解している朝井も特殊攻撃は使っていないみたいだな」

その戦闘を見た『幻想卸し』はそう言い、計画を大きく変更させた。

『^{イメージダウン}幻想卸し』

自分が直接見ている相手に幻術を掛ける能力。その幻術は、相手の過去の記憶から引き出された映像と術者の思考から生まれる。相手に見せる幻術が、相手の記憶とリンクすればする程その幻術のクオリティーは増す。まるつきり術者の想像でも、ある程度は騙す事の出来るスキルだ。

幻想は、幻術は、イメージを下げる。

その幻術は、本当のイメージをダウントさせる。

故にその名は、イメージダウン。

『幻想卸し』が計画した作戦は大まかにはこうだった。

この少年の幻想を見せ、『空全絶護』の特殊攻撃を使わせない。

『不可視力』がこつそりと近づき、魔力を散弾として発射する実験段階の兵器、『魔砲』を至近距離から放ち、正体不明の攻撃を演出する。

通常攻撃も元々避けている、もしくは受け止めている少年だから、幻想相手に攻撃して無意味でも、それがいつもみたいに少年には効いてないと勘違いする。

適度にいたぶつた後？？、最後の締めは以前の計画通りに。

『不可視力』

自分に触れている物体と自身を透明にする能力。日頃から使用に気をつけていれば、テレポートやサイコキネシスのように誤摩化す事もできる。

彼らにとつて計画の成功は、自分の未来の可能性を得る事だった。この『不可視力』と『幻想卸し』は一部の人間に、失敗作品と呼ばれる人間だ。

『写撮許可』にしても、今までは自分の未来が暗い事が解っていた。

彼らのこの行動は、社会に捨てられた人間達に再び希望を与える事だった。

失敗作品

それはスキルに重大な欠陥を持つた者達に付けられるあだ名。自分の脳のスペックにまるで合っていないスキルを得て、それを無理矢理使おうとした結果、重大な欠陥が生まれた者。

彼らは欲した。

自分達のスキルを失わずに、脳のスペックを上げる手段を。

世界が認めたのは、欠陥を持たないスキル。認められない彼らは、

認められたかつた。

そして、彼らは人喰いになる事を選んだ。

天才の脳を喰えれば天才になれる、それが本當かどうかわからない。だが、試しもせずに、なれないなどと言えはしなかつた。

例えなれなかつたとしても、天才の脳を解析し、それに近づける事は可能だと思い、彼らは誘拐を始めた。

狂つていると言われようとも、失敗作品と呼ばれるよりはマシだと彼らは思った。

失敗作品にランクは無い。

能力者として約束される未来が、彼らには無い。

失う物は、何も無かつた。

「けほつ！　げほつ！」

「おいおい、どうしたんだ朝井？　いつもより元気ないんじやないか？」

ナインは笑みを浮かべながら愛葉を見ていた。

（？？おかしい！　いつものアイツとは比べ物にならないくらい強い！）

数分程、一方的に愛葉が罵られていた。

勿論、その攻撃は全て『空全絶護』の自動防御でガードしているが、それでも衝撃全てを殺す事は出来ていない。

それに愛葉は体力があまり無かつた。元々あまり体力があるタイプではなかつたのは、戦いを長期化させない『空全絶護』のスキルがそれを補つてくれていたからだ。

しかし、今回はそれが裏目に出た。

こちらの攻撃をどんなに放とうがまるで効かず、対してあちらの

攻撃は不規則かつ見えない。これほどまでに一方的に攻撃されるのは初めてだった。

(いつもなら、アイツは逃げ回ってるだけで碌に攻撃に転じてこないのに？？)

「おいおい、まさか今までのお遊びを俺の本気だとか思つてんじゃないだろうな？」

愛葉のその思考を読み取ったかのように、ナインは嘲笑う。

「まさか、そんなはず無いだろ？ 裏では人攫いしてんだからな」
声も、姿も、まるで同じ奴なのに。

決定的にそれは違つていた。

だが、それを愛葉は認められなかつた。

今までが全て演技で、これがこの男の本質なのではないのか？？。

『悪い奴じゃないと思つけど』

自分で言つた言葉を、愛葉は信じられなかつた。
いや、信じたかったが、信じられなかつたのだ。

映像に映つっていたのは確かにナインで、暴行を働いていたのもそ
うだという証言を得た。

だから、愛葉には信じられなかつた。

自分の学校の生徒の証言と、自分の今までの記憶を天秤にかけた
時、傾いたのは生徒の方だったのだ。

もしここで気付いていれば、この事件の結末はまるつきり違うも
のになつただろう。

だが、そうはならなかつた。

「いい感じに疲れてきたみたいだから、お休みがてらひょっくらム
ービーでも見せてやるよ」

そう言つてナインは指を鳴らした。

瞬間、工場になんらかの映像が映し出された。

「……これは、『写撮許可』?」

「その通り。あれ? まさかお前、俺がみすみす逃がしたとか思つてたのか? そりやなんて言うか、残念な頭だな。ちゃんと回収してきた」

舌なめずりするナイン。呆然として動けない愛葉。

「んで、まあそんな事はどうでも良いんだ。ビックシヨーはこっからだから」

その台詞に合わせたかのように、工場に映し出された映像が動き出した。

そこは地下室のような場所だった。

まるで、人体実験でも行なわれていたような部屋だった。

そこには一人の人間がいた。

その人物は台の上に乗せられており、鎖が両手両足に繋がっていた。

まるで、これから行なう事に抵抗されないようにするために。

その人物の顔には恐怖が張り付き、今にも気絶しそうな表情を浮かべている。

まるで、これから人外の行為に身を差し出さねばならないと知っているかのように。

その人物の上に影が被さり、瞳にはその人影の正体が映った。

そして、その瞳に映つた人影、ナインはニッといやらしい笑みを浮かべ。

その人物の頭に噛り付いた。

映像が全面、朱で染められた。
まるで夥しい量の血液を浴びたように。
少し離れ、噛み付かれた人間がビクビクと痙攣しているのが映つ
た。

死を間近に控えた生き物にしか見えない。

音声があれば、耳を覆いたくなるような絶叫が聞こえてきそうな
口の開き方。

しばらくして、その人物は動かなくなつた。
生氣を抜かれたように、腕も、脚も、肌も、全てから色と力が失
われて行く。

その生命活動が停止したのは、一目流涎だつた。
対照的に、床はなおも真っ赤に染まつて行く。

そして、その首が切り取られた。

一際大きな赤い花が咲いた。

映像はそこで終わりを迎えた。

もしも愛葉に冷静な分析力が残つていれば、いくつものおかしな
点に気付いただろう。

この映像が、過去に見た映画のワンシーンに非常に似ていた事。
映像が流れている間、ナインの姿がどこにも無かつた事。
だが、追い立てるように次々と起こつた事件、そして展開が、愛
葉の正常な判断力を奪つていた。

もしも『幻想卸し』がこの映像を愛葉に見せなければ、この事件

の結末は変わつただろう。

だが、この映像は最初から作戦に仕組まれていたことで、ナインの存在があらうがなかろうが、愛葉に見せられた映像だった。

逆に言えば、この映像さえ真に迫る物であれば、この計画は成功だつたのだ。

そのために何度も何度も参考となる映像を見て、脳内で再生した。全てが幻術でありながら、本当に見て来た事件のように出来るようだ。

もしも愛葉が『幻想卸し』の作戦を見抜けていれば、この事件の結末は変わつただろう。

だが、それはあまりにも望みすぎな話であった。

もしも『幻想卸し』が、ランク『S』の意味をしつかりと理解しておけば？？。

この事件は起きなかつたかもしれない。

喰われていたその人物の正体は、倉崎リオだつた。

「おい！ しつかりしろ！ 『不可視力』！！」

『幻想卸し』は叫んでいた。

場所は工場から数百メートルほど離れた、工場を囲つていた柵の外？？そこを『幻想卸し』は走つていた。

隣には顔面蒼白、歯をガチガチ言わせた『写撮許可』もいる。

そして、全身が血だらけになつた『不可視力』が力なく、『幻想卸し』の肩に寄り掛かっていた。

それはまぎれも無く、敗走だった。

いや、それは得体の知らない絶対的な力からの逃走だろう。

「くそっ！ 巫山戯るなー！」

『幻想卸し』は叫ばずにいられなかつた。

一瞬、だつた。

最も近くにいた『不可視力』は一瞬で切り刻まれ、そして吹き飛ばされた。

そこにあるもの全てを壊さんばかりに、その力は振るわれた。工場と呼ばれた建物は灼熱の風に溶かされ、冷涼の息吹で再び固められ、鋭利な風刃によつて切り刻まれ、峻烈な轟風によつて吹き飛ばされ、かつての形は失われ、鉄屑と化しその敷地内の隅へと押しされていく。

大地は削り取られ、灼熱と冷涼の風が渦巻き、石片と風刃が飛び交う。更地に変えられ、空気が死んだ。酸素は霧散し、気圧は定まらない。

ランクが危険度を指しているものだと知つていれば、こんな事にはならなかつたかもしれない。

ランク『S』、それは災害レベルという意味。

「このつ……化物め！」

ランク『S』、『空全絶護』。

朝井愛葉が暴走した。

第一章 失敗作品・6（前書き）

2 / 5 一力所変更。

自分のしている事が正しいのか解らない。

彼が言つ事ならば間違いは無いだろう、そつ思つていた。

だが、本当にこれで良いのだろうか？

そう思う事は、魔兵としては失格な思考だ。兵士が個人の意志で動けば、勝てる戦いも勝てなくなってしまう。兵士であるならば、上官の命令を疑う事はいけない事だ。

だが、今回ばかりは、疑わずにいられない。

本当に、これで良いのだろうか？

草薙慎也の思考は、彼がいる建物の最下層にまで響く轟音で中断させられた。

都心から離れた場所にある、潰れた研究所。何十年も前に潰れたそこが彼らのアジトで、草薙がいるのはその最深部だった。

「何だ？」

草薙は自身のスキル、『壁格子』^{ハインダランス}が正常に作動している事を確認した。

『壁格子』は、自分の設定した範囲を魔力の壁で覆う、結界もどきのスキル。その壁は結界と呼べる程耐久性が無いが、破壊されてもすぐに修復できるといつ物だった。

「……部屋の壁はどこも壊されていない。と言つ事は、外で何かあつたか」

草薙は現在、誘拐して来た生徒の監視を任せていた。

『壁格子』で生徒のいる部屋を覆つておき、破壊された場合にその部屋を仲間に教えるといった、看守のような役割を担つていてる。現在、どの部屋の『壁格子』も正常に作動しており、どの部屋の

『壁格子』も壊されていない。

となると、何者かがこの研究所に襲撃して来た、というのが妥当だろう。

「……始まつたな」

仲間が侵入者と接触し交戦が始まつたのを、仲間の発砲音を聞いて草薙は悟つた。

「……念のため、各部屋の『壁格子』を硬くしておくれ」

目を閉じ、草薙は集中し、各部屋に展開している『壁格子』を二重にする。それでどれほど強度が上がるかと言えば微妙だが、何もせずに一人ぼうつとしているよりは良いと思った。

だがこのとき、草薙は何か嫌な予感を感じていた。
侵入者との戦闘が、嫌に長いと思いながら。

元有機生物化学研究所。

皮肉にも、その研究所、現在は人喰いジョーズなどと噂される奴らのアジトは、人体実験を行なつていた研究所だつた。

それを知つてか知らずか、彼らはその場所をアジトに、天才の脳みそ集めをしているという。

実際にそんな事をしているのか、それとも裏で違う目的があるのか定かではないが、とにかくその場所に最近行方不明となつた黒嶺学園の生徒は捕われていた。

「俺の名を彷彿とさせる事件を起こしたのは、何の因果かな。運がない……いや、運が悪いな」

自らを人喰いジョーズの亡靈と呼ぶ男は、部屋を埋め尽くすパソコンの淡い光に照らされていた。

現在その大量のパソコンは、とある場所のカメラをハッキング、その映像を映している。

言うまでもなく、それは元有機生物化学研究所だ。

そして、一台のパソコンには一人の黒髪の少年が写っていた。

主な武器は木の棒。

主な防具は布の服。

それは、勇者の模造品と呼ばれる一人の少年。

「さあて、人喰いジョーズの偽物達。勇者の模造品を止められるかな？」

時刻は八時半。

「あんま遅くなつて夜寝れなくなつたら困るだらうから、さっさと終わらせようか」

ナインの呟きと同時に、元有機生物化学研究所は揺れた。それは、研究所のドアに張られていた結界が壊れる衝撃だった。

『強制開閉魔法』

どんな扉でも問答無用で開けられる、閉められる魔法。そう、例え扉に結界や鍵がかかっていたとしても、だ。しかし、閉める用途が窺えない。昔からこの手の魔法は、開けるためだけに使われるし、なんちやらの鍵にその地位を取られているのだが、そのなんちやらの鍵を持つていねいナインには便利であった。

ナインが研究所の中に入ると、結界が破壊された振動で気付いたのだろう、男達が銃を構えていた。

「動くな。大人しくしろ」

正体不明の侵入者相手、という訳かどうかは知らないが、三人の男が十メートルの距離をあけてナインに銃を構えていた。サブマシンガンである。

研究所内部は電気が通つてあり、頭上で蛍光灯が灯つていた。よく手入れが行き届いているのか、壁は綺麗な白いのまだ。

物騒たな
今時鋏かよ なんて笑えなしだ

大人しく木の棒を落とし、手を擧げるナインたったが、その手の形は不自然だつた。

両方の親指が伏せられている

男達には、それが何なのか解らない。
まさかそれが魔法の詠唱と
同義の行動だとも、解らない。

だが、さすがに目の前に変化があれば、気がつく。

黒く濁んだ球体が、ナインと三人の間に目の高さで浮いていた。

三人の行動は迅速だつた。

球体が現れたのと同時に、サブマシンガンの引き金を引いていた。

ダダダダダダダダダダダダダダダダ——！——！

銃声が繋がつて聞こえる程、激しい銃撃。

しかし、連射で繋がっていた銃声は、すぐに止まってしまったが。

——なー！？——いー！？——あああ！？——

その代わり聞こえた三人の驚きは、その目の前で起きた現象が原因だった。

黒い球体が、銃弾を引き寄せていた。

そして三人の手元の銃本体も。

『磁力魔法』

特定の金属器を引き寄せる磁力に似ているためこう名称されているが、金属器でなくても引き寄せることができる、吸引魔法。ブラックホールもどき。簡単にまとめて片付けたいあなたに。

当初、球体に引きつけられて宙に浮いていた銃器だったが、時間と共に落下。それでもまだ効果が残っているのか、銃器同士はくつついて離れない。それは、一つの鉄の塊と化していた。

「貴様……魔法使いか！」

男の一人が叫び、腰からサバイバルナイフを取り出し切り掛けた。

「違うな。俺はスキル持ちだ。魔法使いじゃない」

拾い上げた木の棒でサバイバルナイフを弾き、ナインは男の鳩尾へと突き立てる。男が埋めき声を上げ倒れた。

それに感化されたのか、残っていた二人のうち一人がナイフを抜き、一人が応援を呼びに奥へと向かった。

「応援呼びに行かれた所為で、敗北フラグが立つちまつたな」
残った一人にナイフを振らせる事も無く気絶させ、ナインは奥へと向かつた。

「どうなつているんだ？」

草薙は焦っていた。

いつまで経つても戦いの音が止まない。いや、断続的に続いていると言つた方が適切だろう。

先ほどから銃声が鳴つたと思えば止まり、またしばらく経つて鳴り響くということの繰り返しだ。

今このアジトには三十人程の仲間がいる。その中には戦闘用のスキルを持つた奴らも何人もいるのだ。それにも関わらず、戦闘が止まる気配はなかつた。

「……くつそ」

草薙は駆け出した。

どうせ『壁格子』ハインドラーンスは自分が氣絶するか死ぬまで発動しているのだ。どこに自分が居ようと関係ない。上で何が起こっているのか調べに行つても、管理体制には問題ないのだ。

自分一人だけが残つても、なんの役に立たない。少しでも助けになればいい。

そう思い、草薙は上へと向かつた。

何度か戦闘、そのたびに氣絶させて、一階を全部見回り何も無いとナインは判断した。二階は廃れており、ナインは地下へと向かつ。監禁するならば地下だろう、と言つ偏見もあつたが。

「撃て！」

非常階段で地下一階へ下り、防火扉を開けて脚を踏み出した瞬間、集中砲火を受けた。

「危なっ」

慌てて非常階段の方へと戻ると、銃撃音は去つた。

作戦としては、待ち伏せして攻撃だとナインは思った。

「……『守備力強化魔法』と『加速魔法』は展開中。だがゴリ押ししてこの後HP切れなんて嫌な展開だな。MPは使い切つても良いから、スマートなやり方で行くか」

スマートなやり方つて何だろ？ 駄目だ、俺つてNEETだから解らないや？？、となんでもNEETの所為にしているナイン。

マッシュポンブな思考である。

「ま、ゆっくりやるのは性に合わないな」

左手の小指を立て、それからナインは飛び出した。銃撃は始まらない。男達の動作は非常に緩やかで、スローのような動きだった。

その間にナインは状況を確認。左側は行き止まりで、右には五人の男がいすれもサブマシンガンを持ち陣取っていた。どうやら『磁力魔法』展開も間に合わず蜂の巣に出来ると踏んでいたようだ。まあ、HPなんて持っていない普通の魔法使いならばそうだろう。現に、先ほどの攻撃は少し被弾していた。

ナインは再び『磁力魔法』を発動し、自身は壁を蹴つて五人の後ろに回り込む。

そこで男達の動きが戻ったが、銃器は『磁力魔法』によって奪い取られた後。

そちらの方へまとめて蹴り飛ばされた。
『磁力魔法』の球体ごと壁に打ち付けられ、五人は動かなくなつた。

『緩急魔法』で相手の動きを遅くし、『攻撃力強化魔法』を用いた蹴りでまとめて一掃。

スマートかどうかは無視して、本当に『磁力魔法』を使う必要はあつたのかが疑問だった。

「安全第一、かな」

強化系統の魔法に関しては持続性があるが、他の魔法は時間的制約があるため、本来なら多用するべきではないのだが、今現在の彼のステータスはとても高いので問題ないとも言える。

HP 3450、MP 235。

HPは最大値という概念が無く、食べた分だけ増え、寝ればデフォルトの2000になるという設定。MPも同様で、寝ればデフォルトの200になる。

MPに関しては魔法を乱用しているためあまり多くないが、HPは非常に高くなっている。数刻前に奢つてもらつたため、ここまで高ステータスなのである。

非常階段からは一本道で、左右に部屋がちらほらあつたがどれも藻抜けの空だつた。

「……さあて、残存戦力はどのくらいかな？」

「このくらいだ！」

ナインの独り言とも思える言葉に律儀に答え、十人程度の武装した男達が前後に現れた。

どうやら一階から上にも何人か潜伏しており、非常階段から背後を取つたようだ。

「少しでも動いてみる。撃つぞ？」

そう言つたのは、草薙だつた。自分のスキルでは戦闘に向かないと理解して、武装している。

「貴様、何が目的だ？ 只者じゃないようだが」

ナインはちらりと後ろの様子を見ようとしたが、威嚇射撃でそれを止めさせられた。

「……目的、ね。強いて言つなら、囚われのお姫様を助けに来た、とかか？」

「巫山戯ているのか？」

「いやいや、こっちとしては結構真面目なんだよ。なんせ？？」

ナインはそこで言葉を切り、右手を上げた。

だが、実際に使う魔法は、左手中指一つだけを折り曲げた時に発動する魔法。

「撃て！」

ナインの動作に草薙達は発砲、しかしその銃弾がナインを動かす事は無い。

『RPG』が生み出すHPは、万物に干渉する緩衝剤。銃弾も例外ではない。

銃弾が保存していたエネルギーを完全に無くし、銃弾は床に転がり、そして。

全てを押しつぶすような圧力が、草薙達を襲つた。

『重力魔法』

文字通り、重力を操る魔法。考え方によつては圧力魔法とも取れる。対象に立つている事すら儘ならぬ程の力をかける魔法。ゲーム内では補助キャラが好き好んで使つたりする。主人公クラスになるとあまり使わない印象がある魔法。

ナインを除いた全員は倒れ伏し、指一本動かす事が出来なくなつていた。

あまりの力に嗚咽を漏らし、息苦しさから気を失いそうな草薙は、それでも確かに聞いた。

「俺は勇者……その模造品だからな」

それは『不可視力』と呼ばれる男のアジト。そこに倉崎は監禁されていた。

倉崎の捕われている部屋には一切の光が入つてこなかつた。

鉄の扉がその部屋の唯一の出入り口で、今は鍵が掛けられ、固く

閉ざされている。

倉崎は衰弱していた。

『不可視力』との戦闘で打ち込まれた銃弾には薬が仕込まれていたのか、頭が朦朧としていた。

決して微量とは言えない血が傷口から溢れ、体力は酷く消費されていた。

元々体力はあまりない倉崎に、それは酷な状態だった。呼吸は荒く、目の焦点はおぼつかない。

掛けられた手錠が重く感じる程、倉崎は弱っていた。

スキルを使えなくなる手錠、ではないのだが、今の倉崎にはこの手錠を外す体力も残っていない。ここに連れ込まれてから、『不可視力』によって暴力を受け、今まで気を失っていたのだ。

「…………すいません……会長。僕は…………」

倉崎が弱々しく何かを呟こうとしたその時、地響きが聞こえた。衰弱しきった倉崎の意識でも確認できる、大きな魔力の動きがあった。

次いで、男達の罵声。扉越し、ここからそう遠くない場所で戦闘が起きているのが解つた。

数秒程でその音は止まり、足音が倉崎のいる部屋へと近づいて来た。その足音は全ての部屋を開けているようだつた。まるで何かを探しているような、誰かを探しているような足音。

そして、ピタリとこの部屋の前でそれは止まつた。

数秒後、扉が無理矢理、とても表現できそうな不自然な動きで開いた。

光が部屋を照らす。

数時間ぶりの光は眩しく、倉崎にはその足音の人物が誰だか解らなかつた。

「…………朝井会長?」

助けを望んでいた、きっと心配してくれているだろう人物の名を、思わず声に出して呼んでしまつた。

そして、その人物は答える。

「悪いな、会長じゃなくて。えつと、リオ、だつたか？ 大丈夫か？」

相も変わらずボロい布の服を着た、黒髪の少年がそこにいた。

ビクツと倉崎の体が震え、手錠と足枷が音を上げた。刺すような視線がナインに注がれていた。

「……悪い、名前で呼ばれるの嫌いか？」

自分を睨む倉崎に対し、そんな事を言ってみるナイン。

そう言えば、最初に会った時にもこんな反応されたな。いや、アレは俺がじつと見てた所為か。

などとどうでも良い事を考えていたが、弱々しい声でその思考は遮られた。

「ち、違う。あ、アレはそういう訳じゃないんだ。……いや、そうじゃなくて、お前、どうしてここに……」

警戒するようにナインを伺う倉崎。

「……ええと、弁解するのも面倒だし、何より時間がないので、自分の無罪は行動で示そうと思います」

ナインは手ぶらで倉崎の元に近寄り、そして手錠に指を当て、『強制開閉魔法』を発動。

重々しい音を上げ、手錠が床へと転がった。

(……しかし、酷い)

倉崎の顔には殴られた時に出来たであろう痣、手には擦りむき傷、学ランには血が滲んでいる。恐らく、その学ランの下はもつと酷い

事になつてゐるだらう。深く被つていた学帽も部屋の隅に転がつて
いる。

「あ、……ありがと」

手錠を外した段階でナインは感謝されてしまつた。

「……どういたしまして」

と素直に言いたいところだが、しかしこの状況、ここで感謝されるべき事は何も無い。まだ何も終わつてはいないのだから。本当ならここで帰ろうと思っていたが（ナインは倉崎が苦手だし、正直嫌いだつた）、感謝された分は働く事にしようとなインは考えを改めた。

「歩けるか？」

倉崎は手をついて立ち上がるつとしたが、すぐに崩れ落ちてしまつた。

（……俺があぶつて行くと言う案はないだらうし（恐らく全力で拒否してくるだらう）、悠長に体力が戻るのを待つてゐる暇もない……か）

非常にじどうもなくなつてゐた。

「……お前、なぜここに来た」

どこか馬鹿にした口調で言う倉崎。ナインは自分が引きつった笑みを浮かべているのが解つた。

（やつぱり、俺はこいつが苦手だ）

だからなのだろうか、ナインはちよつと意地悪したくなつた。

「ああ、どうせ説明しても解らなによ。お前等みたいな社会の頂点の人間にはな」

「…………それは」

倉崎は俯き、目を泳がせる。

助けてくれた人を馬鹿にした過去を少し悔やんでいるのだろうか。（……ま、本当に解らないだらうな。魔兵として育てられれば、感情なんて必要ないからな。誰かを助けたい、なんて気持ちも忘れるだらうや）

自分が停学になつた事件を少し思い出し、あの頃と自分が少しも変わつていな事を再認識するナイン。

そして、本当にどうしようもないと思つた。

自分はどうしようもなく、馬鹿なのだと。

「……どうせ俺の能力は説明したつて解らないから、お前は黙つて感じてろ」

「はあ？」

若干『何を言つているんだこいつ』という視線を浴びたが、それくらいでナインの決心は鈍らない。ナインは倉崎のすぐそばで膝をつき、頭に手を乗せた。

(この魔法は、本当に魔法だらう)

螢火のような淡い光が倉崎を包み込んだ。

「これは……」

「系統的には『治癒魔法』っていうのかな？ まあ、詳しい事は知らんけど。どうだ？ なんか変化あつたか？」

「…………」

何も答えない倉崎だが、その変化は一目瞭然だつた。先ほどまであつた目に見える傷は全て綺麗に消えている。不思議そうに手を動かす倉崎だが、先ほどまで感じていた痛みすらも消え去つている事を知つた。

「…………」

「ん。その様子じゃ全快みたいだな。良かつた良かつた」
じつと見つめてくる倉崎の視線から逃れるように、ナインは顔を背ける。

「……さてと、後はお前が助け出せよ？ 俺はもう疲れた。武器とかは使い物にならなくしておいたし、ほとんど気絶させておいた。

また不覚をとられる事も無いだろ？」

そう言つてふらりと立ち上がるナイン。ビニカ不自然な動きであった。

「というのも、『治癒魔法』はMPの消費が激しいからだった。残っていたMPの大半を使つてしまつている。

「ちょっと待て！ お前には聞きたい事がたくさんあるんだ！」

そんなナインを倉崎は呼び止めた。ナインは目線だけ倉崎の方にやる。

「お前は一体どうして、ここまで来たんだ？ お前に僕を助ける理由なんて無いだろう？ ??いや！ それよりもこれはどういう事だ？ 治癒魔法、とか言つたか？ それ以外にも何かのスキルを持っているんだろ？ お前は一体、何者なんだ！？」

一気にまくしたてる倉崎の台詞を全て聞き、ナインは答えた。

「悪いな。俺にも隠しておきたい事があるんだよ」

そして、さらっと倉崎の顔を見ながらそれを口にした。

「お前が女なのに男の格好をしているのと同じでさ」

瞬間、倉崎リオは体を震えさせた。

今、深く被つていた学帽は床に転がっている。

倉崎の、リオの顔はよく見れば、それは間違い無く、女性のものだとわかるだろう。

格好と深く被つた学帽、それに中性的な顔立ちが彼女の性別を曖昧に、そして男だと勘違いさせていた。

「……知つて、いたんですか？」

不意に口調が代わり、先ほどまでの口調は演技だとナインは悟つたが、しかしそんな事はどうでも良かつた。

「まあな。最初に会つた時から気付いていはいたけど、あえて言わ

なかつた。お前だつて知られたくない過去があるんぢやないのか？

「それは……」

口籠るリオに畳み掛けるようにナインは言った。

「悪いな、今は話せない。この事件が片付いて、もしも興味があるなら話しても良いぜ？ ただし条件があるがな」

そして、ナインはリオの目を見て、ニッと笑みを浮かべてこう言った。

「（）駆走してくれたら、話してやるよ」

小さな笑みを浮かべるリオを見て、ナインは人差し指を上げた。
「じゃ、俺は行く所があるからな」

そして、ナインの姿は消えた。

「いっつ……！」

が、次の瞬間には頭を抑えて床に転がっていた。

『転移魔法』は建物内でも使用出来るが、使用しても無意味である。

天井に頭をぶつけた結果しかないのだから。

第一章 失敗作品・6（後書き）

思う所があり、『瞬間移動魔法』『転移魔法』にしました。

「あれ？」

『脱出魔法』（建物、洞窟内からその入り口へとワープする魔法。魔法が解析されていない現代、例え牢屋だろうが密室だろうが無視出来る。完全犯罪、脱獄のお供）を使って元研究所から出たナインは、目の前にいる人物の意外性に声を上げてしまつた。

「ジョーズ。お前、来れないんじゃなかつたのか？」

「そのつもりだつたんだが、思つたより自体が深刻化したんでな」

その人物、人喰いジョーズの亡靈と名乗る男は、軽く会釈してナインの前に立つた。

「……なんか嫌な予感は薄々してたけど、まづいのか？」

「まづいな。黒嶺学園が情報規制をしているから、今はそれほど騒ぎが起こつていながら」

「…………」

「さて、時間が無いので手短いに言うぞ？ 僕には出来ないことだから、お前がやれ。一度しか使えないぞ」

そう言って、ジョーズはナインにそれを渡した。

それは、鋭い銀色の光を放つ小さな鎌だった。

「お前の瞬間移動なら、まだ間に合つだらう。救つてこい」

それだけ言うと、ジョーズは踵を返し、その場から立ち去った。急いでいるように見えないのに、その姿はすぐにナインの視界から消えた。

「…………」

残されたのは、鎌を持ったナインだけだった。
溜息を吐き、神妙な顔でナインは天を仰いだ。

「世界が何も変わつてないのか、それとも、俺が何も変わつてないのか……」

空はナインの重苦しい心情を嘲笑うかのよつた、綺麗な月夜だった。

「…………あの頃と、何も変わつてない」

「初めまして、と言つた方がいいか？」『イメージダウン幻想卸し』むどうつきなうすけ霧道鏡介

霧道達はその声で立ち止まるのを余儀なくされた。
ジョーズは霧道の行く手を遮るように、ふらつと小道から現れた。

「…………誰だ、お前は？」

霧道は睨むようにジョーズを見る。今は一刻も早く『インビジブル不可視力』を治療しなければならないのだ。

こんな怪しい（黒いローブにファンシーな髑髏面）の男に止められて、いる時間はないのだったが。

「……直接会ったのはこれが初めてだろ？が、『精霊』と言えば解るだろ？」

ジョーズの放った言葉で霧道の体が、まるで自分の全てを見透かされたかのように、ビクッと震えた。

「…………なるほど。お前が、人喰いジョーズか」「今はその亡靈だがな」

（よつこもよつて、このタイミングでお前が出てくるか……）

冷や汗が頬を伝つて肌で感じながら、強気に霧道はジョーズに問う。

「その亡靈が、一体俺に何の用だ
「取引をしようと思つてな
「取引？」

ジョーズは霧道に笑い掛け、頷く。

「そう。…………知つての通り、俺は今自由に動けないんだ。だから、手足が欲しい」
「…………それで俺達を、か」
「勿論、対価は君たちが起こしたこの事件の隠蔽。それと今後の生活の保証だ」
「随分と気前が良いな」

黒領学園といつこの国の現最高戦力相手に喧嘩を売つて、作戦が

失敗して助かるとは思つていなかつた、まして失敗作品と呼ばれ蔑まれて来た霧道には、今後の生活の保証程欲しい物など無い。

「お前だつて知つただろ。この世界には救いなんて本当に少ない。だから、俺達がその救いになろう。それが、力を持った者のすべきことじやないか？　『万物に憑く魂』の契約者」

霧道は黙り、そして二人の顔を見る。

『写撮許可』は先ほどからの会話の意味をほとんど掴めていないが、自分たちの未来が保証されるという事に関しては、驚きと喜びの狭間の表情を浮かべている。

『不可視力』は未だに目を覚まさない。止血だけは済ませているが、しつかりとした設備で診せた方が良いのは明白だつた。

『幻想卸し』の答えは、決まつていた。

「……なんだこいつや」

ジョーズに渡された地図に記されていた場所へ来たナインの一言目だつた。

人気の無い山道、その入り口。

そこは、柵に囲まれた異世界だつた。

呼吸する事もできない世界が、そこには広がつていた。

空氣に酸素は含まれていない。熱風と吹雪が入り交じり、大地が絶え間なく削られていた。

空氣は凶器。大地と工場は被害者。

「……何やつてんだよ」

それでは、その全ての中心にいる少女は、一体何者だと黙つただ
わづ。

加害者だらうか？

それとも、被害者なのだらうか？

「愛葉ー。」

ナインの叫びは、愛葉には届かない。
唸る風がその声を書き消した。

「……くつそー。」

しばし握っていた鎌を見つめていたがナインは覚悟を決めて、異世界へと変わり果てた工場跡へと踏み込んだ。

瞬間、約3000あつたHPが2000台前半まで減らされた。

「やば、忘れてた

ナインは急いで『吐息系軽減魔法』を発動。
そして、愛葉の元へと駆け出した。

『吐息系軽減魔法』

攻撃性を持つた熱と冷気に強くなれる魔法。どこかの異世界にい
ると言う龍族の吐く炎や吹雪に耐性が付くとか付かないとか。魔王
戦などでもよく使われる。愛葉戦ではずっと使つていた。

だが、『吐息軽減魔法』でも酸素のない空間で生き抜く事を可能
にするはずは無いのである。

現に、そんな魔法を彼は持ち合わせていない。

なぜ彼がこのよつたな劣悪な環境で無事なのか。

それは、『RPG』のスキルを持つている、その時点で発揮される効果のおかげだった。

『RPG』

それはHPとMPを生み出す能力。そこに間違いは無い。

ただ、『RPG』のスキルは、発動しているかいないかに関わらず、保持者に一定の恩恵を与えていた。それが、ナインを無酸素の空間で生かしているのだ。

『RPG』はお遊びの『プログラム』。ロールプレイングゲームをモデルに創られたスキル。

さて、ロールプレイングゲームに置いて、火山やら雪山などの王道のステージで、気温やら気圧、酸素の有無を気にしている作品はあるだろうか？ あつたとしても、それは他の大多数に埋もれるのではないか。

マグマに触れればダメージを受ける。だが、ダメージを受けるだけで済んでいる。

『RPG』のスキルは、それを再現しているのだ。

『RPG』発動中以外でもそれは作用し、気温や気圧、酸素の枯渇などの目に見えない現象の大半は無効化処理される。

『RPG』の真の能力は、これであった。

暗く何も見えない怖い世界。

響き渡る聞こえもしないはずの悲鳴絶叫怨嗟の声。

繰り返される暴力の数々が再生され、幾度と無く轟かれるリオの姿が脳裏に浮かび上がる。

そして、想像を絶する痛みによつて、事切れる。
それを嘲笑う、一人の少年。

私の所為だ。

和がり石を一人で彫りしたから

私が？？悪いんだ。

「みんなさい。

私は、怖い。

私の所為だと言われるのが、

先帝
小。

聞かせてきた。

生徒会長である自分はそれを他人より多く背負わねばならぬと、

けど、もう無理だ。

私の所為で、リオは死んでしまったのだから。

阿彌陀經疏解

沸き上がる負の感情を、私は抑えるのを止めた。

全て、壊れてしまえば良い。

轍レへてシまえ。

ふと、誰かに呼ばれたような気がした。

聞き覚えのある声だつた。何度も私を嘲笑つた声だ。

それなのに 酷く懐かしい声だった

その声には、憎しみや軽蔑などなく、どこか暖かみを感じさせる

声たつた

その暖かさが、全てを綺麗に拭ってくれた。そんな気がした。

自然と、頬を何かが伝つた。

けれど、力の暴走は止まらない。

「愛葉！」

熱風と凍てつく息吹、風刃と石片？？それら全てを受けHPは激減したが、それでもナインは愛葉の元へと脚を止める事はない。止める事など、出来るはずも無かつた。

聞こえぬはずの声に少女は振り返り、憎悪と困惑を見せた。

少女は泣いていた。

（結局、何も変わりはしなかった。あの事件で俺が知った世界は、何も変わってはいない。この世界は犠牲があつて、初めて成り立つていると言つ事は）

HPが2000を切つたが、ナインは脚を止めない。

（世界にはたくさんの人がいて、優秀な人間は良い生活を送る。才能の無い人間は、使い捨ての穴埋め品だ。ランクなんて物がなかつたとしても、それはきっと同じだろう。壊れた物は治さず、新しい物を買つように、才能が無ければ捨てられる）

HPが1000を下回つたが、愛葉との距離は近づいた。ナインはもうHPの残りを気にはしない。

（何かを得るために、何かを失わなければならぬ。それは真理

だろう。だけど、ランクを上げて良い生活を送るには、誰かのランクを下げなければならない。自分が強くなるには、誰かを殺さなければならない。そんなのは間違っている！ 平等なんて望んじゃいない。ただ、誰かを犠牲にするのは間違っていると思うだけだ。
…それは矛盾している、馬鹿だって思われるだろ？ だけど…）

H.P.がOになり、ナインの体を壮絶な痛みが襲つた。自分の体から血飛沫が舞い、体が燃えるような痛み、凍えるような寒さを体感した。

だが。

愛葉の涙と、自分の血。

尊ぶべき物はどちらか、ナインには解つていた。

だから、ナインは叫ぶ。

自分の意志を通すために、自分にそれを言い聞かせるために。少女にそれを知つてもうつために。

「田の前で誰かが犠牲になるのを、黙つて見過しそるのかよっ…！」

ナインは鎌を振り上げ、そして愛葉を切り裂いた。

瞬間、それは少女を喰らつた。

鎌は碎け散り、壮絶な痛みがナインの意識を奪つた。

第一章 失敗作品・7（後書き）

予定より一日早く更新出来ました。

あレ？ 昨日まで週別ユニークが100未満だったのに、あレ？

次回は金曜日を予定しています。

にっこりと笑みを浮かべた人間が田の前にいると、どうしてだろう、怖い。

それがナインの、リオの微笑に対する感想だった。

場所は高級レストランの個室。そこには一人しかいない。「こじは私の親戚が経営しているレストランなので、どうぞ遠慮せず」

田の前には豪勢な皿に乗せられた料理がたくさん並んでいる。恐らく、値段に換算すれば万の桁は軽く超えるだらうフルコースだった。

「……倉崎リオさん？ なんか悪い物食べたの？ 何なの？ 僕に一体何を求めているの？」

「別にそんな事はないですよ？」

リオは小首を傾げ、真っ直ぐな瞳でナインを見つめた。その仕草が妖艶で、ぐつとナインは息を飲んだ。

「いやいや、明らかに態度がオカシイ！ 何この待遇！ 一人称が僕から私に変わってるし！」

事件翌日、五月の朝の日差しで微睡みながら公園のベンチで空を見ていたナインは、リオに食事を誘われ、現在に至っている。時刻はちょうど昼となっていた。

「もうバレているのなら演技をする必要は無いと思いまして。……

似合つてませんか？」

「いや、そんな事は無いんだけど……」

「それとも、罵倒されるのが好きですか？」

「それは無い！」

くすくす笑うリオ。苦笑いを浮かべるナイン。

(やつぱり俺は？？)

「わかった。それじゃあ遠慮なく頂きます」

「どうぞ召し上がって」

何度もたつて繰り返したその台詞を、ナインは声に出さなかつた。

デザートまで食べ終え、食器は片付けられた。

「……で、一体何のようだ？」

「勿論、昨日のお礼だけです。他意は無いですよ？」

「あれ？俺の昔話とか聞かなくていいのか？ 知りたかつたんじやなかつたっけ」

リオは首を振り、それを否定する。

「そうでしたけど、やつぱり止めておきます。あつ、ある程度は勝手に調べちゃつてますが、良いですか？」

「ん。別に気にしないよ。俺は過去よりも未来に生きる男だからな」「頼もしいですね。では、今回みたいな事件の時はお願ひしますよ？」

「……最終的にどうなるのかよ」

「冗談ですか？って、そんな複雑そうな顔をしないでくださいよ。反応に困ります」

微妙に顔をしかめるナインに、リオも表情を強張らせた。

「えっと、正直に言いつと、頼つてもう一つ事で悪い気はしないんだよ」

「それなら？？」

と、リオは本題に踏み込んだ。

「もう一度学校に、黒嶺学園に戻つてはどうなんですか？」

リオの真摯な態度に、しばりへ迷つて、ナインは曖昧な笑みを浮かべた。

「……そりゃ無理だな」

「どうしてですか？ 今も学校にあなたのロロは残つていますし、

資格を取れば卒業、年齢なんて関係ないですよ？」

黒嶺学園は入学式こそあれど、卒業式と言つ物は存在しない。資格を所得、もしくは戦闘技術が認められた時点で卒業となるのだ。最も、戦闘技術を認められるには最低でも三年と、長期に渡つてその実力を判定されなければならないのだが。

「そうじゃないんだ」

「では、なんですか？」

ナインはリオの目を見た。リオもナインを見つめた。

二人の視線は、決して逸れる事無く真っ直ぐに絡み合い？？そして。

「……駄目だな。俺には視線で納得させるのは無理か」「氣恥ずかしそうにナインは目をそらした。

そのため、リオが微かに頬を赤く染めているのにナインは気付かなかつた。

「俺が試験で不正行為をしたのを知つてるだろ？」

「はい」

リオは自分が調べたナインの情報を思い出す。

（実技試験で満点という破格の結果を叩き出し推薦入学。しかし直後の試験で不正行為を働き停学処分。その成績故に退学ではなく停学処分……。実技試験で問われていたのは、スキルを用いた模擬軍事任務。怪我一つ負わず、最短時間でクリア。試験での不正行為なんて関係なく、学校が捨てきれなかつた逸材）

スキルこそ非公開だが、彼の能力は一時期学園に轟いた事もあるのだ。

最も、それもすぐに消え去つたが。

「俺がいた当時の黒嶺学園の試験はクラス同士の対戦だったんだが、今はどうなつてる？」

「今もそのままです。個人戦とチーム戦の二つがありますね。クラスの競争心と団結力を高めるためですが」

「そうだな。俺もそれには反対していない。で、俺のやつた不正行

為つてのは「

ナインは嫌な事を思い出す、といつよりは遠い過去を懐かしむよう言つた。

「助けに入つた事だ」

「えつ？」

リオは驚きを隠そとはせず、ナインは構わず話を続けた。
「当時の俺のクラスには、『戦国夢想』とか『糸離滅裂』って呼ばれる凄腕の奴がいて、チーム戦で他のクラスに圧勝していた。んで、その仕返しにと言わんばかりに、個人戦ではウチのクラスの奴らは過剰な攻撃を受けた訳だ。んで、あまりにも酷かつたから俺が割り込んで助けた。結果は停学」

「酷いじゃないですか！　どうして張り合わなかつたんですか？」
まるで自分の事のように顔を真っ赤にして起こるリオ。

「ん~、それで知つたからかな。俺以外に割り込む奴がいなくて、負ける方が悪いって雰囲気だつたから。そういうモンなんだな、と思つて。お前もそう思うだろ？」

「……それは」

黒嶺学園は魔兵を育成する学校だ。

ナインの行いは、使えない兵を助けるために作戦を無視するような行為だ。

戦場でそんな事をすれば、大勢の命が失われる事は確実だ。

「だから、俺は戻れないんだ」

非道さに目を瞑り、ルールを重んじる教育方針が気に喰わなかつた。

だからナインはルールを破り、学校を後にした。

「……そうですか。まあ、最初から諦めていた事なんで、良いですけどね」

リオは仕方がなさそうに肩を竦める。

「悪いな」

「謝らないでください。せつとここれからもじつじく誘うんで」

「おいおい、また『冗談か？』」

「『冗談？？』ではありませんよ？ 私は、あなたと一緒に学校に通つてみたいと思うんで」

プロポーズに思えなくもない台詞を真顔で言つリオに、ナインは焦りを感じていた。

「……なんて言うかさ、俺の事貰いかぶり過ぎだろ。ほんの気まぐれで助けただけなんだぞ？」

「だからですよ。意識しなくとも他人を助けられる、それがあなたの本質なんじゃ無いんですか？」

なんか恥ずかしい。

このままでは胸を焦がさんとする何かに焼かれてしまつ、そう思つたナインは話を変えてみる。

「……お前は変わつたな。いや、俺は語れる程お前の事を知つてはいないんだけどさ。何となく、そんな気がするんだよ」

「いえ、私は変わりましたよ」

「へ？」

驚く程簡単にリオはそれを認め、素直にナインは驚いた。

「私は変わりました。勿論、一人称が僕から私に変わつただけではないですよ？」

「そりゃそうだろうけど」

「忘れていた心を取り戻せた、とても言つんでしょうか。私も、このままでは駄目だと思うんです。このまだつたら、遅かれ早かれまた今回みたいな事件が起ころうと思います。だから、変わらないといけないと思つたんです。自分が上に登るのに、下を見るのは間違つていると、そう思つたんです」

ナインは一人、安堵の溜息をついた。

（俺は変わってない。世界も変わってない。……けど、これから変えれば良いだけの話か）

ナインはリオに微笑む。

「頑張つてくれ。もし困つた事があつたら、いつでも呼んでくれよ。

多分助けに行けるから」

「多分つて何ですか！ ちゃんと助けに来てくださいよ！」

「いや、だつてお前十分強いだろ？」

リオはむつと顔をしかめているが、ほのかに頬が赤みを帯びていた。

それを誤魔化すように、リオは言った。

「……それなら、私より強いあなたは、一体何者なんですか？」

ナインはその質問にさうつと答えた。

「歴史に真実を求めるのは間違つてゐる。歴史の真実なんて、当事者しか知りはしないんだ」

人喰いジョーズの亡靈は椅子に腰掛け、ナインに言い聞かせた。
「歴史に意味なんて無い。過去は過去。参考程度にしかならない。

過去の過ちを繰り返さない、それだけさ」

「……歴史の改竄者、もしくは歴史の真実を知る者の言つ事は違うな」

ナインの言葉に、ジョーズは静かに首を振つた。

「俺はそんな大層な奴ではない。ただ、当事者だつただけだ。……
まあ、真実の詐称はよくするがな」

「要するに嘘つきだろ？」

ナインは揶揄し、ジョーズは笑みを零した。

「まあ、そのおかげで助けられたから感謝はするけどさ。お前の力には敵わないよ」

「好きで手に入れた力じゃないんだがな。それに、本来なら……」

ジョーズはそこで言葉を切った。

「『人喰い』、それはお前の役目じゃないんだろ?」

ナインがそれを引き継ぎ、何度も無く経験した、あの不可思議な現象を思い出す。

『人喰い』

それは、人を喰らう力ではない。勿論、人を喰らう事も可能だが、その本質は別の所にある。

人が自分を自分だと認識するための何か、それを喰らう事が出来る力。

それを有しているから彼は『人喰いジョーズ』、その亡靈なのだ。喰われた者は、喰われる以前の自分と認識される事は無い。喰われば、もう一度と過去の自分には戻れない。

『人喰い』の力は人の過去と現象、記憶と記録??存在という概念を喰らう事が出来る力。

その力を形に表せば、それは鎌。

歴史の改竄、真実の詐称を行なえる力。

神ならざる者にして神と形容される存在。

それが、『人喰いジョーズ』の正体。

気を失っていたのはほんの数秒だろう。

ナインはすぐに残つたMPをフルに使い、『治癒魔法』で傷を治した。

ナインが切り裂いた愛葉の体には、傷一つない。

あの鎌が喰らつたのは、愛葉とこの事件の関係。

鎌は、これより以前の記録を食らいつくし、碎け散つた。

愛葉本人と、この事件の当事者達しか真実には辿り着く事は出来ない。

例え愛葉が暴走している映像が撮られていたとしても、それは今では何か別の存在に置き換えられているだろう。

それは決して解明、理解の出来るよつた類いの力ではない。
まるで魔法のようだ。

奇跡とは形容出来ない力。

「才能を否定された彼らが求めたのは、認めてくれる未来だ。その手段の一つとして、本当に脳みそを喰らうつもりだったようだが、おぞましい話だな。しばらくここには置いておけないと思つて知り合いに任せたが、きっと反省しているだろう」

九州までの道は長い、ヒジョーズは付け足した。

「……自分たちの求めた未来は、人を捨ててまで手に入れたい物だつたのかどうか」

「彼らには自分を見つめ直す時間が無かつただけだ。一度落ち着いて考えれば、答えは変わるだろ?」

そうだといいな、とナインは呟いた。

直接の面識こそ無いが、彼らの気持ちをナインは理解しているつもりだった。

「しかし、『不可視力』は失敗作品だが、『幻想卸し』は眞の意味での失敗作品だつたな」

「『不可視力』は確かに……、呼吸を止めている間しか透明になれないんだつたか?」

独特的の喋り方は、その欠点を隠すための物。

「そうだ。失敗作品というのは、能力を発動するのに活動を阻害される欠点のあるスキル保持者、それを指す言葉だ。呼吸を止める、それは大きなリスクだな」

「で、『幻想卸し』は?」

「奴は元々幻術を使えた。それとは別に『幻想卸し』を手に入れたが、それは使い物にならなかつた。そういう話だ」

「なるほどね」

「『プロジェクト』

黒嶺学園の生徒の中で彼女のスキルは最も低い『D』ランクだつた

「で、憂さ晴らしと自分のスキルを上げる、もしくは別のスキルを手に入れるために事件に加担したのか」「そういう事だ」

誰かに認められたくて。

でも誰にも認められなくて。

認められるには力が必要で、その力が自分たちには無くて。

才能と言つ一言で終わらされる人生に嫌気がさしていく、それに抗つてみて。

そして、人の脳みそを喰らうような人間に成り果てる。

けれど、人間を捨ててまで手に入るほど、他人の評価に価値はあるのだろうか？

本当に、才能は無かつたのだろうか？ それしか道はなかつたのだろうか？

彼らを送り出す前に、ジョーズは言つた。

「誰かに認められる前に、自分を認められる自分になれ。自分を認められずに、他人から認められると思つな」

彼らが変わるのは、もう少し先の話。

「やあやんー」「さあやつ

ナインは押し潰されていた。愛葉がナインを押し潰していた。

場所はいつもの公園、いつもの時刻。

リオとの食事を終え、食後にコーヒーでも飲もうと思っていた矢先の出来事だった。

「痛つて？？って、朝井かよ！　お前は墜落癖のある魔法少女かよ！　わざと降りろ！」

魔法少女という表現では不適切だな、と思つてはいたナインだが、そこは無視せざるを得なかつた。

愛葉が、上から降りてくれなかつた。

「……朝井愛葉さん？　何？　怒つてるの？　ビビして？　怒りたいのは俺なんだけど」

「…………んで」

「はい？」とナインはそれを聞き返した。

愛葉の声はとても小さく、聞き取れるような物ではなかつた。すると愛葉は、ナインの襟首を掴んで問いただした。

「なんで？　なんでアンタは、助けてくれたの？」

「は？　なんの事だ？」

「とぼけないでよ。アンタなんでしょう？　私の能力の暴走を止めたのも、リオを助け出したのも」

キッと睨みつけられ、ナインは思わず口から出しそうになつた軽口を叩けなくなつた。

「……こだわるな、そこん所。俺としては、お礼とか理由とかどうでもいいから、わざと降りてほしいんだけど」

誰かに見られたらどうすんだよ、とナインは思った。

自分に馬乗りなつている少女。下にいる人間としては、まあ、別に気分としては悪くはなかつたりするけど、やっぱり恥ずかしいと言つか、情けないと言つか。

「先に答えて。そしたら降りるから。……どうして、助けたの？」

どうやら降りたら逃げると思われているようで、愛葉はナインに乗つたままだつた。

もしかするとこの娘、羞恥心とか欠けちゃつてる？　とナインは

疑わすにはいられなかつた。

「……ただの気まぐれだよ。それ以外の何でも無い」

「…………」

しばらぐナインを見つめていた愛葉だつたが、諦めたように溜息をつきナインから降りた。そして手を差し出す。

「……何?」

「立つの手伝つてあげよつか、と思つただけ」

「なんで?」

「……ただの気まぐれ」

「…………あつそ」

気まぐれなら仕方ない。

ナインは素直に愛葉の手を借り、立ち上がつた。

「えつと、ありがとう。アンタのおかげで色々と助かつたわ。幸い、行方不明だつた子は皆見つかつたし」

一人、春日だけは見つからなかつたが、転校したと愛葉は聞いてゐる。

彼女の事は解つてやれなかつた自分の責任だと思い、特に恨んではいなかつた。

「そりや良かつたな。まあ、連中の目的が優秀な脳みそ集めで、その最たるがお前だつたんだから、もしかすると人質か誘き寄せるためでしかなかつたのかもしれないな。まあ、馬鹿にされていた憂さ晴らしも混ざつてはいたが」

「…………そうね」

リオに事件の真相を聞いているのか、氣まずい顔をする愛葉。

「しかし、なんで暴走なんかしたんだ? 僕にはさつぱり解らなかつたんだけど」

ナインの質問にしばし沈黙し、何故か顔を赤らめる愛葉。

「…………何でも良いじゃない。もう一度とあんな事にはならないから」

「それなら別に良いけど」

と言つたナインだが、不意に何かを思い出したように付け足した。

「お前さ、一人で悩むなよ。お前には頼れる仲間がたくさんいるんじゃないのか？ 会長って仕事は何も背負うだけじゃない。信頼つて支えがあるから、会長は存在出来るもんだろ」

「……い、言われなくとも解つてるわよ、この馬鹿」

周囲に陽炎が見え始めているが、一人は気付かない。

ついでに、じつと自分を見つめる視線があるのにもナインは気付いていない。

愛葉は自分の顔が赤くなっているのに気付き、慌てて顔を下に向けた。

「ん？ まだなんか言いたい事あるのか？」

焦った愛葉は、ポンと頭に浮かんだ質問を口にした。

「ア、アンタはそ、結局何者なの？」

ナインは本田一度田のその質問にさりと答えた。

「NEETだよ。誰かに必要とされたい、NEEDとも言おうかな

第一章 失敗作品・8（後書き）

第一章終わりです

次回更新は未定ですが、

大体の流れはありますので、一週間以内には更新したいです。

第三章 魔法使い・1（前書き）

今回から第三章です。

第三章と第四章は話が繋がるよつた気がします。
導入部なので短めです。

第三章 魔法使い・i

「実験体N.O.・9、意識接続順調です」「引き続き実験は進めろ。」この実験に、この国の未来は掛かっているんだからな」「解りました」

一人の人間の何かが、圓されていた。

「調子はどう? 頭痛とかはしない?」

白衣の女性は田の前の少女に尋ねる。

「まあまあ、かな」

少女はショートの茶髪を梳き、白慢げに言つ。幼さを残した顔立ちで、翡翠のような輝きを持つ瞳。

少女の格好は、病院の検査服。そして場所は白い壁で覆われた、診察室。

少女は患者で、白衣の女性は医者だった。
某国の空港、その医療施設だった。

「はいはい。あなたは優秀な子ですからね~」「……馬鹿にしてるでしょ~」

ジト目で少女は女医を睨み、気まずそうに女医は田をそらした。

「え～と、あつ、そうそう！ 検査の結果は、異常無しだったわ」「つて事は……」

少女の目が期待に溢れ、女性は頷いた。

「ええ、出国許可がされたわ。御免なさいね？ 規則だから検査を受けてもらつたのだけど……」

「いいわよ、別に。あなたに非がある訳じやないでしょ？ それに、これで大手を振つて日本に行けるわ」

小さくガツッポーズをする少女に、女医は彼女に服を渡した。出国に当たつて健康診断が必要だつたのだ。

「あなたの行き先は日本だつたわね」

「ええ。数年前までは大した見所も無かつたけど、今となつては別だもの」

服を受け取り、全く気にする事無く女医の前で着替える少女。同性だからだろうか、まったく恥じらう様子が見られない。

そんな少女に、女医は自分とは別次元の人間のように語りかける。

「あなたに取つて数年前までの世界は、どにもそんな物じやなかつたの？ 天才魔法使いさん」

「そうね……、確かに詰まらない物だつたわ。こんな事言つのは不謹慎だろうけど、その点は侵略者さんに感謝してるかも。魔法使いを表舞台に上げてくれた事に」

「昔なら魔女狩り、昨今では電波なんて呼ばれているものね。で、世界で魔法が認められて、あなたはその最先端の学校に留学するん

でしょ？あの黒領学園に」

黒領学園、という単語を強調しながら女医は言ったが、少女はまるで気にしていなかつた。

「そんなの関係ないわ。どうせ今は四魔戦とかいう武闘大会もどきの準備で忙しいから。あたしが興味あるのは、最先端の魔力を使つた技術、それと対極の古代魔法だから」

「要するに、魔兵にはなる気は無いつてこと？」

「その通り。人口の一パーセントにも満たない魔法使いの一人が入学したい、なんて言えばどこでも入れてくれるし、多少の融通も利くわね。特に、魔兵専門学校ならね」

一通り着替え終えた少女は、くるりと回つて変な所が無いか見直す。

少女の服装は、黒を基調とした制服。その胸には金の刺繡が入れられている。

「スキルではどうしても魔法には届かないものね。スキルは、どちらかというと科学の延長戦上にあるもの。魔法は、理解や解釈が不可能な、不思議な力」

「奇跡、と形容するのが一番いいかもしないわね」

「それで、結局あなたは何をしに行くの？」

少女は、クスリと微笑み女医に言った。

「ちょっと研究に。ついでに、探し物を見つけようかと思つて」

第三章 魔法使い・1（後書き）

しばらく彼女がメインになると思われます。
感想よろしくお願いします。

第三章 魔法使い・2

ナインはチャラチャラと音が鳴る財布を持ち、自動販売機の前に立っていた。

「さて、今日も一杯飲み??」

ナインは何故か苦手なコーヒーを飲む習慣がある。
毎日飲めば慣れるだろう、という発想が生んだ習慣だが、しかし謎である。

何故いちいち割高な自動販売機で購入するのか、それは謎である。
毎日飲むのであれば、箱入りで買溜めしておけば安上がりになるだろう。恐らく気付いていないだけだろうが。
そして、那些細な節約が出来ないから。

彼の財布にはリングブルしか入っていないのだ。

「……あれ？」

ナインは財布をあわる。
札は無い。小銭も無い。あるのはクーポン券とお得意様カード、
それと大量のリングブルだけ。
現金は持ち歩いていないんだ！　え？　カード払い？　違うよ、
貧乏なだけさ！

NEET、それ故に金がない。
働かざるもの喰うべからず。

「……最近、バイトも無かつたナインは、ついに金欠になった。

「これから一緒に食事なんてどう?」

「行く!」

「その代わりと言つては何だが、頼みたい事があるんだが、いいか?

「……食事は?」

「高級レストラン、ちなみにもし引き受けてくれるなら、お金も出す」

「乗つた!」

「……最近のナインの食事事情は、残念な事になつていた。

朝食はパンの耳、昼食は試食品、晩ご飯はコンビニで捨てられる賞味期限切れ弁当。

経済大国日本、プライドさえ捨ててしまえば飢え死になどしないのだ。

愛葉達を見かければ物欲しそうに眺めるナインに、プライドなどあるはずも無かつた。

生きるために手段を選ばない、殘念な男だった。

だから、食事に釣られてほいほい付いて行つてしまふのだった。

とりあえず洗濯にだけは気をつけているナインは、おかげで着古された服装で、明らかに場違いなレストランにいた。

そこは、以前リオと一緒に食事をしたレストランの個室である。けれど、今回は一人きりという訳ではなかつた。

「紹介するわね。」こちら、留学生のミカ・ルーナさん。で、こちら

が……

「ナインだ。よろしく」

「……………」

ナインは余裕し、ルーナと呼ばれた少女はジト目でナインを凝視していた。

ルーナは、その個室に入つた時には既にいて、黒嶺学園の制服を着ていた。肩までの茶髪、緑色の瞳である。

一食で2000kcalはあるだろう豪華絢爛の食事を終え、愛葉、リオ、ナイン、ルーナの四人は本題へと入つていた。

「先に言つておいたと思うけど、念のためにもう一度言つだ？」

ルーナがいるためか、キャラ作り中のリオが説明を始める。

「知つてるとと思うが、五月は四魔戦に出場する学校を決めるため、学校対抗で試合を行なつてゐる。で、ルーナはそれに参加しない事になつているのは良いな？」

四魔戦とは、全国にある魔兵専門学校の頂点を決める武闘大会、のようなもの。

それの結果によつて、設備やら教員やら生徒のスカウト優先権などが決まるものだ。

勿論、大会で好成績をあげた生徒にも、良い就職口やランクの昇格などの利益がある。

が、武闘大会もどきなので、戦闘向けのスキルでない生徒は参加しなくとも良い事になつてゐる。

チーム戦もあり、偵察スキル保持者などはそちらに参加する事もあるが、基本的に参加は生徒の自由である。

件のルーナは、といふと。

「そりや聞いてたさ。研究目的の留学だから、戦闘には極力参加しないんじゃないんだつたか？」

「そう。それで、五月はその準備とか試合とかで私達はちょっと忙しいの。そして、ちょっと問題があつて……ね？」

愛葉チラリとルーナを見て、ルーナにこの先を促す。これから先の話はナインは聞いていない。

だが、なんとなく、嫌な予感はしていた。
そして。

「……こいつ、ほんとに役に立つの？」

ルーナは面倒臭そうに、といつか露骨に訝しむ顔をして、刺々しい言葉を放つた。
さらば。

「それもそうよね」「それはそつだつた」
「えつ、そこ頷いちゃうの？」

思わず裏切りに遭い、狼狽するナイン。逆に言つたルーナが二人の態度に啞然としていた。

「えつ、いや、ほんとなの？」
「冗談。見た目は微妙だけど、腕は確かだから」
「そうだな。碌でもない奴だけど、責任感はあると思つ

愛葉が腕を、リオが信頼性を保証したが、当のナインは微妙な顔をしていた。

「……褒められた気がしない。軽く馬鹿にされている気がする。帰つて良いですか？」

「食い逃げするつもりか？こここの料理は、心折価格だぞ」「心が折れるつてどんな価格だよ！」

少なくとも、皿洗い程度の仕事で食費を返せはしない事は明白だつた。

正直に言えば、『脱出魔法』と『瞬間移動魔法』を使えばいかなる犯罪行為も可能だつたりして、更に言つなら十分なカロリーを摂取したナインなら、どれほどの相手でも『ゴリ押しで逃げ切れるのだった。

そういう魔法の使い方はしない、それがナインだが。

「……で、結局こいつは役に立つの？」

再度ルーナが愛葉とリオに尋ね、一人は答えた。

「大丈夫。なんだかんだ言つても、腕は黒嶺学園の実技試験で満点レベル、まあ、試験中に助けに入つて停学中だけど。その点、丁度いいでしょ？」

「…………面白い奴ね」

試験の不正行為が丁度良いとはどういう事なのか解らないナインは、目の前で微笑を浮かべる三人を見て体を震えさせていた。

特にルーナ。

心底面白そう、どこか天然記念物を見るような目だった。

「解つた。一人がそこまで言つんなら、そなんんでしょ」

ルーナは立ち上がり、右手を差し出し握手を求める。

「あたしの名前はミラ・ルーナ。魔法使いよ！」

ナインも見習いその手を取り、答えた。

「俺の名前はナイン。仕事も収入も無いんだ」

につこりと微笑み合う二人。

だが、ナインの右手が悲鳴を上げた。

「痛つ！！」

『RPG』を発動する間もなく、ナインの右手の骨が「ツボキ」と痛々しい音を奏でた。

ルーナは手を離さず、愛葉達に尋ねた。

「……こいつ大丈夫？」
間な匂いがする」
くだらないシャレとか、ものすごく駄目人

- 1 -

さすがに、一人も答える事はできなかつた。

出ぬい頭に常に攻撃されれば、苦手になつてもしかたないだろ？。

第三章 魔法使い・2（後書き）

少々忙しいのと、もう一作も書きたくなつていてる私がいます。
次回更新は、火曜日以後。

感想、指摘などお待ちしています。

第三章 魔法使い・3（前書き）

微妙にスランプ気味な氣があるので、差し替えるかもしれません

「……気が乗らない」

ナインは、もう一度と潜る事は無いと思つていた門の前に立つていた。

幅五メートル、高さ三メートルの巨大な門。

黒嶺学園の入り口立つたナインは、大きな溜息を吐いた。

「護衛？」

その不穏な空気を帯びた言葉を再度尋ね、ルーナは頷いた。

「そつ。あたし達魔法使いは希少な存在だから、色々な組織に様々な目的で狙われる事が多々あるの。この国に来る前から鬱陶しくらい、ね」

「それで、護衛が必要だと？」

リオが頷き、愛葉が答えた。

「普段は私たちが周りにいて見張つているんだけど、五月はちょっと無理なの。だから、五月一杯護衛を頼めないかしら？」

「というか、食べたんだから働け」

前払いとして豪華な食事を食べてしまつてゐるナインには、もう後戻り出来なかつた。

「生徒のほとんどが、試合やら修行とやらで歩いているみたいなのは幸いだが……」

五月は四魔戦に参加する学校を決めるため、学校対抗でトーナメントが開催される。黒嶺学園も例外でなく、そのトーナメントを勝ち上がらなければならない。

チーム戦と個人戦が行なわれるが、当然のように全員が参加出来

る訳ではない。そのため、試合に参加出来ない生徒は応援（という名の偵察）、もしくは各自で修行するように言われるのだとか。

修行、という辺りが魔兵専門学校らしいと言えば、らしい。

「嫌だな……」

ナインは、会いたくない人間が一人いた。

黒嶺学園にいたのは、一ヶ月にも満たないわずかな期間。それでも、苦手な人間の一人は出来たのだった。むしろ、一ヶ月しかいなかつたからかもしだれないが。

「まあ、そんな事言つても仕方ないか。ちょうど、あいつとは縁の無い場所だし」

諦めたように、ナインはその門を潜つた。

「時給500円！ 三食付き！ これで今月を乗り切れる！」

金額は控えめだった。

黒嶺学園の図書館には、二人しかいなかつた。

図書館は学校と渡り廊下で繋がつており、ルーナとナインである。

現在、他の生徒は他校との試合に出向いており、校舎内には一人しかいない。

「……護衛つて、学園内でも本当に必要なのか？」

「あたしだつて必要ないと思つたわよ。でも、愛葉が……」

「なるほどね」

黒嶺学園は結界が張られており、生半可な攻撃では揺らぐ事は無い。そこに侵入するのは、ほぼ不可能と言つても過言ではなかつた。

「で、あんたのその格好は何?」

「これか? 変装、という奴だな」

ルーナに怪訝そうに見られたナインの格好は、黒嶺学園の学ランにサングラスと言つた、昨日のまでのボロい格好とは一線画する格好。

制服は停学時の物をそのまま使っており、サングラスはワンコイン臭がしていた。

「変装つて……、何? 会いたくない奴でもいるの?」

「まあ、そうだな」

ふうん、とルーナはどうでも良さそうに相槌を打ち、思い出したように付け足した。

「ああそりだ。好きな事してもいいわよ。あたしの邪魔さえしなければ」

「いいのかよ。俺の自給つて、お前が払ってくれるんじゃなかつたか?」

「だから、形だけ。別にあたしはあんたの事頼りにはしてないから」先日のシャレの所為でナインの信用はがた落ちしていた。

「自分の身は自分で守る。そりやつて生きて來た訳だし。魔法使い舐めんな」

本当に護衛の意味も無かつた。

「……………そりやつ、俺は飯喰つて来るわ」

そう言つて普通にドアを開け、図書館から抜け出すナイン。責任感とか無いのだろうか。

「……本当に駄目な奴」

ルーナのナインに対する信用が底辺に達した! 時給が400円に下がつた! 三食付きから一食付きに下がつた! 態度が素つ気ないから刺々しいになつた! ジト目が哀れみを帶びた!

しかし、そんな事を知らないナインはと言つと。

「さて、学食は無理だろ？から、購買でなんか売つてないかな。」

最悪、自販機でも良いか」

と、手を擦りながら図書館を後にしていった。彼の財布には、食費として渡された五千円が入っていた。ちなみに、今日の分だとか。

「「Jリヤ 楽な仕事だ」

自分の評価がとんでもなく酷くなっている事に気付かず、ナインは閑散とした校舎を見て回っていた。誰もいないと、何だかテンションが上がるのだった。

ルーナは調べ物をするため、学校の図書館に来ていた。

調べ物とは、この国で異常に発展した魔力を使った技術だった。

今ルーナが調べているのはスキルだった。

情報の削除しやすさを求めたのか、それは紙媒体でまとめられていた。

「スキルは……、中学二年生時に自分のスキルを考え、中学二年前までにその考えを元に脳のスペックと相談しながらプログラムする。なるほど、だから独創的なのか。あらかじめ脳のスペックを提示して、それに見合ったスキルを選ばせるあたし達の国のやり方とは全然違う」

本当なら魔導書なんかを読みたい所だが、生憎この図書館にはその類いの本が無かつたため、ルーナはそれを読んだ訳だったが、それでも目的を十分に果たせそうだった。

ルーナの目的、それは？？。

「……って、一体いつまで、」飯食ってるのよ」と、ルーナはナインが出て行つてからもう一時間程度経っている事に気がついた。

いくら何でも遅いし、これではお金を払える仕事振りではない。

「……あたしもなんか食べに行こう」

時刻はちょうど昼だった。

ルーナは図書館のドアを開けようとして？？、

「あれっ！？」

開かなかつた。

ドアは押しても引いてもまるで動かない。いや、これは？？、

「結界……いや、魔法！？」

ルーナは魔力を手に集め、図書館のドアに触れる。

瞬間、ルーナの魔力に反応し、紫色の魔法陣が浮かび上がった。ドアには無数の複雑怪奇な魔法陣が重ねられている。いや、よく見るとその魔法陣は図書館全体を覆うように展開されていた。

「これは『強制開閉魔法』に『呪縛魔法』……『魔法反射壁』を重ねてる！？ どこのどいつよ、こんな王家の墓にでもするような魔法使つたの！」

『強制開閉魔法』により扉を封印並みに閉じ、『呪縛魔法』で扉を固定、『魔法反射壁』で魔法を効かなくしている。『呪縛魔法』と『強制開閉魔法』で物理を、『魔法反射壁』で魔力を完全にシャットダウンしていた。

閉じ込められていた。

「……けど、内側には『魔法反射壁』は効力を及ばない」

ルーナは魔力を指尖に込め、六芒星を描く。描かれた六芒星は紫色の軌跡を残し、ルーナはそれに手を添えて、魔力をそれに籠める！

「はっ！」

刹那、ドアは掛けられた魔法ごと吹き飛ばされ、そして？？。

黒領学園の制服を着た二人の人間が対峙しているのを見た。

「誰だ……つて、ルーナか？」

制服を着た一人、ナインはサングラス越しにルーナを見るが、その目はもう一人に向けられてた。

その視線先にいるのは、取り立てて特徴の無い男だった。

その男とナインはおよそ五メートル程離れており、その間にルーナがいる形だった。

「あんた、何してんの？」

何がどうなってるのかさっぱり解らないルーナは、ナインと男を交互に見る。

そして、男が動いた。

取り出したのは、サブマシンガン。安全装置は外されており、指

先が引き金にかかっている。

そして、躊躇無くルーナにそれを受け、引き金を引いた。

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ！

銃声はなり響く。ただ、何も破壊しない。

ルーナと男の間に現れた黒い球体が、銃弾を全て引き寄せていた。

かを取り出し、ピンを抜き、ナイシンとルーナの間に放り投げた

ナインがそれを何か理解するのと、男が笑みを浮かべるのは同時。
それは、手榴弾。

次の瞬間、爆音が学園内に轟いた。爆発が、一人を飲み込んだ。

「……大丈夫か？」

いつの間にか床に倒れ、目を閉じていたルーナが瞼を開けると、そこは爆心地だつた。

埃が舞い、床に黒く煤けた跡が見えるか、それ以外は特に変化が見えないのは、さすが黒嶺学園と言つた所だろうか。

カインが覆い被さつていた。

「え？ ……ちよつ、え！？」

での戦いに混乱するルーナ。

「とりあえず、怪我はなれりだな」

「悪い、あいつ逃がしちまつた

ナインの言葉通り、先ほどまでいた男はもういなかつた。しかし、ルーナに取つてはそんなのどうでも良かつた。

「あいつ？……いや、全然解かない！　何がどうなってんの？
ああ～、もう！」

頭を抱えて唸っているルーナにナインは言った。

「お前の予想以上に、こつや厄介な依頼だよ」

第三章 魔法使い・3（後書き）

異世界トリップものとか、現在更新停止中のもう一作とかも書いた
い。
どうしたものだろうか。

「とつあえず、ここをどうにかしないとな

手榴弾によつて焦げてしまった床と、ルーナによつて吹き飛ばされたドアを見ながらナインが呟いた。

不審者を侵入させた学校側の責任と言えばそうだが、しかしどアに関しては適応外だろ？

「そうね。……ん

相槌を打ち、指先に魔力を籠めるルーナ。ルーナは指先で六芒星を円で囲つた、ペントакルを空中に描き、それに魔力を籠める。周囲を淡い螢火のような輝きが満たし、次の瞬間には、何事も無かつたかのようにドアと床は元通りになつていた。

『再生魔法』

物体の状態を一定時間前と同じ状態にする魔法。皆が使えれば、修理屋さんとか首になつちゃいそう。こういつ魔法は使えない人が多いから、認められているのかも知れない。

「魔法ね。便利だこと、すばらしい？？げほつ

他人事のように呟いたナインの腹を突くルーナ。

「何言ってんの。あんたも魔法使えるんでしょ？ それも、王家の墓にでも掛けるような、馬鹿みたいな魔法」

腹を抑えてルーナを見るナイン（どうやらお腹を触れられるのが

茜手のようだ)は、恨めしそうにぶつぶつと文句を言った。

「……とこりか、なんでいきなりドア吹っ飛ばすんだよ。聞き耳立てるよ。俺の苦労が水の泡だろ。……あれ掛けるのに『日本の名水』三本消費したのに」

ちなみに、ナインのMPの回復は、基本的に水分である。

その回復量はかなりいい加減で、名水とか湧き水が100mlで50回復、『コーヒー』やジュークなどが100mlで20回復、青汁や栄養ドリンクが100mlで100回復する。

どうやら、『RPG』のスキルを創ったプログラマーが、聖水とかエルフの飲み物などで回復させようと思ったみたいである。

勿論食事でも回復するが、それは大体、その時のMPの5パーセントだった。

HPと比べて、MPには厳しい制限がされていると言える。

「悪かったわね。でも、何にも言わないあんたも悪い!」

「あうひ

ビシッとナインにチョップするルーナ。さすがにこの程度の攻撃に『RPG』を使う気はないみたいだった。

「……で、やつきの奴は何?」

逃げてしまつた男を捜すように廊下を見るルーナだが、その男の姿はどこにも見当たらなかつた。

「ん? あれがお前を狙つてた奴じゃないのか?」

「知らないわよ。敵の素性をいちいち調べてたら切りがないもん」

拗ねるようにツルーナに、ナインは小言を言った。

「あ～、それ止めといた方が良いぞ。自分がなんで狙われるか知らないと、思いもよらない陰謀に巻き込まれたりするから」「何？ あなたもそういう経験あるの？」

好奇心が見え隠れするルーナの視線を避けるナイン。

「いやいや、たまたま相手がどういう組織か見当ついたから。かなり厄介な組織だけど理由無く狙われる事なんてない、と言つ事はその理由が無くなれば襲われないで済むだろ？」

「……まあ、そうね。努力はするわ」

それって、覚えていたらね、そのうちにね、みたいに真剣さが伝わらないよな。

と思ったナインだが、自分の忠告は対外聞き入れてもらえないと悟っていた。

というか、自分もそつ言つて仕事をしていなかつたのである。

「だから聞くが、お前、この国に喧嘩でも売つたのか？」「はい？」

何を言つてるんだこの馬鹿、といつよつと見て見られるが、それは気にしないナイン。

だが、どうしてだるづ、既視感が……。

それを無視して、ナインは言つた。

「さつきの奴は、政府特務機関の一人、通称『生者の蹂躪』、N.O.
6だ」

「まいつたな、こりゃ」

そう言つて黒嶺学園から逃げるよつて走っていたのは、一人の男。ルーナを襲撃した男だつた？？男だ。

その服装は黒嶺学園の制服から白と黒を基調とした独特的のコートに変わつており、その髪の色も普通の黒から銀色へと変わつていた。

「なんであいつがいんだよ。冗談じゃねえ。相性が一番悪い奴じゃねえか」

そこそこ大きな独り言だつたが、幸い現在この学園には生徒はほとんどないなかつたため、それが聞かれる事は無かつた。

「確かにあいつが通つたことのある学校だが、過去の話だろ？　なんで今、よりによつて標的の護衛なんてやつてやがる」

男、N.O.・6、ムクロは大きな溜息を付いた。

「いや、いるならいるで良いんだけどよ。幸い、あいつがいるなら最悪の条件は守れるな。が、どうやって任務をこなす？　俺の依頼は『一重螺旋』の殺害だろ？　殺せつて、そりゃ厳しくね？」

難問とぶつかつたと頭を抱え込み、

「無理だわ～。俺の能力あいつには効きにく~し、あいつとは仲良くなしたいし～。でも任務断れないし～、どうすつかな～」

そんな事を言つてゐるムクロだつたが。

その顔には、獰猛な笑みが浮かべられていた。

「せ、政府特務機関！？ はあ？ なんであたしが国に狙われなきやいけないのよ！ と、いうか、なんでそんな奴を知つてるの！？」
「そりや、俺が前いた組織だし」

さらつととんでもない機密情報を漏らすナインだが、混乱しているルーナは気にも止めなかつた。

「政府特務機関つて、日本政府に狙われてるつてこと？」「冗談じゃないわ！ あたしが何をしたつて言うのよ！」
「だから言つただろ？ こ、うな、ら、い、よ、ひ、自分、が、誰、にな、ん、で、狙、わ、れ、て、る、か、調、べ、て、お、いた、方、が、良、い、つ、て」
「さつき言われたことでしょーが！ それまで気にもしてなかつたのよー？」
「あ、悪い」
「謝るくら、いなら、なんとかしてよー！」

かなり混乱してゐる、とナインは一ヤーヤ笑いながらルーナを見ていた。

他人の不幸は面白いのだろう。

それも、安心が保証された不幸なら、安心して面白がれる。

だから、

「なんとかするつて、言つたらどうする？」

「え？ な、何？ なんて言つた？」

ナインはニヤニヤ笑いながらルーナを見た。

ルーナは、その無責任にしか思えない台詞をもう一度尋ねる。

「だから、なんとか出来るかもしれない、と言つてる訳だ」

ナインはもう一度、笑みを消して至つて真面目な顔でそれを口にした。

対してルーナは、

「馬鹿じやないの？ あんた、自分が何言つてるのか解つてるの？ 国に喧嘩売るつて意味よ？ それも魔力技術大国日本に。あたしだつたら無理ね。この国のスキルは、魔法に匹敵するレベルの力を持つてるわ。いくらあんたが優秀な魔法使いでも、……無理よ」

ルーナは淡々と、真実を述べる。

魔法と呼ばれる力だつて、所詮力だ。限りはあるし、不可能だつてある。

これは、その不可能な話だ。

少なくとも、ただの魔法使いには、何も出来る事は無い話だ。けれど、

「いや、なんとかなるね。真つ正面から国に喧嘩売る訳じゃない。ただ、お前が狙われる理由が解れば、対処出来るさ」

自信満々にナインはそう言った。

勿論、その理由が解るまで襲われるのを知つていて尚、そう言った
ているのだった。

ただの駄目人間だと思つていたルーナは、思わず、ナインに聞い
てしまった。

「……王家の墓にかけるような魔法を使って、爆発でも無傷。それ
で政府の組織にいた？ あんた、一体何者よ？ 有名な魔法使い？」

それに對して、ナインは答えた。

「俺は魔法を使えるけど、魔法使いじゃないな」

ナインは、さらりと答えた。

「時給五百円、三食付きで雇われた、お前の護衛だ」

第三章 魔法使い・4（後書き）

一日に一回更新したいと思っています。
相変わらず改行が安定しません。

指摘・感想などお待ちしています。

「とりあえず、あいつはしばらく襲つてこないと思つ。これは、あいつの面倒くさがりの性格から言つてる事だから、あまりあてにならない情報だけどな。それと、あいつの能力は無差別極まり無い。だから、なるべく人のいない所にいたいんだが……」

「わかつた。とりあえず、明日は黒嶺学園で試合があるみたいだから、調べ物は今度にして、探し物の方に行こうかな。……で、どこに連れ込もうって言つの？」「ご・え・い・さ・ん？」

「…………俺はお前を襲つたりしないぞ？」

「…………あつそ。（それはあたしに魅力が無いって言つてんの？）

「

「なんか言つたか？」

「何も」

放課後。

という会話から解るように、本格的に護衛を任せられたナインは、最低でも寝ている時の絶対の安全を求め、とある場所にルーナを連れて行こうとしていた。

元々寮生活でなくマンションに一人暮らしのルーナは、実際に手早くそこを引き払つた。その手際は手慣れているとしか言いようの無い物だったのが、彼女のこれまでの暮らしを表していた。

夕暮れ時の街を歩くナインとルーナ。ルーナの服や私物などが入ったボストンバッグはナインが持つており、ルーナは小さなポーチだけを持っていた。

従者とお嬢様の関係に見えるが、本当は護衛と依頼人の関係の人。

ナインはビルの間の暗い路地へと脚を進める。何も解らない異国
の地であるため、ルーナはそれにすんなりと付いて行き、路地の奥
へと一人は進んで行く。

と。

「ここらでいいか」

「ん？」

不意にナインが立ち止まり、そしてルーナの手を握った。

「ちょっ、な、な、何？」

突然ナインに手を取られ狼狽するルーナ。

場所は路地の奥。人気は無い。

奇しくも、先ほど冗談で言つた事が脳裏で再生されるルーナ。

「あんまり暴れるなよ。失敗したらどうするつもりなんだ」

微かに頬を染め、ばたばた暴れだすルーナを押さえつけ、顔を近づけるナイン。

遠くから見れば、恋人同士の馴れ合いに見えなくもない状況、目
が回っているルーナ。

ナインは、その耳元で囁いた。

「（誰かにつけられているぞ）」

「つー？」

ピクッヒルーナの動きが止まり、先ほどまでのどこか抜けた表情

が一瞬で緊張したそれに変わる。体が硬くなり、自然とナインの手を強く握った。

それを見計らっていたナインは、人差し指を空へと向けた。

刹那、『転移魔法』により、一人の姿は消えた。

「なつ！」

路地の角から一人を尾行していた一人の人物が飛び出した。一人をこつそりと付けていた二人、愛葉とりオは、目の前で消えた一人に驚き呆然と立ち尽くしていたりするのは、また別の話。

「なつ、何？……」

ルーナの呟きは、常人のものだつた。

最も、魔法使いのルーナがそんな事を呟くのだから、普通の人なら驚きで何も言えなかつたかもしない。いや、逆に魔法使いだつたからここまで驚いたのかもしれないが。

ルーナの驚きは、『転移魔法』に対してだけ向けられた物ではない。

しかし、それに対して過剰に反応していた。

「て、『転移魔法』！？あの、一度行つた事がある場所なら一瞬で移動出来るつて魔法！？これさえあれば大抵の移動手段は根絶するわよ！？」

「魔法なんてそんな物だろ？ 魔法は使い方を間違えれば、それこそ世界を狂わせるからな」

「お、教えて！」

未だに握られていた手をブンブンと振り、目を輝かせてナインにせがむルーナ。

子供っぽく、可愛らしい仕草だった。一部の人間なりびこにやろめいてしまいそうだったが、

「断る」

手を振り払つてナインはそれを一刀両断した。実に可憐気の無い動作だった。

「うう、何でもするから～」

「おいおい、何言つてんだ。教えられるわけないだろ？ お前に教えたら、不法入国し放題になるだろ」

「じゃあっ！ 日本に永住するなら良いっ？」

なおも譲らないルーナ。新しい魔法を覚えたがるのは、天才魔法使いとしての性なのだろうか。

「却下。だいたい、これ、かなりリスク高いんだぞ？」

「……え？」

そんな話は聞いた事が無いルーナだったが、そもそもこの『転移魔法』 자체、ただでさえ認められていない魔法の中でも、存在すらも否定されている部類の魔法なのだ。

そんな話の一つや二つ、あっても不自然ではない。

そして、ナインは神妙にそれを語つた。

「建物の中を使えば、三途の川まで飛んでくぞ」

天井に頭をぶつけたナインの痛々しい体験談だった。

その後、しばし論戦が続いたが、その度にナインの痛い話が聞けるだけで、どうしても教えてくれないとルーナは諦めた。ナインが頑なに教えるのを拒んだのは、只単純に教えられないからだつたりするのだが。

「…………」

ルーナは改めて周囲を見渡した。

壁で囲まれた広大な敷地に、夕焼けを映す決して小さくはない池、周囲を囲むように生い茂った樹木。そして、それらの中央にそびえ立つ古めかしい三階建ての洋館。

ルーナ達が立っているのは、門からその洋館の玄関へと向かう道の上。

様々な形の大理石が敷き詰められて形成された道である。

「…………俺の今家の……かな？」

「…………」

呆れてルーナは物が言えなかつた。

「言つておくが、この洋館はかなり強力な結界内にある。さつきの『転移魔法』でしか出入り出来ないから、外に用があるなら俺に言わないと出れないぞ」

「確かに、解読不能なくらい魔法が掛けられてるわね」

モノクル

ルーナはポーチから取り出した片眼鏡モノクルで周囲を見回す。

ルーナの魔力に反応し、片眼鏡の前に魔法陣が構築されていた。

「こここの敷地をドームみたいに覆うように、何重にも魔法が掛けられている……。国会でも大統領官邸でもこんなに厳重な魔法かけられて無いわよ」

「そりや、そんな所より大事なもんが隠されてるからな」

とんでもない事を言つナインに、ルーナはもう溜息もつけなかつた。

片眼鏡をしまい、頃垂れるルーナ。

「……わかった。もうあんたがすごい奴だつて色々わかつた」

「いやいや、これは俺自身の所有物じゃないんだ。借りてるというか、いらないからやると言われたと言つか」

「誰よ、こんな核シェルター並の洋館を軽々しく扱う奴は」

人喰いジョーズの亡靈さ、と心の中で答えて、声には出さないナイン。

「ん~、出入りが『転移魔法』オンリーだから使い勝手悪いだろ?」

それはその通りかも、とルーナは納得する。

「おかげで中身はあんまり良くないんだが、安全性なら世界一かもしれないがな」

ナインは立ち話をしている間に置いたボストンバックを持ち上げ、玄関へと向かう。

洋館の玄関は、西開きのドア。呼び鈴の代わりにノックマークが一つついている。

「おっと、ちよっと止まって」

ナインは玄関の前に立ち止まり、ルーナを足止めした。

「ん、何？ これだけ安全性を見せられたら質は求めないけど。元々研究所とかに引きこもる人間だし」

「それは多いに助かるんだが、そういうじゃない」

ナインはドアを開け、ドアの向こうにボストンバックを置く。ルーナには偶々内部が見えなかつたが、それは呼び止めた事と関係なかつた。

「どうあえず、見せてもらうかな」

ナインの目つきが、まるで観察するようなものに代わり、ルーナをまじまじとみつめた。

「…………何？」

ナインの観察するような目に、全く恥じらいを見せないルーナ。こういった視線には慣れている、と言わんばかりだった。

「あー、気にしないでくれ」

と言つたが、観察するような目を止めないナイン。
『ステータスアイ』
『算出眼』で見てるのである。

(ネーム、ミラ・ルーナ。クラス・黒嶺学園の生徒、魔法使い。特性、魔法感覚？ 魔法に対しても敏感とか、魔法を覚えやすいとか、そんな感じか？ スキルは、無いのか。まあ、魔法使いだし。……ん？)

不意に、ナインの目の動きが止まった。
それがたまたまルーナの胸の位置だったのは、なんというか、両者に取つて不幸な話である。

「…………な、何よ」

「…………」

若干視線を泳がせるルーナ。凝視するナイン。
そして。

唐突にナインは手を伸ばした。

「…………」
「あやん…」

ルーナが無言で思い切りナインをビンタし、ナインはそれをモロに顔面で受け止めた。

「痛つて……」
「変態。向しようとしてるのよ、殺すわよ」

そういう割に、ルーナはキッと睨むだけで、あまり敏感に反応しないと言えた。

どこの、乙女の恥じらいを欠如しているような態度である。

「誤解だ！俺は決して如何わしい感情を抱いてない！」
「じゃあ何だつて言ひのよ」

そう言われたナインは、学習しなかつたのか、再びルーナの胸元へと手を伸ばす。

「…………」

と、しばしナインを見つめて、今度は何故か微かに頬を染め、そっぽを向くるルーナ。ルーナがもじもじしているのに、クエスチョンマークが湧いて出るナイン。

「とりあえず、じつとしててくれ」

ナインはルーナの胸の前で手を止め、そして。

ナインの手から白い光が溢れ出し、ルーナの体を包み込んだ。

「…………これは？」

その白い光はすぐに消え去り、ナインは手を下ろした。

「ん。これでいいや。悪かったな、不快な思いさせちまつたか？」
「別にもう気にしてないわよ。……ただ、さつきのは?」
「……まあなんと言つか、立ち話も何んだから入ろう」

はぐらかすように言つたナインに促され、ルーナはその洋館に脚を踏み入れた。

「おかえり、ナイン兄さん」「おかえりなさい、ナインさん」「ただいま。二人とも、留守番ありがとな」

ナインはそう言って、自分を出迎えてくれた少女と少年の頭を撫でた。二人はえへへと顔を見合わせて笑い、洋館の奥へと走つていった。

「家族？」

ナインの後ろから一人を見ていたルーナがそう尋ねた。

「いやいや、違う。居候というか、知り合いというか、友達というか……、仲間かな？」

「？」

よく分からぬといつたルーナにスリッパを用意するナイン。

「俺の知り合いが助けた子供、というのが一番的確だな。んで、お前の依頼を受けてから、念のために来てもらつたんだ」

「？」

複雑な顔をするルーナだが、元々あまり興味が無いのか、深く追求する事も無くスリッパに履き替えた。

「どうあれ、部屋に案内するか。無駄に広いから」

やう言つてナインは、田新しい物ばかりで色々と田移りしてくるルーナを客室へと案内した。

「掃除は一人に頼んでおいたから多分大丈夫だと思つたが、過度な期待はしないように」

「よほど酷くない限り文句は言わないわよ。研究熱心な魔法使いにはそれで十分」

生存フラグを立ててから部屋のドアを開けるナイン。

部屋は八畳一間で、絨毯が敷かれている。普通のベッドとタンスしかないものだが、ある意味建物の外見と一致していると言えた。一人もちゃんと掃除したのだろう。

「ふ～ん、まあ良いじゃない」

「そりや良かつた。じゃ、他也案内しよう」

荷物を部屋に置き、ナインは洋館内を適度に案内する。

洋館の床はタイルで、その上にカーペットが敷かれている。一階には客間、食堂と風呂（何故か温泉が出る）。二階は十部屋もの部屋があり、そのほとんどが寝室、そしてリビングだった。ナインの個室は、十一畳の広い部屋だったが、内装はルーナの部屋と変わらなかつた。リビングはテレビやらソファーなどがあり、ジュース類などが入つた冷蔵庫などもあつた。

そして、三階には？？。

「すつ」

田を輝かせるルーナがいた。

そこは、黒嶺学園の図書館と比べれば狭いが、所狭しと本棚がある部屋、図書室だった。

「あ～、とりあえず！」明日にでも見てくれ。多分、色々と聞きたい事があるだろ？」

なんとか誤魔化そうとするナインだが、それは少し遅い忠告だった。

「嘘！？」これって……魔導書？」

部屋のドアを開けてすぐ、手近な所にあった本を取り、驚くルーナ。

せめて、部屋に何があるのか説明するだけにして開けなければ良かったと、ナインは後悔した。

「何これ！ どうなつてんの！？」

「あ～、だから明日こじみうな。説明も明日」

ナインは田を輝かせているルーナの襟首を掴み、引きずるよいつ図書室から連れ出した。

「ナイン兄さんー！ 『ご飯？！』

「ああ、今行くー！」

タイミングよく少年の声がかかり、ナインは不貞腐れるルーナを引きずつて食堂へと向かった。

「……ラギ、ナギ！ それは大事な物なの！」

「…………」

食事時にルーナと二人、ラギとナギは打ち解けていた。

十五歳のルーナに、十一歳のラギとナギ。はたから見れば姉と弟と妹、といったように見える微笑ましい光景だつた。

「つ、疲れた。魔法使いに体力は無いのに……」

「その割に随分と楽しそうに見えたけど？」

風呂上がりにリビングに来たルーナに、冷蔵庫からジュースを取り出して渡すナイン。ちなみに、そのジュースや夕食の食材は全てラギとナギが今日買つて来たもので、ナインだけがいる時は、当然のように空っぽになつている。

ナインと違い、ラギとナギの方がお金持ちだつたりする。

「…………まあ、ね」

少しだけ恥ずかしそうにルーナは頷いた。

湯上がりのためなのか、その頬も上気している。

ルーナの格好は淡い桃色のパジャマ。濡れた短めの髪をタオルでごじごじ擦つっていた。

この洋館にドライヤーなんてものはあるはずも無いのだった。

そもそも、あまり身だしなみに気をつけていないルーナには無用の長物かもしけなかつた。

「あたしは一人っ子で、魔法使いだったから。……あんまり人と付き合う事なんてなかつた。だから、こういうのは新鮮で、……楽しい」

「そりや良かつた。あいつ等も友達とかいないから、仲良くしてやつてくれる助かる」

「……まあ、研究の邪魔にならない程度には、ね」

「ん。ありがとな」

大きな欠伸をして、目を擦りルーナは立ち上がった。

「じゃ、あたし寝る

「おやすみ」

そしルーナは部屋に戻り、ベッドに入った。

「…………あれ？ なんか色々忘れてる気が…………」

しかし、睡魔に耐えきれずルーナはすぐに眠りに落ちてしまった。不思議な事に、ここ最近寝苦しかつた彼女にしてはあつさりと眠る事が出来たとか。

「……全く、これは厄介な事件だな。ナンバーズが動く理由が解らない。一度あいつとやり合わなきゃ駄目か。そうなると、一人にはルーナの護衛を頼みたいんだが、いいか？」

「任せてよ、ナイン兄さん。ナギと一緒になら、僕らに敵う奴はない
ないから」「ラギ、油断大敵。ルーナお姉ちゃんを守るんだから」

ナインは目を擦りながらも、しつかりと護衛を引き受けてくれた
二人の頭を撫で、もう遅いから寝るように告げる。

「じゃあ、おやすみ」「おやすみなさい」「おやすみ」「おやすみなさい」

そう言つて一人がリビングから出て行くを見届けてから、ナイ
ンは呟いた。

「国に仇成す者を殲滅する、国のために犠牲者？？それがナンバー
ズの存在。……ならば俺は、誰も犠牲にならないように戦うだけだ」

第三章 魔法使い・5（後書き）

この物語の核となる言葉が出ている章だつたりします。

アドバイス・感想お待ちしております。

「ンン。

「おーい、ルーナ。起きてるか？」

朝は七時、ナインはルーナのいる密室のドアをノックした。
一階ではラギとナギが朝食を作つており、そろそろ出来そうな頃
合いだつた。

「ルーナ？」

「…………」

もう一度ノックしてみるが、返事は無い。

一瞬、最悪の展開が脳裏を過り、ナインはドアを開けた。

「ルーナ！？ 大丈？？」

「…………」

ナインの目に、ちょうど着替えているルーナの姿がぱちり映つ
た。

ちょうど下着に手をかけた所で、ルーナの白い肌と下着のコント
ラストが艶かしい雰囲気を出していた。

二人の間に氣まずい空気が流れ、嫌な沈黙が漂つっていた。

「…………」

そして

ルーナは下着を下ろそうとした。

「いのないう事へこむる。」

そう言つてナインはドアを叩き付けるように開めた。

- 7 -

対して、ルーナは無表情で着替えを続けるのだった。
どうやる、寝起きは非常に弱いっしー！

「説明すると、『』は曰く付きの本？？魔導書だな、それを集めた

場所だ」

「ムサシ」

「……で、魔法がまだ認められてない、というか、魔法と呼ばれる力を使えるのがまだ魔法使いだけの現在、悪い魔法使いに力を与えないために、こうやつて隠してる訳だ」

たしにも出来るかも

「…………ああ～、もしもしルーナさん。俺の話聞いてます?」

「うん、聞いてる聞いてる」

もう説明止めようかなと思つナインの前に、齧り付くよつに魔導書を読んでいるルーナがいた。

場所は、三階にある図書室。辺りは何百冊の魔導書で埋められており、そのほとんどが夜に出回つていない物ばかりだった。

研究者魂が燃え上がるシチュエーションだった。

「…………というのは俺の推測であつて、眞実は知らないんだけどな。借り物だから」

「セレはまちやんと知つておくべきでしょ！」

どうでもいい事にだけ相槌を打つルーナだった。ついでのようになインの頭を叩いている。

叩かれた頭を擦りながらナインは話を続ける。

「それと、お前が狙われる理由は解らないけど、ここなら多分安全だと言つておこう。その間に、その理由とかを調べなきゃ駄目だな」「ううね～、うわっ！ 意外と簡単に出来たー。さやつほーー」

そんな会話の最中に、さつそく『異次元魔法』を習得しているルーナ。

さすがは天才魔法使いだらつ。

しかしどこか、自分の身の安全は放つておいでいるように見えた。安心している、もしくは信頼していると言えるのかもしれないが。

「なんか今のお前見てると、この一ヶ月ずっとここにいたやつだな……」

「居ても良じのー？」

「居たいのかよ……。探し物はどうした、探し物

「あつ、そつか」

「……忘れたのかよ。自分の事だろ」

思い出したと言わんばかりに手を打つルーナに、ナインは呆れて溜息を吐いた。

「とりあえず、一度愛葉達に連絡取らないと駄目だから学校行って、そのついでに買い物に行こう」

「……買い物？ 探し物って、買い物なのか？」

ナインが首を傾げ、ルーナは首を振った。

「違う違う。探し物はちょっと旅行しなきゃ駄目だから、買ひ出しちうやう、家に引きこもっているだけでは駄目じゃしかった。

ナインは、若干嫌な予感がした。

研究所内部は慌ただしくしていた。

「どうした」

白衣を着た恰幅のいい男が、プリントを読んでいる白衣の女性に尋ねた。

女性は俯き、重い口を開いた。

「……ナンバー3、5、8の死亡報告書が届きました」

男は拳を叩き付け、苦虫を噛み締めたように言った。

「くそつ！ これで全滅か。どうなっている、我々の計画は完全だつたはずだ！」

「主任、落ち着いてください。まだナンバー9が残っています」

主任と呼ばれた男は、静まるように言った女性に怒鳴った。

「だが、奴の信号も昨日消えただろう？」

「ですから、落ち着いてください。ナンバー9だけは、死亡報告書が届いていません。恐らく、まだ生きているんですよ」

途端、男は落ち書きを取り戻し、静かな口調で言った。

「……そうか。ならば、我々が直々に出向き、ナンバー9だけはなんとしても回収する」

「はい。すぐに部下に準備するように言つておきます」

成果があがらなかつた研究は取りつぶされてしまう。

九人の実験体の内、現在生き残っているのはたつたの一人。それも信号が途絶している。

男が荒れるのも頷ける、と女性は思った。

「……いや、君は残れ」

「主任？」

不意に、主任はそんな事を言った。

「どうにも嫌な予感がする。まるで誘われているような、誘き寄せられているような、そんな気がする」

フラグだった。

「気のせいでしょう。我々の生み出した『一重螺旋』はスキルでないでの、バレる事はありません。たまたまでしょう」

「……そうだと良いのだが、あまりにも出来過ぎではないか？」

「それば、腹をくくるだけででしょう。どちらに進んでも同じでしょう」

「うう

「そうだな

「お気をつけて、主任」

主任は気付かない。

女性が、自らが生み出した『一重螺旋』に絶対の自信を持つている事に。

そして、『一重螺旋』の存在が絶対にバレる事は無いと確信していた事に。

理論だけは完璧な根拠に、何の疑いも抱かず。

現実の結果は失敗だらけだというのに。

このとき、もしも主任がその事に気がつければ。
あるいは、この実験場所にそこを選ばなければ。

物語の結末は、大きく変わっただろう。

「んで、あんたのその格好は何?」「

「だから、変装。今日は黒嶺学園で試合あるだろ? そこで会長の朝井に会つてことは、もしかすると、もしかするかも知れないからな」「?

怪訝そうに顔を傾げるルーナは、黒嶺学園の制服にポーチといつた装い。対してナインは、同じく黒嶺学園の学ランにサングラス。

「買い物つて、俺は従者じやないんだから並んでにするなよ?」

「大丈夫。試してみたい事があるから」

何やら意味ありげな笑みを浮かべるルーナに、何とも言えない曖昧な顔をするナイン。

ラギとナギは今日もお留守番。

無駄に恭しくルーナの手を取り、ナインは『転移魔法』を使った。

「やうひ言えば、ラギとナギはどうやって外に出るの?..」

『転移魔法』で黒嶺学園から五百メートル程の所にある公園の木陰に移動した後、ルーナは疑問に思った。

「ん? ああ、あいつらなり『転移魔法』を使わなくとも自由に出入り出来るから問題ない」

「いや、そっちの方が問題あるつて。あの結界、少なくともあたしには手が出せないわ」

相変わらずナインはとんでもない事をさらつと言つていた。

聞き手としては驚くべき部分なのだろうが、この一日で慣れてし

まっているルーナは、呆れたように呟つだけだつた。

「やうだらうな。俺も『転移魔法』以外では出入り出来ないし。だからこそ、ああ言つた仮説が立てられる訳だ」

魔導書を厳重に秘匿し、悪い魔法使いに力を与えない。

大統領官邸や国会など比でもない、もしかすると地球上で最も堅牢な建物かもしない洋館なのだから、そのような仮説が立てられても不思議ではなかつた。

「……その仮説についてなんだけど、あたしに魔導書読ませりやつていいの？」

「問題ないな。もし悪事に使うなら、その時は俺がケジメをつけるだけだから」

本当になんの躊躇も無く、こついう事をいつ男だつた。

当然、それが気に障るのも頷ける事で。

「……ふうん。あんた、この天才魔法少女ルーナ様に勝てると思つてるの？」

自分で天才魔法少女などと言つルーナ。高いプライドをお持ちのようだ。
しかし。

「勝てるな。少なくとも、あそこにある魔導書を全部読んだ程度では、俺に勝てないな。だから読んでも文句は言わない。ただし持ち出しが禁止するが」

それを一刀両断するナインも、結構プライドがあるのかもしれない

かつた。

いや、生きるためにほ土下座をしかねない男に、そんな事は無いだろう。

だとすれば、それはただの現実なのだろうか。

「……へえ。そつもつて言わるとちょっとショックかな」

「安心しろよ。見榮張つただけだからな」

頃垂れたルーナに、ナインはニッと笑みを浮かべて付け足した。

「護衛の俺がお前より弱いと、俺の立場がないんでな

第三章 魔法使い・6（後書き）

ストーリーが進むのは少し遅いかもしません。
理由は、この章はやううと思えば、一話で終わってしまう……げふん
げふん。

はい、ストーリー展開の遅い章です。

感想・指摘お待ちしています。

第三章 魔法使い・7

「……で、やっぱり中入らないと駄目か?」「

「何言つてんの。あんたは、『ご・え・い』でしょ」

「……はあ」

頭を垂れるナインを小突き、ルーナ達は黒嶺学園の門を潜った。時刻は九時。

学園内は試合も近づいており、生徒が慌ただしく動き回っていた。

「右見て左見て……いないか。よし!」

何かに怯えるナインは、悪田立ちするサングラスの下でしきりに目を動かす。

「……あんたがそこまで怯えるって、一体何者よ」「いやいや、強さじやないんだ。ただ、相性の話だ。苦手なんだよ」

そう言いながらさりげなくルーナの後ろに隠れるナイン。どこからどう見ても、護衛しているようには見えなかつた。

「えつと、とりあえずしばらくここに来る必要は無いから……手続きに生徒会室かな」

ルーナは後ろのナインを気にせず進んで行く。ナインはナインでそれと気付かないように、存在を極限に消して付いて行つた。

「……えつー? これから一週間探し物を探しに行く?」

「そっ。だから、特別欠席扱いしてくれない?」

「…………」

「別にここに居てもやる事無いし、昨日の事件でどこにいても襲われるつて解ったんだからさ。それに、愛葉の言った通り優秀な護衛が付いてるし」

「…………わかったわ」

愛葉はしぶしぶ頷き、何故かギスギスした視線を投げ掛けられるナイン。

場所は生徒会室。

試合の準備のため慌ただしく動く愛葉とリオがそこにはいた。

「…………昨日は大変だつたんじゃない?」

「ん? そうでもなかつたけど。少なくとも、お前に追つかれられてた時の方が大変だつた」

意味ありげな質問を投げかける愛葉。しかしナインは気付かない。

「へえ……、そなんだ。で、昨日一人はどこに行つたのかしら?」

「え?」「はい?」

何のことか解らないと言う感じに一人は顔を見合させる。

二人は、昨日尾行していた人物が愛葉達だと知らなかつたのだ。

「どいつも言わせて」

「図書館に居たけど」

「…………」

一人の中が微妙に良くなつていて、事に何故かイラライラしてしまう

愛葉。

そつとは知らず、ルーナは爆弾を投下した。

「あつ、こいつの家に行つた」

「はあー？」

愛葉がポカンと口を開け、ルーナは首を傾げ、ナインは背後に殺氣を感じていた。

「……貴様、何をやつてゐる？」

ナインの背後に居たりオが、ポンと肩を叩いた。

「別に俺はナニモシテイナイヨ?」

では何故片言になる、などとは誰も言わなかつた。
ナインの頭の中では、今朝のルーナの着替えのシーンが再生されてゐた。

愛葉トリオの頭の中では、何やらあらぬ妄想が渦巻いていた。
ルーナはさつさと魔導書を読み漁りたいと思つていた。

「一回人生やり直してこいつ！」

ナインは『RPG』を発動する暇も無く、生徒会室から吹っ飛ばされる。

吹っ飛ばされたナインに駆け寄るルーナの行為が、火に油を注いだのは別の話。

(こいつがいなきゃあの洋館に入れない！)

という打算塗れの行動だったのが、ナインに取つて不幸な話だつ

た。

「いって。スキルの切れが無駄に良かつたな
「それで護衛が務まるの？」

校舎から出て、グラウンドの横を通り門へ向かう一人。グラウンドでは試合の準備だろう、七メートル程の柱が立てられていた。結界を張るための柱だ。

廊下に後頭部を叩き付けられたナインは、痛そうに頭を擦つっていた。

それを呆れた表情で見るルーナ。自分が事の原因だと氣付いていなかつた。

「あ～、なんだ。無駄にHPは消費したくなかったんだな」
「HP？」

首を傾げるルーナに、説明する気はないと言わんばかりにナインは先を歩く。
一刻も早くここを出てしまいたいナイン。心底会いたくない人物が居るようだ。

が、それを妨げるようにな。

「危ない！」

グラウンドの方から叫び声が聞こえた。

「あ？」 「ん？」

一人がそちらを見ると、

直径三メートル程の火球が二人に迫っていた。
その距離、十メートル弱。

「あ〜、何コレ？ デモンストレーション？ デーモンストリート
の間違いじゃね？」

「どうでもいいから。護衛、仕事しなさい」

ルーナに背中を押され、ナインはその火球とルーナの間に立つた。火球は大きさが大きさなため、ゆつたりと近づいて来ているよう見える。しかし、それは逆に言えば、当たればただでは済まないと聞いたげだつた。そして、火球の周囲が歪んで見える事から、その攻撃範囲の広さを物語つていた。

「あ〜、跳ね返したら駄目だよな」

一瞬、『魔法反射壁』を発動して事なきを得ようとしたが、それだとこの火球を放った人物にコレが跳ね返ると気付き、ナインは別の魔法を発動した。そしてナインは火球に向けて手を伸ばす。

ナインに火球の攻撃範囲が被つた瞬間、火球は霧散するように跡形も無く消滅した。

『魔力無効化魔法』

魔力による攻撃を一度だけ無効化する魔法。その攻撃が大きかろうが小さかろうが、一度で消えてしまう欠点を持つ。何でも打ち消

す、そのために消費MPが馬鹿にならない。普通の補助魔法三回分のMPを消費してしまうのだ。他人を気遣うナインだから必要な魔法で、『魔法反射壁』を覚えていれば無用の長物だろう。

ナインは火球が完全に消えたのを確認して、ルーナの元へ戻つて来た。

当然、火傷一つない。

「さ、目立たない内に出るぞ」

「……十分目立っちゃってるけど？」

ルーナの言葉に嘘は無く、グラウンドでは歎声が起こっていた。ただの事故だったのだが、これで本当にデモンストレーションになってしまった訳だ。

「あ～、まずいな。嫌な予感がする。……悪いなルーナ」

と、ナインは唐突にルーナの手を掴み、次の瞬間には『瞬間移動魔法』で飛んでいた。

歎声に沸いていたグラウンドが、一瞬で沈黙に包まれた。しかし次の瞬間には、再びざわめきが起こった。

「さっきのあいつは誰だ？」『黒嶺学園の制服を着てたが、あんなのが黒嶺学園に居るのか！？』「あれ？ でも消えちゃつたってことは、……どういう事？」等々、色々と話は盛り上がつていった。

ナインに取つて不幸な話だが、この話が黒嶺学園中に広がり、会いたくなかった人物の耳にもしつかりと入つてしまつたのは、仕方が無い話だった。

「……うつわ

ルーナとの買い物に付き合わされたナインの咳きだつた。
一人が買い物に来たのは、デパート。
先ほどからルーナは怖くなるくらいに買い物をし続けている。

保存食と呼ばれる食料品、全く統一性のないお菓子の数々、ミネラルウォーターを大量に購入。それに登山用のリュック、スケッチブック、包帯から傷薬、電池と懐中電灯などなど。

「……山登りでもするか?
するかもね」

その大量の荷物を持ったナインは、呆れたように咳き、何故か家具売り場の方へと進んで行くルーナ。
そして。

「えつと、アレを二つとコレ、それにコレも買おう」

「……」

ルーナが店員に頼んだのは、天蓋付きのベッド二点、種類の違う柔らかそうな毛布を一つ。

店員は恭しく礼をし、会計と商品の在庫を確かめるために飛んで行つた。

「おいルーナ、どうやって持つて帰る気だよ? さすがに俺にもコ

レは無理だけど

「だから、試したい事があるって言つたでしょ？」

店員が戻つて来て、交渉して、クッショーンを一つプラスして買うこと、五万円弱安くしてもらつルーナ。そしてポンと現金でそれらを購入するその様は、ナインには恐ろしいものだった。

「では、いらっしゃじこに？」

若干涙目になりながら、ベッドなどを運んで来た店員。普通なら送り届ける所だが、何故かルーナはここに運ぶよつて言ったのだった。

ルーナは、それらを囲むよつて魔法陣を展開、そして。

魔法陣から黒い光が溢れ出し、買つた品を飲み込んだ。魔法陣が消滅し、無駄にスペースの空いたベッド売り場になつていた。

『異次元魔法』

異次元を作り出す魔法。時間と奥行き、広さなどが自由な空間を生み出す魔法だらう。RPGなどにある、やたらと物が入る道具袋の正体。

「よし、成功成功。それじゃ護衛、帰る

「……了解」

呆然とした店員を残し、颯爽と去つて行く一人。

後に、この買い物がデパートの伝説として語り継がれる事を、二人は知らなかつた。

匂をちょっと過ぎた頃に洋館に戻った一人をラギとナギが出迎え、少し遅めの毎食を取り、ルーナは図書室に籠り本を読みふけり、ラギとナギは買い物に出かけて行つた。

ナインも図書室に同席してはいたが、何か深く考えていた。

（魔法使いが狙われる理由は多々あるが、この国がルーナを殺そうとしている理由は、魔法使いだからなどでは無いだろうな。となると？？）

「ルーナ。ちょっと良いか？」

「なに？」

本から田を逸らさずに返事をするルーナに、危機感無いなと思つナイン。

「お前さ、最近体調が悪かったとかあるか？」

「……んん、そういうのは無いけど？ どうして？」

「……なら良いんだけど」

当てが外れたな、とナインは思い、再び考えよつとして。

「ちょっとこれ見て！」

不意にルーナがナインの背後に現れ、肩越しに地図を見せて來た。

当然、ルーナの体が密着して、顔が近くにあり、若干ナインは焦つていたが、ルーナは気付かず嬉々として語る。

「探し物見つかった！」

「……はい？」

ルーナが持っていた地図に記されている場所は、どこかの山奥。その山奥の洞窟マークの所に、星印。そして、下に注釈として書かれている文字は。

魔石。

「あー、探し物って、魔石？」

「そう！ はるばる日本まで来た甲斐があつたあ！ ！」

「その前にお前、自分が狙われてるつてことに気付こひ。これ、どうみても山だろ。遭難に見せかけて殺されても文句言えないぞ」「あなたが守ってくれるんでしょ？」

「……」

何も言ひ返せないナインだった。

第三章 魔法使い・7（後書き）

ストーリーの進み方が遅いのは、第四章以降が一気にシリアスになる予定のためです。

感想お待ちしています。

「ンンン。

「お~い、ルーナ？ 起きてるか？」

「…………」

昨日と同様、なかなか起きてこないルーナを起こしに来たナイン。昨日と同様、返事は返つてこなかつた。

「…………。開けるぞ」

「…………」

少し躊躇したがドアを少しだけ開け、ナインは中を覗き込んだ。そして。

天蓋付きのベッドの上で、ふかふかの毛布に包まれて寝ているルーナを見つけた。

なんというか、リスみみたいだった。

「……文句は言わないけど、不満はあったのか
「すーすー」

可愛らしい寝顔のルーナを起こすのは、かなり気が引けるナインだった。

しかし、今日は魔石探しをする予定。

本当にあるのかどうかはさておき、とりあえず山登りの日なのだ。

起^レせとは言われていなが、しかし起^レせなれば怒^{ハラ}られる氣もするナインだった。

「……えーと、起きるよルーナ

「ん……」

ルーナを揺らすナインだが、ナインはその時氣付かなかつた。

目を擦りながら起きたルーナ。そしてナインは見てしまつた。
毛布がずり落ち、やつぱり下着姿のルーナが眠そつに目を擦つていた。

ルーナの艶かしい白い肌が露になつてゐる。恥じらいも無く隠す氣も無く、少女の肢体がありのまま、そこにほあつた。

ベッドに両膝をついて眠そうに目を擦つてゐる、下着姿の少女。ナインの何かがどうにかなつてしまいそうな、扇情的な光景だつた。

「…………」

そして寝ぼけたまま脱ぎだそつとするルーナ。

「つーー！」

ナインは逃げ出すよひに部屋を飛び出した。

ルーナに取つて幸か不幸か、彼女は寝起きの記憶が無くなる程、寝起きに弱かつた。

「くつそ、だから言つたんだよ！ 山なんて襲撃者に取つちや格好の場だろ？！」

「しょうがないでしょ！ なんであたしが襲撃者相手に遠慮しなきゃいけないのよ！」

一人は山の中を走っていた。

背後からは複数、それも何十人もの足音が聞こえていた。時たま、雷撃が飛んで来ていた。

「あ～、これって捕獲しに来ましたよ～って感じだな。殺傷能力が無いし。これ、まるつきり別の組織に狙われてんじゃん。……ルーナ、お前何したよ？」

「知らないわよ。……でも、あれはこの国的能力者じゃないわね」「ま、そつだろ？ な。単純な雷撃飛ばすなんて、この国じゅあり得ないな」

飛んでくる雷撃を『魔法反射壁』で返しながら、ナイン達は道なき道を駆け抜ける。

魔力を放つた者から、自分の放つた攻撃で脱落していく。
だが、元々殺傷能力の無い攻撃のため、減ったと思えばまた戻つて来るのだ。

「どうする？ とりあえず、魔力放つ奴には制裁加えているけど

「無視無視！ さっさと洞窟入つて立て籠る！」

すんすんと進んで行くルーナを見て、本当にこいつは体力無いの

か？　とナインは思つてしまつた。これも研究者魂のおかげなのだろうつか？

「あつた！　多分アレ！」
「……本当かよ」

不意に視界が開け、目の前に洞窟が見えた。どうにも人工的に造られた感じのする洞窟だった。

「んじや、襲撃者さんにはいいで待つてもらいますか！」

洞窟に駆け込むルーナ。ナインもそれに続き、振り返り様に魔法を発動。

途端、洞窟の入り口を黄色の魔法陣が覆い尽くした。

『呪縛魔法』

その魔法陣内の物体は移動が出来なくなる魔法。ただし、魔法や攻撃（銃撃、投擲など）は出来る欠点あり。効果時間も短く、単なる足止め魔法だ。しかしナインは、それを何十も重ね、最低でも洞窟内に入るには三十分以上は有するようにしていったが。

勿論、それでMPは酷い事になつていたが。

魔法と攻撃が通らないように、さうにナインは『魔法反射壁』と『磁力魔法』を放ち、襲撃者の銃器の攻撃を引き寄せ無効化させた。これにより、襲撃者達は最低でも三十分は何も出来なくなる。代わりに、ナインのMPはゼロになつたが。

「あ～、名水名水つと」

ナインは一段落付いたとの事で、ミネラルウォーターを飲む。 5
00m1の内200m1程飲む。

MPが100回復した。

名水さえあれば、MPも以外と簡単に回復する物だった。

「 もりひづわよ」

と、そこで水を奪われ、残りを全部飲み干すルーナ。
躊躇無く水を飲むルーナは、汗だくである。
ルーナの頬を零が伝い、それをナインは拭つてやる。
少し照れくさそうに（それでも頬を染めたりはしない）、でも嫌
がる素振りを見せないルーナ。

「つ、疲れた～」

「お疲れさん」

「……なんであんたは涼しそうな顔してんの」

「生憎、俺は疲れ知らずなんでな」

ルーナの言つた通り、ナインは汗一つかいていない。疲労も見ら
れない。

これも『RPG』の補助効果の一つで、肉体的疲労を感じないと
いう、これまた便利な機能である。

「さて、三十分は奴らは動けないからな、その間に魔石探しといき
ますか

「……なんでそんなに元気なのよ」

『RPG』のスキルを知らないルーナには、ナインが恨めしく見
えてならなかつた。

「『呪縛魔法』だと…？ おまけに『魔法反射壁』……。やむを得ん、ここで待ち伏せするわ」

主任と呼ばれた男はそう言い、部隊に休憩をするように呼びかけた。

主任は『一重螺旋』の残された実験体、ナンバー9の回収に部隊を引き連れて来ていた。

捕獲を取り扱うエキスパート集団だったのだが、まさかこんな事になるとは思つても見なかつた。

脱落者こそ出していないが、それでも何名かが負傷していた。三十分間は動けないが、逆に言えば三十分は休めるのだ。

「よ～。随分と勝手にやつてんな、『一重螺旋』の開発者さん

「…？」

しかしそれは、一人の少年の声によつて妨げられた。

少年は白と黒の「アート」に銀髪と言つ姿で、気配を感じさせる事無く突然上空から現れた。

少年、ムクロはへらへらと笑みを浮かべ、主任に笑いかける。

「まさかこんなに簡単に誘き寄せられるとは思つてなかつたぜ？」

「お前……何者だ？」

「ん？ 知りたい？ そつだな～、今は、そつだな」

ムクロは少し考へ、そうしていゝ間に周りを主任達が取り囲み、銃器を構えた。

そして、ポンと手を打ち、ムクロは笑つて答えた。

「お前達の死神、つて所か？」

「？？？撃て！」

ムクロがそう言い終わるか終わらないか、主任は部隊に発砲許可を出した。

銃声が山に木霊した。

「今、銃声がしなかつたか？」

「へ？ そんなのあいつらが無駄に発砲してゐんじやないの？」

「……………そだな」

『照明魔法』で洞窟内を照らしながら、二人は進んでいた。

地図には洞窟の場所しか記されておらず、洞窟内部は手探りの状態だった。しかし、曲がり角こそあれど、分かれ道と言う物がほとんどない洞窟で、二人は特に迷う事無く前へ進んでいた。
滴り落ちてくる水滴が洞窟内に響き渡る。

「ルーナ、そう言えばなんで魔石なんて探してたんだ？お前は魔法使いだろ。いや、そもそも魔法使いとそれ以外、俺はスキル保持者って呼んでるけど、何が違うんだ？」

「そりや、魔力を生身で扱えるか扱えないかでしょ？」

「だけど、スキルは魔力を扱うだろ？」

「魔法使いは体内の魔力？？魔法力と、空気中の魔力？？マナを扱えて、スキル保持者はマナしか扱えないの」

体内の魔力と空気中の魔力。それを魔法使いの間では、魔法力とマナと呼ぶ。

スキルはマナだけを消費するため、どれだけ使おうと使えなくなる事は無い。そのかわり、魔力の質が魔法と比べて低く、魔法の炎とスキルの炎では、魔法の炎の方が強い。

逆に魔法は魔法力だけ、もしくは魔法力とマナの両方を消費し、魔法力が切れれば使えなくなってしまう。その分、体内で練成された魔力であるため、少ない量で大きな力を生み出す。

「……それなら、もしかして魔石って」

「本来なら魔法使いにしか扱えない魔法力を、誰でも扱えるようにしてくれる物ね。……あたしは、それで魔法使いとそれ以外、なんて境界線を取り扱いたいの」

「……人類皆平等、つてか？」

「バカにしてない？」

ジト目で睨むルーナに、ナインは曖昧な笑みを浮かべる。

「いや、驚いてるんだ。お前は……優しいな

「なになに？ 惣れちゃったのかな？」

「そんなんじゃないさ。ただ、困った事が有れば言ってくれよ。俺で良ければ尽力しよう」

「…………」

と、何故かルーナは黙つてまじまじとナインを見つめる。

「何だよ、珍獣を見るような目をして」

「…………やつぱり、あんたは面白い。あんた護衛に選んで正解だったかな」

「だろうな。そういうなきゃ、魔導書も読めず、魔石も見つけられなかつただろ?」

「そうだけど……それって、あんたの功績、じゃないでしょ」

「…………」

「やつ言えばや、お前つてやけに日本語つまくないか? 片言なんて全然喋らないし」

何となく思つた、と黙つよりも無言で歩くのが嫌なナインはルーナに尋ねる。

実際、その疑問はだいぶ前から思つていた物だった。

「日本人のハーフだからね」

「なるほど。どうりで日本語がうまく、日本人よりの顔立ちの訳か。スタイルの方は、まあ残念だつたな」

「思つた事が声に出てるわよ?」

ゲシッと蹴りを入れられ、ナインは痛そうにかがみ込んだ。

そして。

「ん? ルーナ、これつてもしかして……」「え?」

一人はそれを目にした。

主任の視界は朱に染まっていた。

一瞬だつた。

発砲して、発砲した部下は、それで全員事切れた。

発砲、爆ぜる頭、倒れる体。

発砲しなかつた部下も、ムクロに切り掛かり、そして？？爆ぜた。何が起こつたのか、主任には説明が出来なかつた。

ただ、圧倒的な暴力で叩きのめされた事しか理解出来なかつた。主任は、立つてゐる事も出来ず崩れ落ちた。

「何だよ、もう終わりか？　おいおい、『二重螺旋』なんて大層な物発明しといてこの程度かよ？」

「……お前、なぜそれを」

「ああそつか、知らないと思つてたのか？」

ムクロはニヤニヤと笑みを浮かべ、主任の顔を持ち上げる。憎々しげに睨んでくる主任を、嘲笑うムクロ。

「スキルではなく、特性でもない。そして、実験体は気付かない。『二重螺旋』はそういう物だろ？　實に巧妙だ。多分、実験にこの国を選ばなければ成功しただらうな」

「……何？」

「相手が悪かつたな。せいぜいあの世で後悔しな」

ムクロの能力が、主任を爆発させた。

辺りは血溜まり。骨肉が入り交じつた、不快な光景が広がっている。

そこには、人と呼べる物は何一つ無い。

N.O.・6、ムクロ。

その能力は、二メートル以内の物体の力を自在に操る事。銃弾は、その力の向きを変えられ、撃った者の頭を撃ち抜く。彼の能力範囲内に入つた人間は、圧力、大気圧をゼロにされ爆ぜてしまう。

そうして生まれる惨状が、彼を『生者の蹂躪』と呼ぶ原因となつてゐる。

ペラリと舌なめずりをし、ムクロは笑う。

「さて、N.O.・ナイン。あとはお前だけだ」

「魔石……こんなに採れて良いの？」

「良いんじゃね？ 別に無くなるような物でもなかつたし」

魔石は、洞窟そのものだつた。

二人は落ちていた小石を拾い集め、呪縛魔法の切れる三十分にならうとしていたので、とりあえず帰る事にした。

一度来たのだから、『瞬間移動魔法』を使えばいつでも来れるのだ。

「でも、なんか……拍子抜け」

「何言つてんだ？ 洞窟から出たら、また襲われ？？」

ナインは口を噤み、ルーナの前に立った。
それにルーナは首を傾げるが、前に立つナインがいつもと違うよう
に見え、異常事態だと判断した。

「……ルーナ。目、閉じてくれないか？」
「襲わないのなら、別に良いけど」
「襲わないから」
「あつそつ」

言葉だけの約束で簡単に目を閉じてしまうルーナに、一体俺はいつこんなに信頼されたのだろう、とナインは思つた。
悪戯したくなつたが、しかし今はそんな状況ではない。

洞窟から、それは見えた。

『次はお前だ、N.O.・ナイン！』

それは、人の血肉で描かれた文字。

人の命を弄んだような、一つの作品。

『生者の蹂躪』とは言えず、『死者の冒瀧』とも言えず、それは
さながら。

ただの忠告としか言えなかつた。

第三章 魔法使い・∞（後書き）

やつぱりスランプ気味。

なんとなく、設定とか気にせず書いて書ける作品をもつて一作書きたくな
つてくる。

これ以上増やしてどうすんだか……。

感想お待ちしております。

「嘘つー?」

「……まあ、そうだよな」

夕食後。

ルーナは頭を抱え込み、ナインは苦笑いを浮かべた。場所は洋館内の図書室。二人の前にあるのは、魔石。正確には、魔石と呼ばれていたもの。それは過去のお話。つまり……。

「なんでただの石にいろになってるのー?」

「要するに、場所だつた訳だな……」

どうやらあの洞窟だったから、魔石になっていたようである。一人が洋館に持ち帰った石は、残念ながらただの石にいろに変わってしまっていた。

「あ? もうー 無駄足だつた!」

「だよな。まあ、世界に出回らない理由はこれだろ」

「うつ……」

「よしよし」

脚を抱え込んで頑垂れるルーナ、その頭を撫でてみたナイン。

「…………。がうつー!」

「痛つー!」

指を噛み付かれたナイン。自業自得である。

「何だよー。慰めたつもりだつたんだぞー。」

「…………、あたしは疲れた！ 今日またわざとお風呂入つて寝るー。」

「ビリビリビリビリ。その方が俺も楽なんで」

ふんふんなんて擬音語が聞こえそくな足取りで、ルーナは図書室から出て行つた。

ルーナの足音が一階へと向かうのを聞き、ナインは呟いた。

「……時間がないな。結局、いつなるのか」

「…………はあ」

ルーナは洋館の池の周りを歩いていた。

お風呂に入ると言つたが、少し散歩がしたくなつたのだ。

「…………はあ」

ルーナは、洞窟の前の惨状を思い出し溜息をついた。

血生臭い空氣に『浄化魔法』をかけ、粉々になつた肉と骨を『落盤魔法』と『土砂魔法』で埋め、ついでにそこら辺に生えていた名も知らぬ花を適当に添えて來た。

自分の所為ではないと解つてはいたが、ビリか心苦しい所があつた。

『よしそし』

と、何故か先ほどナインに頭を撫でられた感触が甦つて来た。ルーナの所為ではない、そう言わんばかりだつた。

「……ひひひ。何やつてるんだろ、あたし」

なるべく顔に感情出さないようにしていただが、ほんのりと頬が熱くなつてゐるのをルーナは感じていた。

「信用し過ぎ、なのかな。でも、護衛を信用しないのも変だし。あいつだつて、別に悪い奴じやないはずだし」

ナインも、ラギとナギも自分と何も隔てる事無く接してくれる。魔法使いというだけで差別したり、どこか他人行儀な態度を取ることも無い。

愛葉やリオ達でも、留学生だからといふ事も有るだろうし、研究第一で付き合いが悪い事もあってここまで打ち解けてはいない。

(何も知らないのに、全てを受け止めてくれる。それが心地いい)

ここには温かい、そうルーナは思った。

ルーナは一人だつた。

噴水の周りには、ルーナしか居ない。

今も一人な事には変わりないが、けれど昔の一人とは又違つ。

同年代の子供達が外で遊ぶ中、独り家の中で魔法を覚えていたあの頃とは、違うのだと。

あの頃、心を占めていたのは冷たさ。自分と他の子を客観的に見つめた、冷めきつた心。

今、心を占めているのは温かさ。弟妹みたいな二人に……よくわからぬナインがいる。具体的な事は何も言えない、けれど伝わつ

てぐる温かさ。物理的には離れていても、独りじゃないと思える。
一人と独りは、まるで違う。

(あたしも受け止めるべきなんだ。知りたい訳じゃない、ただ、気になるだけ)

ラギとナギの過去。

そして、本当によく解らないナインの事。

ルーナは何かを確かめるように頷く。
と。

空が一瞬だけ歪んだ。

「……これは、結界を誰かが通った?」

ルーナではどうしようもない結界だが、ナインは『転移魔法』で、
ラギとナギに至っては普通に突破出来る。

「……次は、あたしの番つてことか」

洞窟前の惨状が再び田の前を過つたが、ルーナは首を振つてそれを否定する。

「頼りになる護衛がいるから、……大丈夫」

ルーナは呟き、洋館の方へと駆け出した。
そして。

「？？？！？」

不意にその動きをルーナは止めた。
それは、とても不自然な動作だった。
ルーナにも、それが何なのか解らない。

そして、何かがルーナを包み込んだ。

「ルーナ！」

「…………」

ルーナが首だけ振り返ると、ナインが走り寄つて来る所だった。

「ルーナ、まずい。たぶんムクロ……、あいつが来た」

「…………」

ルーナは無言でナインを見つめる。

「俺はあいつを止める。だからルーナは、屋敷に入つて？？！？」

ナインは言葉を切り、ルーナへと近づけていた脚を逆に遠ざけた。
振り返ったルーナの手には、一本のナイフ。

それは見る人が見れば、魔法の力で創られた物だと解る一品。ナ

イフの周囲を風が巡っていた。

切れ味は、愛葉の使う風の刃と同等だらう。

「……ルーナ?」

ナインはルーナと、その手に握られたナイフを見る。
そして、ハツとなる。

「まさか……『二重螺旋』!?」

ナインは憎々しげにその名を呴いた。

『二重螺旋』

それはスキルでも特性でもなく、一つの呪いである。この呪いに
かかった者は、それに気付く事無い。体調の異変など無く、軽い睡
眠不足しか予兆は無いのだ。

そして、呪いは発病後、その者的人格を変える。
術者の指定した一つの行動を最優先事項とし、そのためになら自
らの身を滅ぼしても動く人形と成り果てる呪い。

『二重螺旋』は、その非人道的な効果からナンバーズに狙われた。
そして、ルーナも『二重螺旋』の被験者だった。
奇しくも、9番目の被験者だった。

「……結局、誰も救えなかつたのか」

ナインは俯き、自重氣味にそつ呴いた。

「なら……最後は俺が辛くないよ、一撃で——」

だが、ルーナの一言で、ナインはその考えを捨てさせられた。

「ナインじゃ……無いんでしょ？」

ルーナは、笑みを浮かべてそう言った。
ナインの言葉が、止まつた。

「何を言つてるんだルーナ！」

ナインは、ルーナをじっと見つめる。その姿は、まぎれも無くナインのものだ。

『——重螺旋』の影響で頭がおかしくなったのでは、とナインは思つた。

「ナインじゃないんでしょ？」

だがルーナの視線は、疑いと言つよりは確信に満ちたものだった。ナインはルーナを見つめ、ルーナは笑みを浮かべてナインを見る。そして。

「…………、へえ。まさか俺の能力を見破る奴がいるなんてな

不意にナインの体が変化した。

一瞬、ナインの体が分解し、刹那、一人の男の体へと再構築され

る。

黒髪は銀髪へ、制服はコートへ。

数字は、9から6へ。

「俺の名はムクロ。政府特務機関、ナンバーズの六番目だ。んで、お前、何者？俺の能力は『六変化』。声紋から指紋、微妙な仕草や癖、脳みそからつま先まで完全に変化しきる。勿論、スキルと特性もだ。さすがにDNAは無理だし、例外も有るがな。だが、よほど親しくない限り、俺の変化は見破れないんだが……な」

ムクロは惜しげもなく自分の能力を曝す。

ムクロにはもう一つ、近づくもの全ての力を操る能力『絶対力場』がある。

こと接近戦において、ムクロを倒す事は不可能に等しいのだ。

「……そう。その能力は完全になりきる。たった一週間の付き合いじゃ、絶対にバレない。第六感も働かないくらいに」

ルーナは淡々とムクロの『六変化』を賞賛する。

「そうだ。……って、もしかして」

ムクロは気付き、ルーナは笑みを浮かべた。

否。

「だがムクロ、例え完全になりきりuzzとも、お前だってルーナを知つてはいないだろ？」

『模写魔法』

対象の見た目及び一部ステータスを完全に「コピー」する魔法。声紋、指紋などは「写す事が出来ない」。親しくとも、対象と付き合いのある人間には簡単にバレてしまうような魔法。

だが、相手に付き合いなど無ければ、完全に騙せる魔法だ。

「ムクロ、悪いがここで諦めてもらひつぞ」

ルーナを模写していたナインが、その魔法を解いた。

第三章 魔法使い・9（後書き）

若干予定外に忙しくなってしまいました。
更新ペースが落ちるかもしません。ごめんなさい。

「——ツ！？」

ルーナの動きが止まったのは、『二重螺旋』の影響ではなく、ナインの『呪縛魔法』によるものだつた。これから起ころる戦闘に、ルーナを巻き込みたくないからだろう。

不意に何かが自分を包み込む感触があり、それがナインの何らかの魔法だとルーナは気付いた。

それが『模写魔法』の影響だと言う事を、ルーナは知らない。

『模写魔法』もまた、『瞬間移動魔法』や『脱出魔法』と同様に存在自体が認められていらない種類の魔法だつた。

一分程で呪縛は解け、ルーナは慎重にナインを探した。

そして、ルーナは聞く事になる。

洋館の正面で、ナインとムクロは対峙——いや、会話していた。

「……『二重螺旋』、どうやら解いたみたいだな。それならお前と争う理由はねーよ。つたく、そんならさっさと言つてくれれば良いのによ」

「二ジユウラセン？」

「あ、知らなかつたのか。あの嬢ちゃんに呪いかかつてたろ？ お前の『算出眼』なら見えたはずだ。その呪いの名前。人格破壊の呪いだな」

「……なるほど。そんな大層な物なら、ナンバーズが出て来るのも納得出来る」

だが、とナインは険しい顔をしてムクロを睨みつけた。

「何故殺す必要があつた？」

ナインに睨まれ、ムクロは肩を竦める。

「呪いは人格破壊。発病してからじゃ自我も無く、ただ狂った人形となるんだ。それなら、さつさと殺した方が良いだろ。生憎俺には、お前のように魔法は使えないんでな」

「…………」

疑うように睨むナインに、戯けたようにムクロは答える。

「疑うなよ。『二重螺旋』は呪いの発病後、被験者の命よりも指定された行動を優先すんだ。生憎、今回の事件では水際での対処だつた。嬢ちゃん以外の八人、それは某国から帰国・入国した人間だが、そいつらは全員既に発病後だつた」

「…………」

「逆に考える。一人は救えたんだ。この非人道的な呪いからな」

ムクロは笑い、ナインは黙つた。

「それじゃ、ナイン。俺の疑問に答えてくれよ。」

ムクロはナインを見据えて、それを問うた。

「お前は一体どうして護衛なんてやつてんだ？ 記憶喪失の、人間嫌いのお前が」

ナイン、『自分を知らない少年』は答える。

「別に俺は人間嫌いじゃない。ただ……人間関係を築くのが苦手なだけだ」

ナインは俯き、自分の手を見つめる。
たつた四年の記憶しか刻んでいない、その手を。

「……俺は自分がどこの誰で一体何者なのか、その記憶が無い。研究所にいた四年前からしか記憶が無いんだからな。人との付き合い方も覚えていない。嫌われる事が怖いから、なるべく人と付き合わなかつた。自分を嫌うのが嫌だから、自分とも向き合わなかつた」

ナインはどこか遠くを見つめる。
それは、思い出せない過去、これから歩むだろう未来を見据えて
いるようだった。
「それでも、俺は誰かを守りたいと思った。それがきっと、俺と言
う人間なんだ」

ナインは拳を握る。何も解らずとも、ナインはこの手で何人も助
けて來たのだ。

何も考えず、何にも縛られず、ナインは行動する。

「俺はただ、この心のままに行動しているだけだ。確かに人付き合
いは勝手が分からなくて苦手だが、俺は苦手だからと黙つて、自分
の心を曲げる事はしないんだよ」

ナインは自分の周りに居る人の事を考える。

「俺は確かに、リオの人を小馬鹿にした態度が苦手だ。愛葉のやたらと俺に絡んでくるのも苦手だ。ルーナの行動もよく分からなくて苦手だよ」

だけど、トナインは付け足した。

「俺は苦手や嫌いのままで終わらせたくないんだよ。出来るなら、好きになりたいんだ。特に、こんな俺でも頼ってくれる、必要としてくれる人なんかだつたらな」

だから、トナインは自分を言葉で表す。

「たとえ全人類を敵に回しても、守りたいと思つた人は守り通す。例え頼まれなかつたとしても、俺は目の前で傷つく人を見て見ぬ振りは出来ない。苦手だ嫌いだなんて、その後の話だ」

ナインの台詞に、ムクロはくくくと笑つた。

「全人類を敵に回しても、たつた一人の人間を守る?」

ムクロは、その考え方をこう形容した。

(それじゃまるで、××じゃねーかよ)

ムクロは笑みを浮かべて、ナインに忠告する。

「ナイン。お前が思つてゐる程、世界は優しくねーよ
」

「今回の事件、『一重螺旋』で解つただろ？　この国の進みすぎた技術に、世界は懸念を抱いてんだ。侵略していくんじゃねーか、ってな。バカみたいな話だ。侵略されないために生み出した魔力で、逆に侵略するつて考えてんだぜ？」

「技術提供でもすれば良いだろ」

「そうだな。だが、考へても見ろよ。その技術で、逆にこの国が攻められたらどうする？　この国が持つてゐる分には侵略なんかにや使わねー技術だが、他の国はどうだ？　土地が瘦せていて、国家の転覆が見えている国だつたら？　異教徒殺害を承認してゐる宗教國家はどうだ？」

「…………」

「別に俺は人を殺すのが好きじゃねーよ。悲しいくらいだ。だがな、平和を求めるには誰かが涙流さなきゃなんねーんだよ。それが俺達ナンバーズだ」

「それでも、俺は？？」

「？？ああ、いい。聞き飽きてるよ、お前の言いたい事は

ムクロは面倒をうに手を振ってナインの言葉を遮る。そして、ふと思いついたように言った。

「……俺とお前は似ていろよ、まるで似ていなよな。数字の6と9のように、逆さにすれば同じだが、その中身はまるで違う」「当たり前だ。お前の能力があれば、誰とでも同じになれる」

「そうじゃねえよ。俺が言つてるのは、中島、志の問題だ」

ムクロは親指で胸を指し、言葉を続ける。

「国民を守るために犠牲を出すが、その犠牲は無駄にしない。それが俺達ナンバーズのやり方だ。それに対してもお前は、犠牲を出さずに国民も守る、なんて抜かしやがる。似てるよ、まるで似ていないだろ。俺はそういう事を言つてるんだ」

（たとえ全人類を敵に回しても、ここには誰も犠牲になんてしない。いや、させないよ、こんな野郎だ。まったく、だから俺は？？）

「自分で詭弁だつて解つてるさ」

そんなムクロの考えを遮るように、ナインは呟いた。
その言い方に、ムクロは腹が立った。

「あーそうだ！ 詭弁だな。戯れ言、絵空事だ。夢のまた夢、妄想でしかねー」

ムクロは、胸に溜まっていた鬱憤を吐き出すように言葉を紡ぐ。

「誰もが笑いあえる世界？ 今じゃ駄目なのかよ？ ここの國の人間

が笑えれば、それでいいじゃねーか。そりゃない？ その影で誰かが死んだりするのは間違ってる？」

ナイインの心中と、自身の思いをムクロはぶつけ合つた。

「あーそうだな、だけどそれが世界の真理だろ？が！ 犠牲無くしては何も得る事はできねーよ！ お前の言う事は夢でしかねー！ だから……！」

ムクロはそれを口にした。

「俺はそれを叶えてほしいんだよ。夢は叶えるためにあんだから」

「…………」
あつけらかんとしたナイインをバカにするように、ムクロは悪戯小僧のような笑みを浮かべ、夜の闇の中に消えて行つた。

「…………喰えない奴だ」

ナイインは呆れたように溜息をついた。

「…………はあ。きこむちいへ」

暖かな湯気が満ちているお風呂。

疲労回復・火傷・切り傷に効くといつ効能の温泉が溢れ出る、檜の湯船に浸かりながらルーナは伸びをする。

「……記憶喪失、か

ルーナは、ナインとムクロの会話から聞き取った言葉を呟いた。

「……聞いたか

ムクロが消え去ってしばらくした後、ルーナは隠れる事無くナインの元へと駆け寄った。

後ひめたさなど、微塵も無かった。

「記憶喪失……なの？」

「……んん、そうだな。って言つても、ルーナとは直接関係ないと思つけど。何？ 実は知り合いでした、みたいな？」

「それは無い」

「どううな」

もの悲しげに、どこか自嘲気味にナインは笑みを浮かべた。

「先に言つておくと、俺の記憶は何をしても思い出せないんだ。再生魔法だろうがなんだろうがな。だから、気遣いはしなくて結構」

「……そつ。辛くはないの？」

ルーナはどうじてそんな言葉が口から出たのか解らなかつた。ナ

インも少し驚いたようだった。

「もう慣れたさ。生まれ変わったと思えば良いだけの話だ。それに、俺は今の俺が嫌いじゃないし」

「そっ。あたしも、あなたのそういう所は嫌いじゃない」

「そういう所って、どういう所だよ」

「……………寝めてやつてるんだから、素直に喜べー。」

ビシッとナインの頭にチョップするルーナ。それは、明らかに照れ隠しだった。

「いてて。でも、ありがとうな。こんな俺でも頼ってくれて」

「バカ。あんたは自分を低く評価し過ぎ。あたしは？？」

「ん？」

不意にルーナは言葉を切った。何を言ひべきなのか解らなくなつたのだ。

「ひひひひー お風呂に入るー！」

自分の言いたい事が解らなくなり、ルーナは洋館へと駆け出した。

「……………あたしは、なんて言ひたかったんだる」

ルーナはぶくぶくと湯に沈みながら、小ちく咳いた。

（あ～もう一 なんであたしがあいつの事心配しなくちゃいけないのよー あたしはあいつの護衛じゃないっての）

『じゃじゃと湯船に荒波を作りながら、ルーナは思った。

(「これも全部、あいつが変な事言つからうだ……」)

『俺は苦手や嫌いのまま終わらせたくないんだよ。出来るなら、好きになりたいんだ。特に、こんな俺でも頼ってくれる、必要してくれる人なんかだつたらな』

苦手だと言われた時に胸が痛んだ。でも、この台詞を聞いた時は胸が温かくなつた。

一体自分はどうしてしまつたのだろう。

ルーナは頬の火照りが、暖かな湯の影響なのか、それとも、別の何かの影響なのか、解らなかつた。

第二章 魔法使い・10（後書き）

次で第三章はおしまいです。

感想・指摘・意見などお待ちしております

「ンンン。

「ルーナ、起きてるか？」

「…………」

無言の返事に苦笑いを浮かべるナイン。

ルーナがこの洋館に来てから、一週間が経とうとしていた。
さすがにもう慣れたものである。

「んじや、先にご飯食べてるぞ」

「…………」

客のプライバシーを守るために防音設計になつていてる扉。そのため、起きているのかいないのか解らない。けれど起きているのだろうな、と経験則でナインは思っていた。

それは、当たつていた。

当たつていたけど、外れていた。

「え？」

「ん」

「いや、……え？」

田の前に差し出された料理。ぽかんと口を開けたナイン。無表情でじっと見つめながらそれを差し出すルーナ。

ちなみに彼女の格好は、裸にエプロン？？ではなく、普通の格好にエプロンだった。

斜めに頭に乗っているロック帽が、なんとも可愛らしいものだつ

た。

「……何？ ルーナが作ったの」

「ん」

「ククと頷くルーナ。どこか小動物のよつな仕草であった。

「……俺に食べると？」

「ん」

朝は弱いルーナは、先ほどから『ん』としか言つていなかった。それだけに、料理の味が心配された。

「……『クッ。い、 いただきます』

「ん」

「いただきまーす」「いただきまーす」

普段はラギとナギが料理を作るのだが、今日はどうやらルーナが代わりにやると言つたらしく、一人はウキウキしてるように見えた。ラギとナギに取つて、ルーナは姉のような存在だ。
その姉が？？味はともかく？？料理を作ってくれるのだ。嬉しくないはずが無い。

味はともかく。

「　「　「？」！？」」

ルーナの料理を口に入れた三人は、同じ反応をした。

結果から言えば、ナインが『浄化魔法』を使う事は無く、ちゃんと美味しい料理だった。その評価が理由で、しばらくの間同じ料理しか食卓に並ばなかつたという余談もある。

どういった心境の変化か、ルーナが毎日料理を作るようになったことではあるが。

図書室で一人はそれぞれ本を読んでいた。

ルーナは魔導書で、ナインは文庫本だ。

魔石事件以来、一人は引きこもっていた。

「……あんたってさ、自分が誰だか知りたくないの？」

「別に。もう知ってる？？」といつと語弊があるな。知っていると言うよりは、そう呼ばれていると言うつか、そう言われている名ならあるんだ。確証はないし、俺には信じられないがな」

「へえ、良かつたら教えてくれない？」

あくまで平生を装いながら、ルーナはそれを尋ねた。

「魔法使いなんてそんなに数は居ないし、今行方不明の魔法使いとなつたらすぐ見つかるか」

本来、魔法使いは国によつて厳しく管理されている。

当然と言えば当然、スキルで魔力を扱えると言つた所で、魔法使いには及ばないのが普通だ。

魔法使いは一騎当千、と言つても過言ではないのだ。

ルーナが日本に入国出来たのも、『二重螺旋』の実験体になつたのが理由である。

そうでなければ、只でさえ魔力に関する技術で一步先を行く日本に、魔法使いなど送りはしない。敵に塩を送るような物である。

「先に言つておくと、国で管理されている魔法使いの誰も行方不明

になつていな

有名人ではない? とクエスチョンマークを浮かべるルーナ。

(『瞬間移動魔法』なんて規格外の魔法を使って、有名じゃないってどういう事?)

それに答えるように、ナインは呟つた。

「俺は????だと言われている

ナインのその台詞に、ルーナは固まつた。

「よお××。任務は遂行したぜ?」

ムクロは笑みを浮かべ、田の前の仮面の男に語りかける。
その白と黒によつて構成された仮面は、輝く希望と染まらない正義を意味する。

「せうか、『苦労。後の事はワンオーニーに一任してお』い
「りょーかい。特別手当でも出してくんねーか?」
「……数日ほど休暇を取れよ。その間に、愛すべき人と会うが良
い。これからじばりく、争いの時代を迎えるだらうからな」

至極眞面目にそんな事を言つ仮面の人物に、くくくとムクロは忍び笑いを浮かべる。

仮面の人物はどこまでも眞面目に、ムクロに問う。

「ムクロ……。名無しの？？いや、『××の模造品』はどうしていた？」

「なんだ、気になつてのか？」

「当たり前だろう？ 奴は勇者。そして私は？？××だ」

男が仮面の下で笑みを浮かべたような、そんな錯覚に捕われるムクロ。

「な、いつも通りだ。相変わらず、犠牲も無しに誰もを救うなんて言つてたぜ？」

「……それでいい。奴がそれならば、問題ない」

「くくく。けれど、あいつはお前が思つていいよりも、面白くなつてるぞ？」

ムクロは笑みを浮かべ、その人物を見る。

「仮面の総理よ。秋山雪田はどうなると思つ？」
あきやまゆきのひ

仮面の人物、現日本総理、秋山雪田は言った。

「何も変わりはしない。政治家は犠牲だ。財産だらつとこの身だろうと、骨から血肉まで、それこそ涙であるつと朽ちるまで、この国のために使うだけだ」

秋山雪田。

侵略戦争で戦つた、七人の魔法使いの一人。そして、現日本総理。いや、それは総理ではないのかもしれない。選挙で選ばれてこそ居るが、政治に関してはほぼ全て彼の独裁となっているのが現状だ。

だが、それでもこの国は回っている。

『國民に認められた、選ばれた。それだけが私の財産です。私と言ふ人間は、認められなくなつたその時から、もう存在しないのです。だから私は、この身が朽ちるまでこの国を良くして行きたいと思っています』

彼には財産と呼べる資金的物品が何一つ無い。

彼が総理を辞めたとすれば、彼は早速ホームレス生活を始めるだろつ。

自分と言ふ存在を全て犠牲にして、彼はこの国の頂点に立つている。

汚職、内輪揉め、小学生の学級会ばかりの国会、私腹を肥やすために働く政治家。

家も無く、金も無く、国政を一人で切り盛りし、侵略戦争の英雄。彼の支持が下がる事は無かつた。

「私は無意味に仮面を被つてゐる訳ではない。仮面は、象徴だ。『君たちが求めているのは、私の顔か？ それとも、私の実力か？』私はそう国民に問うた」

秋山雪田は、仮面の下で笑みを浮かべる。

「私の正体が何であれ、国民に支持されるのであれば問題は無い。
そのための、仮面だ」

中身は、誰であろうと関係ない。

例え、『侵略戦争』で戦つた秋山雪日で無くなつていったとしても。
秋山雪日は誰か解らない。仮面の下は解らない。

例え、中の人間に入れ替わつていたとしても、良き國を創り続けていれば、それは秋山雪日なのだ。

第三章 魔法使い・11（後書き）

とうあえず、第三章は終わりです。

元々書きたかった事が少し、今後の伏線がかなり含まれています。ちなみに、後半部分で『あれ？ この小説ってこんな話だつだけ？』みたいな事を思つた方、『ごめんなさい、いつこう話です。

そして追い打ちをかけるようですが、この物語は基本なんでもあります。

今後の展開で『どうしてこうなった！？』とか思つと思います。具体的には、次回の番外編で。

ちなみに、『こういう話が読みたい！』などの意見がある方は、番外編が終わる前にお願ひします。……あるとは思えないけど。

感想・意見・指摘お待ちしております。

第零章 例えは誰かの昔話

秋山雪田は思つ。

この世界は腐つてゐる、と。

秋山雪田は侵略戦争前、北海道知事であつた。

仮面を被つていたが、それでも彼は当選した。

北海道の不況を止める、そういうマニフェストを掲げた彼は、付け足すようにつづいた。

「私が当選した暁には、私の私財を衣食住に困らない程度、十萬円程残して、それ以外を全額寄付する事もマニフェストに付け足しておこう。私が当選しても良い結果を残せなかつた時、再選挙後はその資金をどう使われても構わない。……最後に、私は国民に聞いたい」

そう言つた彼の後ろには、高々と積まれた札束が合つた。そして、

彼は言つ。

『君たちが求めているのは、私の顔か？ それとも、私の実力か？』

侵略戦争後、魔力が満ちた世界の指導者となるため、彼は総理と会談をしていた。

「何かを得るために何かを犠牲にしなければならない。それがこの世の摂理だ。何かを犠牲にしなければ何も得られない、そ�だろう？」

秋山雪田は仮面を被る。口元から上を全て覆い隠した白と黒の仮面。

国民を前に、彼は思う。

「……なつてやううじやないか、犠牲に。それでこの国が良くなるのなら」「

犠牲なき幸福など、そんなものは存在しない。何かを失つから、手に入るのだ。

秋山雪田は、第九十九代内閣総理大臣佐藤大和と向かい合つ。それは首相官邸の、とある一部屋での会話。

「秋山君、君は本当にそう思つているのかい？ 犀が犠牲になる必要がどこにあるのだい？ なぜ他人のためにそこまで尽くそうと思う？」

「それが国を統べる人の言葉ですか？ 総理、あなたは一体なんの為に政治家をやつているのですか？」

「愚問だね、秋山君。総理も仕事の一つさ。仕事はなぜするのか分かつてゐるのかい？ 自分の趣味を楽しむためには、どうしたところでお金が必要だ。そのお金稼ぐためだよ。政治家なんて、そんなものだ」

「……では、あなたは自分の生活を守るために政治家をやつていると？ 所詮政治家もそこらのサラリーマンと同じ一つの職業に過ぎない、そう言つているのですか？」

「当たり前だとも。それなら君は何だ、全ての人人がやりたい、趣味

と同義の職業に付いていて、一生懸命熱心に仕事をやってくると困つていいのかい？ それは幻想だよ？」

「……まさか。 そんなに今の世の中はうまく出来ていませんよ」

「やうだらう？ 政治家とか総理とか、そんなのどうでも良いのだよ。高い給料が出ればそれでいいのだ」

「ではもう一度お尋ねしましそう。あなたは、一体何のために政治家をやっているのですか？」

「言つただらう、秋山君。私は私の生活のために、一つの職業としてこの仕事をしているのだよ。君だってそうだね？」

「………… やはり、な。犠牲なき政治に幸せを望む意味は無い」

秋山雪田は、ぽつりと呟いた。それは総理にも、誰にも聞こえないかった。

秋山雪田は、総理の顔を見て言つた。

「私は国民のためにやってくるのだよ、大和総理」

「戯れ言だな。それなら秋山君、君は何かね。国民のためならなんでもするというのかね、だから私財を投資してまで、ここまで這い上がつたと言つのかな？」

「そうです。私は私を犠牲にして、この国を良くしたいのですよ。何かを犠牲にしなければ何も手に入りません。ですから、大和総理」

秋山雪田は、そして言った。

「あなたには、総理の座を降りてもらいます」

瞬間、佐藤大和は理解した。

秋山雪田が、何をここにしに来たのか。

「ちなみに總理、先ほどの会話は全て全国に流れていますので。一体どちらに支持が集まるでしょうね？」

「????????！ 秋山君、君は言つたじゃないか！ 国民のためだと。私だって国民だ！ 私が私を助けて何が悪いと言つのだ！ 何が間違つていると言つのだ！」

「間違つてなどいませんよ。ただ、私には理解できないことです」

「国民に認められた。……それ以外に何を求めるのですか？」

「私は分からない。どうしてあなた達は認められる、選ばれる価値に気付かないのか。なぜそう貪欲に、自らのためだけに生きるのか」

「????？」

「選ばれる価値の分からない者が治める国に、望む明日はありません。やよしなひ」

秋山雪田の時代がここから始まつた。

「貴様が特殊体N.O.・ナインか。我が名はワンオーノ・ワン、モデル名は『犬』だ。貴様にこの世界を教えてやるつ」

そう言つて、ワンオーは俺を谷底に突き落とした。

「君がそうか、N.O.・ナインか。僕はイーグル。N.O.・ツー、モデル名は『鷹』だ。人は僕の事を『死者の冒流』と呼ぶ。君に正義はあるかい？」

そう言つて、イーグルは死体を踏みつけた。

「……私の名前はミーナ。N.O.・スリー。モデル名は『猫』です。あなたに常識教えます」

そう言つて、ミーナは俺に常識を教えてくれた。

「しゃはしゃは、N.O.・ナインね。うん、あたしはシャーク。N.O.・フォー、モデル名は『鰐』だぜ。この世界は地獄だぜ？」

そう言つて、シャークは俺に地獄を見させてくれた。

「九番田のお兄ちゃん、私はイツカです。N.O.・ファイブ、モデル名は『鬼』です。お兄ちゃんは優しいですか？」

そう言つて、イツカちゃんは俺をひねり上げた。

「ああん？ お前がそうかよ、N.O.・ナインか。俺はムクロ、他人は俺を『生者の蹂躪』って呼ぶぜ。N.O.・シックス、コード名は『六変化』だ。お前つて、正義とか悪とか信じてるのか？」

そう言つて、ムクロはざつくり人を殺していた。

「よつと、うにゅ、アンタがN.O.・ナイン？ ウチはN.O.・セブン、ナナミや。よろしくさん！ コード名は『最良調整』。なあ、ウチと良い事せえへん？」

そう言つて、ナナミは俺を連れ回した。

「あなたがN.O.・ナイン、ね。私はN.O.・エイト、ヤガミと言ひ。コード名は『超能力』。実に負抜けた人間ですね、あなたは……いや、化物か」

そう言つて、ヤガミは悪意と嫌みを俺にぶつけてきた。

ナンバーズは、正義を重んじる。

九人は九人がそれぞれの思う正義を貫いている。

そして、ナインの正義はとある事件で碎かれ、組織から捨てられる事になった。

その裏に、『葉桜学園』の事件が関わりある事は、明確だった。

とある会談の後日談。

佐藤大和、元総理は秋山雪田の背中に話しかけた。

「秋山君、どうして私が君を選挙に出されたか分かるかね？」

「……どういった事ですか？」

去ろうとしていた秋山雪田はぴたりと動きを止めた。

「君は仮面で顔を隠し、秋山雪田と偽名を名乗っている。『籍上、そんな人物は存在しない。さて、どうしてそんな君が選挙などに出られたのかね？』」

「……私が裏に手を回したからですが？　あなただけではなく、色々と」

「そうだな、秋山君。だから君は選挙に出られた。君は実に優秀だつた。本当に北海道の不況を回復させた。それは越権行為ばかりだつたのだが、私は黙っていた。しかし、私が否定してしまえばそれまでだつたのだよ？　なぜ私は君を認めたか分かるかい？」

「……必要だつたからでは？」

「そう、秋山君、君は必要だつた。何がだと思つ？」

大和総理はにやりと笑う。

「君は代替可能だということだよ、秋山君。秋山雪田という仮面さえ被つていれば、誰だつて君に成り得る。秋山雪田という存在はまだ確定されていない。だから、君は誰でもないが、誰にでもなれるのだよ」

「……貴様！」

「仮面の入れ替わりトリック、君はそれを狙っていたんだろ？ 君がどうしてこんなことをしようと思ったのか知らないが、有効に利用させてもらおう」

大和総理は懐から何かを取り出した。

「ありがとう、秋山君。君の築いた信頼と力は、私が有効活用させてもらつよ」

何かが弾ける音が部屋に響き渡つた。

「犬養、これを始末しておけ」

「はい、閣下」

犬養と呼ばれた男は、黒い歯をむき出し、口元を歪めた。

第零章 例えば誰かの昔話（後書き）

タイトルの通り、過去の話でした。

なんとなく、作者が書きたい事が見えてくるかもしません。

そして、『めんなさい。

作者の執筆方針は、書きたい物を書きたい時に書く。

と言う訳で、しばらく『例えば名無しの英雄譚』の方を執筆したい
と思います。

これは、タイトルから解る通り、この物語とリンクしております。
リンクしておりますが、それを読んだからと言つて、何か変わると
現段階では思えません。

興味のある方はぜひどうぞ、といった具合です。

感想・意見・指摘など、お待ちしております。

第三回四章 例えば誰かと少女の関係（前書き）

ヒロイーンは誰なんだね？。

第二回 四章 例えは誰かと少女の関係

「……ルーナ。なんか用?」

「別に……」

「じゃあなんで俺の脣に寄り掛かつて本を読むんだ?」

「……別に。ただそこに背中があつたから」

「重くはないし、そして邪魔でもないけど、どうしてくれませんか?」

「なして?」

「……いや、もうこころよ」

図書室、一人は背中を合わせて本を読んでいた。

「ん、そうだ」

「何だ? また魔石探すとか言つなよな? もうこころよ」

ヒルーナは本から皿をそひながら言った。

「違う。……今日、休みでしょ?」

「ああ、田曜日だな。それで?」

「お休み、あげよつと思つて」

「休み？」

「護衛のお休み。今日は一日日本読んでるから、好きな事していいよ。」
「こないうぼどの事じゃないと襲われないし、ラギとナギとも遊べるし。……天才魔法使いだし。自分の身は自分で守れる」

「…………そつか。んじゃ、ちよつと出かかってくるかな」

自分で天才とか言つのはどうかと思ひ、トナインは心中で突っ込んでみた。

そういう自分も、勇者だのなんだの言つてこたりするから声に出さない。

「お小遣いあげる」

「…………あ、ありがと」

そう言つて一万円をポンと渡すルーナ。
何故だか泣きたくなるナイン。

「お土産よろしく」

「はいはい。何でも良いだろ?」

「あなたが選んでくれた物なら、何でも良い」

「…………ん? じゃあ、行つてきまーす」

「…………。こやじらひー」

何かが気にかかったが、それが何なのか解らないナインだった。

「付き合ってくださいー！」

「…………は？」

ナインはいろんな意味で驚いていた。

いつも通り人気の無い場所へ『転移魔法』を使い、公園に向かう。そして行きがけの駄菓子にコーヒーを買い、今日は空いていたブランコに腰掛けコーヒーを飲んでいた時だ。

不意にそう声を掛けられ、振り返ると同時に誰かが腕に抱きついて来た。

そう言つて自分の腕に絡み付いて来たのは、リオだった。

そう言つたりオの格好は、いつもと違った。いつもの学ランの格好ではない。スカート、つまり普通の女子用の制服姿。

一言で言えば、女の子だった。

「……あ～、その髪どうしたんだ？ なんか長くなつてる」

「ウイッグです」

「なして？」

「似合いませんか？」

そう言つて下からナインの目を覗き込むリオ。じーっと、真っ直ぐ、大きな瞳で。ちなみに、リオがナインの腕に絡み付いていたので、二人は密着していた。

「いや、似合つてる。……うん、可愛い」

「それなら良いじゃないですか？」

「……まあそれはいいけど。それより、付き合つてつづりじどうい事？」

「……あ、そういう意味ではありませんよ。ただ、買い物に付き合つてほしいと言つ意味です」

「買い物？」

「ええ、買い物です」

そういうつで含み笑いを浮かべるリオに、ただならぬ嫌な予感がするナイン。

だが、彼には断るだけの度胸が無かった。
ある意味抱きついている女性を突き放す事は、彼には出来なかつた。

「じゃあ行きましょー！」

リオは苦笑いを浮かべるナインの手を取り歩き出す。そして、ナインは気付かなかつた。

「ちょ、ちょっとー、な、な、ななな……何アレ！？ 誰ー？」

遠くから自分を見ていた愛葉に、ナインは気付かなかつた。

余談だが、このとき街の気温が一気に上がっていた。

「美味しいですね」

「うん、そうだね」

「あつ、アイスが付いてます。……えい」

リオはナインの頬に付いていたアイスを指で取り、それを舐める。

「…………」

ナインは苦笑いを浮かべるしかなかつた。

買い物と言つ事で、ショッピングモールへと来た一人。

しばらく買い物をし、荷物持ちのナインに気をつかつたのか（といつてもナインは疲れ知らずだで、買い物の荷物持ちとしてはかなり優秀で、ナインが今持つてているのは服の入つた紙袋のみだが）、二人はアイスを買い、近くのベンチで仲良く並んで食していた。

「……ただの買い物か？」

「いえ、違いますよ。……その、ルーナとはどうですか？」

「仲が悪い訳じやないと思つナビ、ビリして？」

「いえ！ それなら別にそれで良いんですが……」

何か思つ所が有るのか、リオは顔を口元に手を当てて考え込む。

「……ちょっと昔話をしましょ。私の、昔話」「

リオはナインをじつと見つめながら、話し始めた。

「私つて女の子っぽく無いじゃないですか。髪型も口調も意識しないと女の子見えないでしょ？ 男の子っぽい格好をすれば、男の子にしか見えないでしょ？」

「……俺は一眼で女の子だと解つたけど？」

「？？話が先に進まないんで、そこは肯定してくれると助けるんですけど……」

「…………」めさん

「いえ……嬉しいです」

「うん？ なんか言ったか？」

何も、トリオは首を横に振り、話を続ける。

「私が入学した時は、ちゃんと女の子の格好していたんですよ。その時の制服がコレですね」

そう言つてベンチから立ち上がり、くるりと回つてみせるリオ。スカートが波を打ち、長い黒髪がたなびく。

「でも、入学初日に喧嘩を売られたんですよ。男みたいな女だな、つて。で、喧嘩を買ったのは良いんですけど、その当時の私は、スカルを上手く使えなくて……」

リオは再びベンチに座り直した。

「そんな時でした。会長が、私を助けてくれたんです。会長のスキルの前では、誰もまともに動けません。それで、会長は『もう大丈夫よ』って優しく手を握ってくれました」

「…………」

「それから私は会長にスキルを認められて副会長になつて、会長に変な虫が寄り付かないように男装したんですね」

「なるほどね。それが、いつもの格好の訳?」

「そうですね。今は会長がいませんし、あなたは私が女の子だって知っていますから、この格好ですけどね」

「……なあ、その話からすると、もしかしてそのウイッグ付けてる理由って……」

ナインは若干引きつった笑みを浮かべ、リオは満面の笑みで答えた。

「勿論、あなたに変な虫が付かないようにですね」

はははは、とナインは笑い、不意に何かを思いついた。

「あつ、そう言えば……ルーナにも言つたから、言つても良いか。リオの過去も聞けたし、俺も俺の過去を話そう

リオは首を傾げてナインを見て、ナインはどう吹く風と言つた感じで、遠くを見ながらこいつ言つた。

「俺は四年前に記憶喪失になつたんだ。んで、それ以前の記憶が無いんだよね。ナインだけに」

何を突然言い出すんだ、トリオはナインを凝視したが、ナインは空を見ながら続ける。

「……はい?」

「んで、どうにも俺は…………らしいんだ」

リオが硬直したのは、言つまでもない。

「な、な、一体誰なのよ。あ、あんなにいちゃついて……私、一体何を言つてゐるの？」

じうしてかナインとリオ（愛葉は気付いていない）を尾行していた愛葉は、ぶつぶつとそんな事を呟いていた。

今二人はベンチでアイスを食べていた、愛葉はそれを遠くから誰かを待つているような態度で見ていた。

「だいたい、あんな奴どうでもいいし、あいつが誰と付き合つても、関係ないし……。確かにカッコいい所もあるけど、基本的に駄目人間だし……」

もやもやとした何かが胸の辺りに溜まり、愛葉はムシャクシャしていった。

「ああ～もう！ なんでか気になるー。よし、ようつと話を聞いちやおうー。」

黒領学園の規則で外出も制服となつてゐるため、一人に近づけば

バレてしまつ。

だが、『空全絶護』は伊達じやない。

空氣に干渉する全てを影響下に置くのが、『空全絶護』の能力。声とて、例外ではない。

そして、愛葉は聞いた。

「俺は四年前に記憶喪失になつたんだ。んで、それ以前の記憶が無いんだよね。ナインだけに」

「はい？」

思わず、声が漏れてしまつた。それで周りから奇異の目を向けられ恥ずかしく思うが、それどころではなかつた。

次に聞こえて来た内容が、そんな事を吹っ飛ばした。

「んで、どうにも俺は秋山雪田うしいんだ」

愛葉も硬直した。

「ただいまー」

「「おかれり」「「おかれりなさい」

ルーナとルーナにじゅれていたラギとナギがナインを出迎えた。

「お土産、ケーキ買つて来た」

「「やつたー」「……」「ぐつ」

ナインの持つている袋を見て、ラギとナギがハイタッチをし、ルーナは涎を飲み込んだ。

「とりあえず店にあるの全部買つて來たけど、喧嘩するなよ」

「……お小遣い、どうしたの?」

ナインの金の汚さを知るルーナは、聞かずにはいかなかつたからだ。

「いやいや、俺だけのために使つわけにはいかなかつたからさ。ケーキに費やした」

「……はあ~」

呆れたとルーナは頭に手を添える。

「つと、忘れる所だつた」

そんなルーナを見て、ナインは思つ出したよつて懶に手を入れ、小さな紙袋を出した。

「これ、お土産な

「へ？」

それをルーナの白い手の上に置き、ナインは着替えるために階段を登り始める。

登りながら、ルーナの顔を見ずにナインは言ひ。

「俺にはセンスが無いからリオに手伝つてもらつたけど、俺が納得して買つた物だから。まあ、気に入らなかつたら捨ててくれて結構だ」

ナインが一階へ消えたのを見計りつて、ルーナは紙袋を開けた。

中には、螢火のような光を灯す宝石のペンダントが入つていた。

「…………」

ぎゅっとそれを握りしめ、ナインが消えた方を見るルーナが居た。

第三回四章 例えは誰かと少女の関係（後書き）

ヒロインが誰だか解らなくなつた作者です。

目標だった十万語を達成出来ました。

とりあえず、週一更新したいです。

感想お待ちしております（特にヒロインについて）。

第四章 銀謀の果て（前書き）

予告です。

ある種ネタバレですので、そういうのが苦手な方はこの話は読まない方が良いです。

第四章 隠謀の果て

「がはつ！」

ナインは倒れ、そこに追い打ちを駆けるように青年はその腹に蹴りを入れる。

ナインのＨＰが消え、その蹴りはナインを直撃している。「所詮君は模造品でしかないのだよ！」

「はん！ 巫山戯てんのかてめー！」

『不可視力』は黒ずくめを睨みつける。

「黙れ『失敗作品』。出来損ないに止められるとでも？」

『不可視力』は何も言わなかつた。代わりに。

「俺達は『失敗作品』だが、出来損ないではない」

『幻想卸し』が不敵な笑みを浮かべて答えた。

「ミラ・ルーナ君。君はこちら側にいるべき人間だ。その模造品から離れなさい」

「悪いけど、あたしは誰の意見も受付ないの。自分の行動は自分の意志でやるわ」

「……ルーナ、逃げる。こいつは……」

「大丈夫。あたしが守られてばっかりなのは癪。それとも、天才魔法少女じゃあんたを守れないって言うつもり？」

瞬間、複雑怪奇な魔法陣が出現した。

「あたしはこれでも怒つてるの。大切な友達を傷つけられてね」

「バカな！ 何故効かない！」

魔力の螺旋が粉々に砕け散つた。

「無駄よ。私達には、ありとあらゆる攻撃は効かない」

「僕たちは『最大最低』だから、誰にも勝てないけど負けない」

ラギとナギはにっこりと笑った。

「ミーナ。殲滅だ」

「…………解つた」

NO・スリー、ミーナは鎌を持ち、某国への侵攻を始める。

「…………ジョーズ？」

「奪われたのなら、奪い返せば良い。壊れたなら、直せば良い。ただし、欠けた物はもう戻らない」

人喰いジョーズの亡靈は、鎌を創り出し、そこに立ちふさがった。

「さつさと行け、ナイン。お前はまだやるべき事があるだろ？？」

「銃撃！？ これは、侵略か！」

「さすがは黒嶺学園の副会長だ。その自動防衛は厄介だな。だが、傷つき悶える仲間を守りながら、いつまで戦えるかな？」

軍服に身を包んだ男達が、黒嶺学園の生徒を取り囮む。

倉崎リオは一步も引く事は無い。

「何よコレ…………」

朝井愛葉は目の前の惨状に驚いていた。

血肉が舞い、硝煙と錆びた鉄の匂いが鼻にこびりつく。

そして、日本上空を飛ぶステルスマサイルを彼女は感知していた。

そして、一人の少年がその日、消えた。

第四章 銀謀の果て（後書き）

すみません、しばらく更新出来ないと感じます。
賞に応募する小説を執筆するためです。
合間に縫つて更新するかもしれません、多分しないと感じます。
因円くらこまでお休みかもです。

第零ト四章 過去と未来の交差

俺は誰も救えない。ただ、助けるだけだ。
自分を救う事が出来るのは、結局は自分だけ。
まだ、俺は俺自身を救えない。

「ナイン！」

「……ん？ ああ、優理か。どうした？」

もう二度と通る事は無いと思いながらナインが黒嶺学園の廊下を歩いていると、不意に呼び止められた。

赤い髪の少女、赤神優理が睨みつけるように立っていた。
肩までの赤い髪を揺らして、優理は怒鳴る。

「どうしたじゃないだろ！ 何やつてんだ！」

長身で絶妙なプロポーションとは裏腹に、男勝りの言葉遣いだ。

「不正行為だ。だから停学。意外と軽い処罰で驚いてるよ
「アホ。約束しただろ……俺と一緒に天下を取るって！」

「ありもしない約束を勝手に作るな。だいたい、天下つてなんだ。
お前一人で十分だろう？」『ヴァルキュリア 戦国夢想』のお前一人で

「何言つてんだ！ 俺一人じゃ無理に決まってる！ 子孫を残さず
に太平の世は作れない！」

ナインは優理の言つている意味が分からず、小さく首を傾げる。

「俺じゃなくても、『糸離滅裂』^{オーバーキル}がいるだろ？ 不正行為するような奴と一緒に居る所を見られたら、赤神家としても困ると思つが？」

「……うつ」

「それに、俺はこの結果に満足している。もしも心配してそんな事を言つているんだつたら、俺には無用の長物だ」

「だけど、これからどうすんだよ！ 学校停学になつたつて、お前戻つて来る気ないだろ！」

「そうだ。俺は今のお学校の方針が嫌いだからな」

ナインの言つている事は、とても勝手な事だ。気に喰わないから学校に来ないという、子供の我が儘だ。

優理の言つている事は、至極マトモだ。優秀な人材を手放す事は出来ないと、そう語つている。

「行かせない！ お前をこんな所で失うわけにはいかない！ 停学期間が終わるまで監禁しても学校に来させる！」

「俺はお前の物じやない。迷惑にならないよつ、勝手に生きさせてもらひだけだ。邪魔するなよ。……というか監禁つて本氣か？」

「『戦国夢想』に不可能は無い！ やつてみせる！」

瞬間、廊下は赤色に包まれた。

『戦国夢想』

能力の効果範囲はおよそ一十メートル。その空間の魔力を自分専用にするスキル。

相手は魔力を使えないが、自分だけは使えるようになる無敵領域。

優理は空氣中の魔力を圧縮し何十本もの刀を創り出し、自身の周

りに浮かばせる。

彼女の干渉を受けた魔力は、赤色を帯び、それで作られた刀も同様に赤い。

この空間内において、魔力は彼女の思いのままに象られる。

この空間内の全では自由自在と言つても過言ではない。まさしく、

無双。

『戦国夢想』は伊達じやない。

「ナイン！ お前の手足を切断しても、止めてみせる！」

言つてる事は病んでいたが。

ナインは辛そうに優理を見て、聞こえないように呟いた。

「だから俺は、この学校が嫌いなんだ」

その言葉を合図に、何十本もの刃がナインに向けて放たれた。

「なつ……！？」

そして、刀は碎け散った。

ナインに触れた瞬間、その刃は碎け散っていた。

このとき一人は知らない事だが、HPは空気中の魔力で作られていなかつた。

むしろ空氣中の魔力が使われなかつた分、HPがデフォルトで強力になつていたのだ。

本来ならば床に落ちたはずの刀が碎けたのはそのためだ。

圧縮された魔力で象られた刀は碎け散つて尚、目に見える赤い結晶となつていた。

赤い結晶舞つ中で、ナインは言ひ。

「だけどな、俺はお前の事は嫌いじゃないんだよー。」

だから、ナインは叫ぶ。

「だからこれ以上、俺を嫌いにさせるな！ 赤神優理ー！」

本当に砕け散ったのは、ビシバシの何だったのだろう。

「うう……」

目の前に迫るのは、『曲線尾』。一定の距離を追尾するレーザーを生み出すスキル保持者。

『曲線尾』の目は血走り、仲間の復讐に燃えていた。
都筑遥は泣きたくなっていた。

遥は元々争い事が苦手だった。

痛いのが嫌いだし、傷つける事も怖かった。

けれど、魔力に関しては凄く興味があった。そして、遥は珍しいスキルの持ち主でもあった。

そのスキルから黒嶺学園にスカウトされ、名門と援助の言葉に釣られて入学したのだつた。

結果、実力の伴わない珍しいだけのスキル保持者であった遥は孤

立し、個人戦で追いつめられていた。運悪く、遙の入ったクラスは強者が多く、強者同士で徒党を組み弱者の遙は孤立したのだった。

そして試験、一人ぼっちの遙は個人戦で、その強者によつて虐げられた他クラスのハツ当たりを受けているのだった。

目の前に迫る『曲線尾』がまさにそつだつた。

彼のクラスはチーム戦でこつぴどくやられ、復讐心に燃え上がっていた。

クラスの団結力を高めるためのチーム戦、それが別の所での団結力も生んでいた。要らない思いやりというか、仲間がやられて只で引き下がれるかみたいな話だ。

「くつそ、雑魚の分際でちよりちよりと動き回つて！」

黒領学園の試験では、グラウンドの四隅に柱を置いて結界を張り、その内部に魔力を用いて簡単な住宅街や森、草原、岩場などを作り、そこで戦う事になる。

個人戦ではそれだと広すぎるので、柱を増やして何試合も同時進行させている。

そして遙の試合は森のフイールドとなつていた。

変幻自在のレーザーを木に隠れながら必死になつて避けていたのだが、体力の無い女子の遙は遂に追いつめられていた。

「せいぜいあの世でクラスメイトを恨むんだな！」

「ひつ……」

あの世つて私、殺されるの？ 試験でじょどうしてそんな？？ つて凄く目が血走つてゐ！？ 本気だー！ 殺されるつ！？ どうしてこんな目に……。

『曲線尾』の指に粒子が集まり、拳程の大きさになる。

結界の外では息を飲む生徒、彼と同じく目が血走った生徒の歓声が遙には聞こえた気がした。

「けはははははははっ！－！　じーじゅあ誰も手え出せねえ！　クラスの誰もが俺の勇姿に歓声を上げてやがる！　けはははははははっ！」

今の台詞で外のクラスメイトも正氣に戻り、うわあとか声を漏らしているが、『曲線尾』は気付かない。遙もどんどん引きして顔が引きつっているが、それも気付かない。

『曲線尾』は両手を掲げて粒子をさらに集め、直径一メートルもの高エネルギー体を創り出す。だがそれは、明らかに試験などの範疇を超えた殺傷能力を秘めていた。

あれに触れれば、間違いなくこんがり焼けてしまつだろ？

そして、

「燃えちまえ！」

燃やす氣満々、試験と言つ事を忘れて『曲線尾』はそれを放つ。目を焼かんとばかりの光と肉を焦がさんとばかりの熱が、遙に襲いかかってきた。

「ひつ……」

遙は悲鳴を上げる事も出来ず、田をきつく閉じて全てが終わるのを待つた。

「…………」

だが、いつまで経つても、遙の身を焦がすよつた熱線はやつてこない。

遥が恐る恐る田を開けると、そこには……。

「大丈夫?」

一人の少年が、遙に手を差し伸べていた。

エネルギー体は地面を焦がしていたが、それは少年の目前で跡形も無く消え去っている。

「…………」

遙はあまりの出来事に何も言えず、おずおずとナインの手を取つた。

試験のために張られた結界は、並のスキルでは破る事も出来ないのだ。そのため、誰かが助けに入つて来る事などあり得ないと遙は思っていた。それに兵士を育成するこの学校において、規則を破る行為、試験の妨害は退学ものの禁止事項。

遙には信じられなかつた。自分を助けてくれる人が居る事が。それが、ナインと都築遙の出会い。

そして、それつきり、一人が学校で出会う事は無かつた。

「……ジョーズ。それは本当の話か?」
「それは勿論、確かな情報だ」

人喰いジョーズの亡靈は、相も変わらず奇天烈な格好をしている。

だが、その口から出た言葉は、真剣そのものだった。

「君がかつて助けた少女、都築遙は、この四魔戦で黒嶺学園に復讐しようとしている。他でも無い君のためにね。そして、君が現在進行形で護衛しているミラ・ルーナが、最悪の人物に狙われている」

ナインは顔をしかめ、溜息をついた。

「要するに、俺は四魔戦の開かれる九州に行かなきゃ駄目、つて事か？」

「それは確定事項だな。生憎、俺と『クリムゾン・ヒーロー血塗られた英雄』は今動けない。仕事が終わり次第行くが、九州ならば東堂と霧道がいる。お前は魔法使いの護衛とありがたくもない復讐を止めれば良い」

ナインは一際大きな溜息をついた。

「ジョーズは当てにしてなかつたが、『血塗られた英雄』も駄目なのか？」

ナインは残念そうに呟き、ジョーズは苦笑を浮かべる。

「あいつは今、とある組織の壊滅とその事後処理に忙しい。何せ、英雄だからな」

「解っているぞ。あいつはヒーローだからな」

ナインは今後の嫌な展開のため苦笑いを。
ジョーズはナインの言い回しに苦笑を浮かべた。

そして……。

「へっくしー

『クリムゾン・ヒーロー血塗られた英雄』、『勝利の方程式』……緋色勝利はくしゃみをした。

第零ト四章　過去と未来の交差（後書き）

次回はスピノフ的な番外編です。

主人公は……今回の流れ的に解つてしまふと思いますが。

感想・意見・指摘などお待ちしています。

第三回 四章 例えは勝利の方程式（前書き）

番外編のプロローグです

第三回四章 例えは勝利の方程式

俺は誰も救わない。俺は誰も救えない。
勝手に救われるだけなのだ。

結局、自分を救う事が出来るのは自分自身。

地下鉄のホーム、俺の視界の隅には一人の女性。

名を知る事も、その目的を知る必要も無い。外見を注視する事すら必要無く、ただ俺はこの姉ちゃんを線路上に突き落とせば良いだけの話だ。

俺の周囲一メートルは、完全に俺の領域。

ベクトルを生み出す事や消す事、四則演算処理や方向の反転が自由な領域。

俺は只、あの姉ちゃんの背後に線路に向かった力を生み出せば良い。足下がふらついて落ちた、そう思われるだけだ。

ジャミングで魔力、スキルの使用不可能になつてゐる公共機関において、それは当然だ。魔法使いが魔法で突き落とすこともない。詠唱や魔法陣が現れ、すぐに足取りが捕まってしまうからだ。

だが、俺はそれを平然と行なおう。俺やイーグル、ミーナの力は決してスキルではなく、万が一捜査が俺に及んだとしても、国がそれを止めてくれる。

悪く思うなよ、姉ちゃん。これも、国のためだ。

近づく列車、ここで落とせば確実に死ぬ。

俺はポケットに手を入れたまま、一瞬だけ、力の有効範囲である一メートルにその姉ちゃんを入れる。

瞬間、まるで見えない手に押されたように、その姉ちゃんはふらつき、線路へと落ちた。

任務完了？？と、俺はそこから立ち去りうつむく。

俺の視界に紅が混じり、列車は何事も無く通過した。

……何事も無く？

瞬間、俺の領域を超越した拳が飛来、左頬が殴られた。久方ぶりに殴られた頬はひりひりと痛むが、理解した。一定の大きさで俺に向かってくる力を無にする領域、それが効かなかつた。

考えられるのは、二つ。

全てを無に帰す鎌か、あるいは、俺の力を超越した力。そして、その鎌を操る『人喰いジョーズ』が死んだ以上、残されたのは後者の方。

紅？？それは血の色ではなく、お前の髪の色か。

「……よお『血塗られた英雄』」

俺の声は奴には届かない。

俺を殴つたのは、その存在を知らせるためだけ。決して話し合つ氣など無い。

その力は『勝利の方程式』。

奴には何人たりとも敵わない。この世の物理法則を捩じ曲げて、奴と同じ舞台に立たない限り、奴と相対する事は出来ない。俺の能力であつても、それは変わらない。

圧倒的な強さ。

だが所詮、あいつの力は勝利をもたらすだけだ。
奴は救世主にはなれない。

けれど、あいつはまぎれも無くヒーローだ。

一人の命を奪い、百人の命を救うような正義ではなく、その一人も救つてみせるヒーロだ。

故に奴は、その甘さで血に染まる。

第三回四章 例えは勝利の方程式（後書き）

感想・意見・指摘お待ちしております。

魔力（魔法使いはマナと呼ぶ方）の証明に当たつて、科学技術の產物達がそのエネルギー源を魔力に鞍替えしたかと言わると、実はそうではない。

空氣中には魔力も存在する。しかし、いつの間にか復活する。どこでも扱える便利なエネルギー源だが、だからといって使用し続けて常に存在する訳ではない。生活に関する機器は安定して使える事が前提なので、私生活の面では未だに電気を使用した物が主流である。

そのため、世界の文化レベルはあまり進歩しては居ない。移動手段はまだ、陸では自動車や列車、海では船、空では飛行機である（例外として、『瞬間移動』の魔法を使い出来る人間がいるが、スキルとしても魔法としても『瞬間移動』は実現されていない事になっている）。

魔力の証明から四年、大きな変化はスキル、そして『地球防衛軍』ぐらいだろう。

「先輩は悔しくないのでですか？ 地球防衛軍に仕事と威儀を取られて」

如月理恵は腰に手を当てて、背もたれにだるく凭れ掛かった自分の先輩を怒鳴った。

対して、怒鳴られた男の方は制帽をぐるぐると指で回し、やる気なさそうに天を仰いでいた。

「別にそれが欲しくて警官やつてる訳じゃないんだから、いいぜそんな事。むしろ感謝したいくらいだぞ、如月後輩。おかげで俺達はこうしてまつたり過ごせる訳だ」

「私を先輩と一緒にしないでください。職務怠慢だとは思わないのですか？」これだから、我々警官が税金泥棒と呼ばれるのです」

憤慨する後輩を視界の隅に捕えながら、彼女に先輩と呼ばれた男、緋色勝利は欠伸を噛み殺した。そして一応そのお怒りを気にしているのか、俯きながら頭を搔いていた。

先輩のそんな仕草を見ながら、理恵は頭を捻つた。

一体何故、こんな怠惰な男が『クニヤン・ヒーロー血塗られた英雄』などと呼ばれるのだろう、まさか髪の色だけではないはず、と。

今現在、最も割りにあわない職業とは、お巡りさんである。

地球防衛軍という新組織の設立に伴って、警察官の給料は削減された。というより、吸収された。

一般人がスキルを得る事で生じた問題、それは犯罪の凶悪性が増した事だろう。

自衛のために銃を持つ事が義務づけられている、それと同じような物だ。違いは、それが目に見えないと言う点。

それに対応して出来たのが、『地球防衛軍』。

文字通り、再び侵略戦争のような事件が起きた時に対処するス kill保持者で構成された軍である。しかし基本的な実務は、スキル保持者が起こした犯罪行為の対処である。

警察が行なつていた犯罪の対処は、一般人がスキルを持つ事で危険度が跳ね上がった。犯罪行為を止めに行つた警官が逆にやられる、という可能性が生まれた。

そこで、犯罪対処に特化した組織として地球防衛軍が生まれ、警

察は犯罪の捜査、自衛隊は災害の支援部隊となつた。

その裏には、侵略戦争の犠牲者の大半が軍や警察官などの治安維持に関わった人間で、人員が不足したからだと言う話もある。

そんな中お巡りさんが残つたのは、見回りと道案内、落とし物の管理などの地球防衛軍がやるには名が落ちるような雑務処理のためであつた。楽な仕事に思えるが、実際はそうではなく、常に危険と隣り合わせの職業だ。

見回り、それが理由だ。

街を見回る事で犯罪を抑圧。また犯罪が起つた場合、いち早く駆けつけ地球防衛軍が出て来るまでの時間稼ぎ役、もしくは可能ならば取り押さえる役目にある。そのため、ある程度優秀な能力者であれば、年齢を考慮せずにお巡りさんになれるのである。ただし、安月給で危険なために志望者は絶望的、存続も危うかつたが。

お巡りさんと地球防衛軍、どちらが高待遇かを考えれば、一目瞭然だつた。

この後輩は何を思つて警官になつたのだろう、と緋色は内心思つていた。

「仕方ねえな、見回り行くぞ。仕事すれば良いんだろ」

緋色は面倒そつに立ち上がり、血のよつに真つ赤な髪を振るつて派出所を出た。

この人は……、と咳きながら理恵も制帽を被る。理恵の艶の有る黒髪が制帽から少し溢れ、肩にかかる。

文句を言う点を覗けばいい女なのにな、と緋色は制帽を被り直しながら思つてゐると、

「先輩、嫌らしい目つきで見ないでください。逮捕しますよ」

理恵にギロリと睨みつけられるのだった。

並べば緋色の方が理恵より少し背が高く、年齢も緋色の方が一つか二つ上なのだが、上辺だけの尊敬しか得られていない緋色だった。

「いいか如月後輩。俺達の役目は失われた牙の代わりに、愛くるしい仕草で人々の犯罪意識を静める事だ」

「先輩、言つてる事の意味がまるで解りません。もつと具体的にお

つしゃつてください」「要するに、悪い事したらやられる……と思わせるのではなく、この人達に迷惑かけたくないから止めよう、と思わせるように振る舞うんだ」

緋色はそう言って、田の前の少女の頭を撫で回していた。

五歳くらいの少女で、脇にカラフルなボールを抱えている。拾った財布を届けてくれたのだった。場所が大通りに面した公園であるため、遊んでいる途中に見つけたのだ推測された。

緋色は、頬が緩みきり今にも涎が垂れそうな表情を浮かべた変態……ではなく、面倒見の良い好青年、という印象を与えるものだった。少女もはにかんだ笑顔を浮かべている。

「財布を届けてくれるなんて偉いなー。気をつけて帰るんだよ」

「うんっ！」

とてとてとボールを持って走り去る少女に笑みを浮かべて手を振る緋色を見て、理恵は呟いた。

「……」の口ophon

途端、緋色がギロリと理恵を睨みつけた。

そして流れる動作でダンスでも踊る時のように理恵の片手を取り、ついつと理恵の顎を上げて自分の手と向かい合わせる。一瞬理恵の体が強張るが、どちらも頬の色を変えはしない。

「如月後輩、お前は何か一つ勘違いをしているみたいだな。残念なお知らせだが、俺は口ophonじやない。その体に教え込ませてやつてもいいんだぜ？ 英雄色を好み、って言うだろ？ まさか、俺が名ばかり英雄だと思ってたんじゃないだろうな

「……」

しばしの沈黙の後、緋色は理恵の手を離した。理恵は緋色に背を向け、握られた手首を擦りながら小さく言った。

「……わかりました。先輩が英雄だと言つたのを忘れていました。誰でもアリなんですね」

「……。もう何でも良い」

緋色は溜息を付いて項垂れ、ふと思いついたように言つた。

「如月後輩、お前にお巡りさんの何たるかを教えてやひつ

切り替えが早い人だ、と理恵は思つたが特に突っ込まず、勝手に喋らせる事にした。

下手に文句を言つても、無駄に話が長引くだけである。

「お前が一体何を思つてお巡りさんになつたか俺は知らないが、俺の下に付いた以上、俺のルールを貫いてもらう。いいか？」

「……今時上司の命令が絶対というのは納得いきませんが、聞くだけ聞きましたよ。」

後輩の返事に渋い顔を見せる緋色だが、特に文句は言わず先を続ける。

「一つだけだ。それは？？」

「アーハー！」

甲高いクラクションが緋色の台詞を遮った。

二人はその音がした方向を振り返り、驚いた。

二人から百メートル程先で一人の女の子が、大通りの歩道を走っていた。

五歳くらいの少女……先ほど財布を届けてくれた少女は、慌てたように歩道を駆けていく。歩道を駆けて、車道へと飛び出して行った。

少女の視線の先には、お気に入りのボールしか映っていない。自分に迫る、トラックの姿は見えていない。

トラックは何があったのか不明であるが、どう考えても大通りを走る速度ではなかった。

大通りには一人の他にも目撃者がいるが、誰一人として少女を止める事が出来なかつた。

「？？？！」

瞬間、理恵は自分のスキル『通信途絶』を発動。

『通信途絶』

無色透明の結界を生み出す能力で、結界内の現象を全て認識させ

ない完全遮断の能力もある。結界は何重にも重ねる事が出来、それによつて硬度を上げる事が可能。ただし、結界一つ一つはある程度の攻撃で壊れてしまつ。

スキルを最大発動、瞬間的にトラックの前に結界を三枚重ねて張る。

だが、時速100キロオーバーのトラックが多少減速する程度で、完全に止める事は出来なかつた。

(距離がありすぎる！－)

スキルは脳から発生する電波で魔力を操作し、何らかの現象を起こす。スキルの範囲、電波の影響範囲は個人によつて異なるが、現象を起こす位置は自分から近ければ近い程強くなる。

理恵のスキル『通信途絶』も例に漏れず、本来なら二十メートルが範囲の限界だ。にも関わらず百メートル以上離れた位置に存在するトラックの前に結界を張れたのは、人体の神秘、脳が未だに解明されていないためとしか言えない。火事場の馬鹿力、だろ？

理恵は最善を尽くした。

それでも悔やまれた。目の前で、一人の少女が命を落とす。それをどうにも出来ない自分が、歯がゆかった。

理恵は目の前に広がるだろう絶望に、自分の体を支えておく事が出来ず崩れ落ちた。

そして。

キイイイイイイイイイイイイイ！－

トラックが少女の居た位置を大きく通り過ぎ、ブレーキ音を響か

せながら理恵の位置まで来て、そして止まった。

「えつ……」

理恵は惚けた声が口から漏れた。
音がしなかつたのだ。

少女が轢かれる、絶望のエチュードは奏でられなかつたのだ。
だが、理恵には確かに見えた。
少女の居た位置に、赤い閃光が走るのを。

「良くなかった、如月後輩。お前の覚悟は見せてもらつた

そして、理恵は気付く。

ふわりと、青い制帽が自分の膝へと落ちて来るのを。
それは自分の物ではなく、隣に居た人物の物だと。
そして、その人物が？？。

「なに絶望しきつた顔をしている、如月後輩。俺の能力は『勝利の方程式』。お前、自分の先輩が誰だと思っている?」

紅蓮の赤髪、不敵な笑み。

そして、小脇に抱えた少女とボール。

そのスキル名は、『勝利の方程式』。

『勝利の方程式』

それは、速さを操る能力。速度 v ベクトルを用いた式で表される物理現象を操作する能力。

v は勝利のビクトリーでもあり、操るは速度 v を用いた方程式。

そして、約束された勝利の力を持つた彼は、こう呼ばれる。

「緋色勝利。『クリムゾン・ヒーロー』だぞ？」

第三回四章 例えは勝利の方程式・1（後書き）

久々に書いたので、可笑しな点があるかもしれません。
それも含めた感想・意見・指摘、お待ちしています。

「よおワンオー。やつぱり、お前の言つた通りの結末になつちまつたぞ」

ムクロはくくくと笑いながら、どかりと執務室のソファーに座つた。

それはとあるビルのある階にある一室。来客用の机とソファー、それに仕事用のデスクと椅子しか無い質素な部屋だ。大きな窓ガラスから階下を一望出来る事が魅力だらう。

「だらうな。そうであれば仕方ない。奴には自力でどうにかしてもらうだけだ。我々が事件に介入する必要は無い」

ワンオーと呼ばれた男はペラペラと報告書を捲りながら呟く。
茶髪にブラウンの瞳を持つた二十代後半の男だ。白と黒の制服で身を包んでいる。

「つつても、今回の事件は絶対相性的にあいつ最悪だろ。不適材不適所の典型的な例だと思うけど?」

「知らん。奴が勝手にやつてるだけだ。それでびのような結末を迎えるようど、もはや我々には関わりない。……いや、イーグル達には関わるかもしけんがな」

「つつても、イーグル達はもうナンバーズを脱退した訳だし、事實上ナンバーズとは関わりがない訳だが。おいおいワンオー、お前はいつまでこんな写真を持つてんだよ」

そう言つてムクロは、仕事用デスクの上にあつた写真立てを取る。

写真は記念撮影の物で、背景に大きな学校、『葉桜学園』と書か

れたプレートが見える。

どうやらその学校の前で写したようだ。写っている人物達は、統一性の無い表情をしていた。

左端にはワンオールが写っている。秋田犬のような茶色の髪に、グラウンの瞳。右手を顔に当て、呆れた表情を浮かべている。

その隣にはカワセミのような緑色の髪をした二十歳前後の青年。つんつん髪で前髪が長いが、爽やかなイメージを与える人物だ。上の空、といったように空を見上げている。

その隣には、三人の女性。一人は蒼色のショートヘアに、静かで知的な印象を与える整った顔の少女だった。年齢は十七歳程。我関せず、と目を閉じ両手を前で揃えている。

次の一人はバイオレットの髪、董色の瞳の年齢は二十歳前半のくらいいの女性。隣の少女とは打って変わって、騒がしそうである。実際、写真でも隣の少女の嫌そうな顔を無視して（気付いていないのか）、絡んでいる。

もう一人は写真の中央におり、ヒマワリのような色の瞳に、黄色と思える程明るい金髪をリボンでまとめている、小学五年生程の少女。破顔一笑でカメラに向かっているが、その手は隣の女性をつねつてている。

その隣に、一匹のネズミがいた。銀色の毛に、黒の瞳。大人しく鎮座しているが、しかしぱズミらしくない。

その隣は、白い髪に白い肌、黄色みがかつた茶色の瞳をした女性が写っている。年は二十代前後のように、天真爛漫、一人だけカメ

ラに向かってピースしている。

その隣は、黒の髪に黒の瞳の、眼鏡を掛けた三十歳程の青年。なんだか裏の有りそうな笑みを浮かべ、眼鏡の位置を直している。

そして右端に、ナインが写っている。長い黒髪になっていた。さらに、どういう訳なのか、格好が一人だけ可笑しい。他はナンバーズの「一」ト姿だと言うのに、彼だけはセーラー服。この場合残念というのか、幸運というか、見事に様になっていた。普通に違和感がない。羞恥心にやられたように、一人項垂れていた。

ナンバーズ。その九人が全員写った、唯一の写真。この事件以後、三人が脱退し、今ではその所在も掴む気が無い状態だった。

「悪くはなからう。あの頃が一番平和だったのだ」「……平和、ねえ」

少なくとも、葉桜学園の人間は皆殺しにしただろ？ それで本当に平和か？

ムク口はそれを声に出さずに、心に止めおいた。

「貴様には解らんよ。少なくとも、私に取つてはあの頃が一番だった」

「あつそ。閑話休題。で、『血塗られた英雄』はどうすんだ？」
「だから、奴には自力でどうにかしてもらおう。所詮突き詰めれば誘拐事件だ。簡単だらう、奴にとつては」

黒い犬歯がその口から覗いていた。

「ふざけるな！」

男は呆れるしか無かつた。

場所はビルに挟まれた路地。そこはまるで異次元であるように、男と彼が対峙する者しかいない。一人の男の呼吸しか聞こえない空間となっていた。

男の手には、オーバーヒートし煙を上げる機関銃。機関銃の弾丸は、全て当たつていたはずだ。そう、確かに当たつたのだ。

しかし、赤青の男は悠然たる態度で男と今も尚対峙している。

警官の制服に、赤い髪。

『血塗られた英雄』、緋色勝利。

「はい、銃刀法違反、公務執行妨害で現行犯逮捕」

「お疲れ様です、先輩」

バリン、と何かが碎ける音がし、街の喧騒が一人の耳にも届くようになる。実は昼日中の戦いだったのだ。

男に手錠をかける緋色に、同じく青い制服を着た如月理恵が、形だけの敬礼をしてみせた。

と、ビュツ、と風が吹いた。

たーん、と遠くから音が聞こえ、緋色の頭部付近からぽとりと塊が落ちる。

「そ、狙撃っ！」

という理恵の声が、誰からの反応も返つてこず、虚しく裏路地に響いた。

その路地には、手錠をかけられた男一人しかいなかつた。
しかしそれも一瞬。
どさり、と叩き伏せられたような格好の男が現れ、

「同上の罪で、お前も逮捕だな」

男の背に足を乗せた緋色が現れた。男の手にはライフル銃。
炎のような髪をかき上げ、一仕事終わつたと言つ緋色。

「しゅ、瞬間移動！？」

「只の時空移動だ」

驚いたような男の手からライフル銃を奪い緋色は、何かをした。
瞬間、ライフル銃は粉々、塵になるレベルまで砕け散つた。

「さて如月後輩、地球防衛軍に連絡だ」「…………もう来てます」

路地の入り口には、スーツ姿の男達が待機していた。

二人の犯罪者を引き渡して、巡回を兼ねながらのんびりと派出所に戻る二人だつた。

「それにも先輩の能力、……反則ですね。ライフルすらも無効化しますか」

「速度を用いた攻撃で俺を殺そつなんて、豆腐の角で頭をぶつけて死ぬより難易度高いぞ」

呆れたような理恵の呴きを緋色は茶化す。
むつ、と睨む理恵。

「誇張にしても言い過ぎじゃないですか？」

「いや、誇張でもなんでもないぞ。ある速度を超えた物質は、俺に触れば速度0になるからな。銃器で俺を殺そうなんて、不可能なんだよ。まあ、その速度以下の攻撃は避けるしか無いんだがな」

緋色の能力、『勝利の方程式』は速度を扱う。

緋色は身の安全の確保のため、常にある速度を超えた物質の干渉を拒んでいる。お巡りさんと言つ仕事である以上、地球防衛軍程ではないが危険と隣り合わせになるためだ。

昨今の犯罪者の大半がスキルを用いるが、銃が犯罪に使われなくなつたかと言えば、そういう訳ではないのだ。

「……しつかし、なんか最近多いんだよな。まるで俺を試すかのような、突っかかつて来たような犯罪者が。裏ルートで賞金首にでもなつてかな

「驕りじやないんですか？」

「……如月後輩、俺は一応有名人だ。裏組織の壊滅とか、結構頻繁にやつてんだ。だから田をつけられやすいし、お巡りさんだから舐められてる

「それでは、地球防衛軍に勤めれば良いのではないですか？」

あのな〜、と緋色は頭をかく。

「俺は誰かを守るためにこの力を使いたいんだよ。盾を守る、身近なヒーローってのに憧れてんだ」

一ヶと緋色は笑みを浮かべてみせた。

「お前は知らないかもしぬないが、俺はお前だつて助けてんだぞ？
それも、お巡りさんをやつていたからな。それは、地球防衛軍だ
つたら無理だつた事だ」

「……。おっしゃる意味がまるで分かりませんね」

呆れたような、馬鹿にしたような、感心したような、哀愁の籠つ
た、熱意の籠つた、感謝の籠つた視線を、如月は投げかけた。

それは、見る者が見れば、酷く意地悪な表情だった。

「解らないなら解らないでいい。俺は感謝されたくて助けてる訳じ
やないからな」

わしゃわしゃと後輩の頭を撫で回す緋色。
直後、脹ら脛に蹴りが入つた。

「こほん。……事件と言えば、最近子供の誘拐事件が多発してます
よね。先輩、何か知つてますか？」

「要求不明で突然返してくる誘拐事件か？ 知らないな。目の前の
事件しか解決しないのがお巡りさんだから」

ふと、緋色は立ち止まり、横の路地に目を凝らした。理恵も一緒
になつて路地を覗く。

薄暗い路地の奥で、引っ張られていくよつこ一人の少年が消えた。

「つー？」「……噂すればなんとやら。誘拐事件か」

「つひとつ路地を進み、少年が消えた角にさしあたる。理恵がい
るか背後を確かめ、緋色は囁く。

「行くぞ、如月後輩。略取誘拐罪の現行犯だ」

「…………はい」

理恵の小さな返事に、緋色は一度後輩を見て、気付いた。
理恵の身体は震えていた。

自分の対処がまずければ先ほどの少年は人質となり、最悪殺されてしまう……そんな责任感が彼女を押しつぶそうとしていた。

「怖いか、如月後輩。武器もないお前は、いつも通りに後ろで見て
いてくれて結構だぞ」

「…………はい」

珍しく揃てくれた事も無く素直な後輩に、不謹慎にも笑みが零れそ
うになり必死で抑える緋色。

そして、その笑みを皮肉へと変える。

「如月後輩、安心しろ。お前は誰の後輩だ？」

理恵はその馬鹿みたいな台詞に思わず吹き出してしまい、田代に浮
かんだ涙を拭つて、答えた。

「甘い夢を見ているお馬鹿なお巡りさんの、です」

「よし、これが終わったら一杯奢つてもいい。貴様に上司への態度
つて奴を教え込んでやる」

「いいですよ。どんと来いです」

氣の迷いが晴れた、といった後輩を見て、緋色は正面を向く。
そして、路地の角を曲がりひたして??。

「がはつ！？」

血が口から溢れ出てきた。

何かが、自分の身体から突き出ているのが、見えた。

赤色に染まつた銀の刀が、緋色の腹部から突き出していた。

『勝利の方程式』の例外。

ある速度以下の攻撃。それは、刃物による斬り付けや突き刺し。それは本来自分で対処出来る部類の攻撃だ。そのため、自動で防御されない。見えていれば、避けられる。

緋色は確かに背後を確かめていた。刃物を持った人間など、誰もいなかつた。

いたのは理恵だけで、武装はさせていなかつた。

何が起こつたのか、緋色には解らない。

ただ、背後の後輩を心配した。

油断していた。武装させておくべきだつた？？と後悔し。

「ぐはつ」

引き抜かれる刃に、吐血しふらふらと路地の壁を背に崩れ落ちる。

その血の色も、歪み無い紅色。

緋色は明滅し始めた視界を上げ、後輩の安否を確かめる。

「き、如月、無事？？か」

その声は、途中から落ちて行く。
希望から、絶望へと。

如月理恵が血振りをするのは、三十センチ程の短刀。

『通信途絶』

無色透明の結界を生み出す能力。

結界内の現象を全て認識させない完全遮断の能力。

空間内にある物体は、視認する事は出来ない。

刃物を結界内に入れて持ち歩けば、誰にも知覚出来はしない。

武装はない、裏切りは無い、そう信頼しきつた緋色の判断は、甘かつた。

「……甘いんですよ、先輩」

彼女は責任感で押しつぶされそうだった。

緋色勝利を殺さねば、先ほど誘拐された少年が殺されると知つていたから。

誘拐された少年、彼女の弟。

それは、身代金、肉体目的の誘拐事件ではない。

十分に力を持つた一般人に、犯罪の協力を要求する誘拐事件だつ

た。

第三回四章 例えは勝利の方程式・2（後書き）

久々のため、感覚が掴めません。おかしな部分が有るかも。

感想・指摘・意見お待ちしています。

あと一話で、一応番外編終了予定。

第三回四章 例えは勝利の方程式・3（前書き）

久々の投稿のため、誤字脱字、おかしな点があるかもしれません。
あらかじめ「了承を。

壁に背を預け、次第に血だまりと化していく路地に座る緋色。溢れる紅の零を止めるべく、必死に傷口を抑える。緋色は『勝利の方程式』で細胞分裂の速度を上げ、傷口を塞ごうとし？？、くらりふらりと思考が泳いだ。

毒。

そう緋色が理解した時には、もはや緋色の身体は力なく路地に倒れた。壁に背を預けておく事すらも出来ず、血だまりに横たわる。

「く……そ……、冗談？？きつい、ぞ」

緋色の視界は次第にぼやけていく。そんな視界に、暗い影がさしかかった。

「あひやー、やつぱりこいつなったのか

その惨状を見ても楽天的な声を上げる一人の少年が現れた。この結果が予想通り、それでもまだ何らかの展開があると言いたげな軽い声。

声に聞き覚えがあり、その人物の名を緋色は呟いた。

「む、ムクロ……」

「喋んなよ。死ぬぞ？」

ムクロはしゃがみ込み、緋色と顔の高さを合わせ、不敵な笑み浮かべる。

「おつと、勘違いすんなよ。俺はお前の遺言を聞く気はねーし、頼みを聞く気もねーぞ。俺達の関係、忘れたとは言わねーよな」

そう言つて、以前殴られた頬を擦つてみせるムクロ。

「アイツ、如月理恵は何も悪くない。弟想いの良い姉貴で、この誘拐事件の被害者だ。出来れば助けてやりたい。だが、アイツのスキルは危険だ。暗殺のスキルとしちゃ、少々優秀すぎる。何せ、『血塗られた英雄』を殺す事も可能なんだからな」

緋色は血で濡れより赤くなつた唇を歪めたが、声は上げなかつた。

「だから俺は、アイツを殺そうとした。要人の暗殺を防ぐためだ。結果、それはお前に邪魔されて失敗し、そのお前は今無様に寝ている」

皮肉なもんだな、とムクロは笑つた。だが、と話を続ける。

「俺は地球防衛軍、ナンバーズが一人、N.O.・シックス、ムクロだ。ナンバーズの存在意義は？？犠牲。より多くの人を救うには、犠牲は付き物だつて意味だ」

ムクロは踵を返し、緋色に背を向けた。正義のヒーローに背を向ける事で、背徳を意味するかのように。

「俺はお前のように、誰も彼もを助けやしない。俺の救いは？？死だ」

ムクロは薄暗い路地から、明るい街の方へと歩を進める。ヒーローが薄暗い路地に転がり、人殺しが光溢れる街を闊歩する。

「お前は黙つて見てるんだな。俺達は殺すが、その犠牲を無駄にはしない。それが嫌なら、俺を殴つてでも止めるんだな」

「…………」

緋色は動けない。

「お前はヒーローだが、神様じゃねーんだ。誰をも一人で助けられると思つてんじゃねーよ」

そして、ムクロは去つていた。

「……く、そ、また？？」うなるのか

緋色は自分の無能さを噛み締めた。

周りがどれほど彼をヒーローと崇めた所で、自らの事を『血塗られた英雄』と鼓舞した所で、緋色は心の奥底では自分を誇れはしない。

『侵略戦争』、彼は英雄となつた。

だがそれは、彼がより少ない犠牲でその戦争を終結させたが故にだ。

かの戦争で緋色は、本当に守りたかった者を守る事は出来なかつた。

誰もを守りたかった。誰も失いたくなかった。それは敵と呼ばれた存在にも及び、結果、彼は本当に守りたかった者を失つた。

もう一度と、あんな思いはしたくない。その思考が緋色を動かす。ぼやけていく視界、緋色は力を振り絞り、路地から出ようと腕に力を込める。

だが、毒と出血で意識が朦朧とし、能力が満足に使えない緋色。

それは死期を速める行為でしかなかつた。

「……………」

緋色は氣付いた。

粉雪のように白い羽が緋色の上に舞い降りてくるのに。
それは、いうとしか形容出来ない物。

？？天使の羽。

如月理恵には、一人の弟しか家族がない。

母親は弟を生んで死んでしまい、父親も交通事故で死んだ。結果、
年の離れた弟との二人暮らしとなつたのだつた。

十歳年離れている二人だが、仲は良く、国からの支援で問題なく
暮らす事が出来た。そして理恵は無事に就職し、弟も何事も無く
学校に通つていた。

そんな理恵の元に訪れた不幸。

それが、弟の誘拐だつた。

求められたのは身代金ではない。理恵のスキルだ。

理恵のそのスキルがあれば、その筋では最強と呼ばれる存在、『
血塗られた英雄』を殺せる。故に理恵の弟は狙われた。優秀なスキ
ルを持ち警官と言う職業の理恵を誑かすのは不可能だつたから、未
だスキルを持たない非力な弟が。理恵は一択を迫られた。

『血塗られた英雄』、緋色勝利の命か、弟の命かを。答えは、苦渋の決断だったが、迷えはしなかつた。

「言われた通りにしたわ。……だから、弟を」

そう吐き捨て、理恵は緋色を刺した小刀をリーダーの前に投げ捨てた。

港にある倉庫、そこがこの誘拐事件の犯人達のアジトだった。犯人達は九人程度の少ないメンバーだった。覆面を被り、分厚いグローブを始めた男をリーダーとした、どう見ても表を歩けないようなメンバー構成だ。

覆面の男は落ち着き払つて、理恵に言葉をかける。

「まあ落ち着け。弟は返す。君もこんな所を見られたくはないだろう? ……しかし、見事な手際だった。ぜひとも今後もうちで働いてほしい人材だ」

「巫山戯ないで。早く弟を返して」

覆面男の言葉を一蹴し、理恵はキッと男達を睨みつけた。やれやれとも言いたげに、覆面男は肩を竦めた。

「……連れてこい」

覆面男が仲間の一人に命じ、倉庫の奥へと向かつて行つた。そして、ぐつたりとした弟が理恵の元へ投げられた。幸いにも気絶しているだけだったが、やせ細り飢餓の状態だった。

「貴様等!」

理恵が動こうとし、瞬間男達が銃器を構えた。

スキルと銃、どちらの方が速いか、それを理恵は理解している。

「……酷い」

「仲間にならぬと言うのなら、殺すしかあるまい?」

怒りで歯を食いしばる理恵に、覆面男は更に絶望を投げかける。

「まさか助けが来るなどと思つては居まい? 君に助けなど来ないぞ。特に、緋色勝利は絶対にな」

「なつ、何を……」

覆面男は口元を歪める。

「君は緋色勝利を刺した。私は『血塗られた英雄』を刺せと命じたのだから、そうだろう。だが私は、緋色を殺せとは命じなかつた。だから君は、緋色を刺したが殺しはしなかつた」

理恵は意識せず、ごくりと唾を飲んだ。

それを視界に入れながら、男は語り続ける。

「この短刀で奴の首を搔き切れば、奴は死んだろう。心臓を一突きしても、奴は死んだ。だが、腹に突き刺した程度では、あの男は死ない。なぜなら奴は、『血塗られた英雄』だ」

『血塗られた英雄』。

それは、『侵略戦争』において、一人でも多くの人を救おうと奔走した彼に与えられた称号。その英雄はその身を血に染めて、戦つ

た。その血が誰のものかなど、語る必要などないだろう。

だからそう、理恵は信じていた。

緋色が死なない事を。

「だが、残念だつたな。この短刀には毒を塗つておいた。じわじわと痛みを伴う、精神から破壊する毒がな」

男は理恵が投げた短刀を拾い上げ、その刀身を撫でる。瞬間、何に反応したのか、銀の短刀は不気味な紫色の刃物へと変化を遂げた。

「スキルにしろ、魔法にしろ、どちらも思考が必要不可欠だ。特に細かい作業、例えば傷の回復などは集中力を有する。逆に言えば、マトモな思考能力がなければ満足にスキルは使えない、という事だ。精神を破壊してしまえば、スキルは使えないと言う事だ」

「緋色勝利の恐ろしさは、その能力、『勝利の方程式』にある。速度を操るのではなく、速度と関係する事象を操る、歪な能力。その能力は、時空すらも操作する。

「奴が死のうが生きていようが、私達には最早関係ない。奴のスキル、『勝利の方程式』が封じられればそれで良かつた」

覆面の下で男が歪んだ笑みを浮かべたというのが、見えなくとも解つた。

「ありがとう如月姉弟。君たちのおかげで、『勇者の復讐』は成功する」

覆面男が手を挙げると同時に、理恵達を取り囲んでいた男達が一

斎に銃器を構え、そして？？。

「えつ…………」

？？瞬間、倉庫の扉がトランクにでも突っ込まれたよつて吹っ飛んだ。

気付けば、理恵と弟は一人の男に小脇に抱えられている。

「なつ！？ ？？ツ！？」

「馬鹿共、止めろ！」

男達が焦り、引き金を引こうとしたし、覆面男が止めに入ったが、それは遅かった。

瞬時、悲鳴の重奏が倉庫に響き渡り、引き金を引いた男達が仰向けて転がった。

あまりの速さに、理解が追いつかず、反応が置き去りになつた。

男の第一印象は赤。

紅蓮の髪に、炎を宿したような灼眼。

深紅のマントに身を包み、真っ赤なグローブ填めている。

男は血のように赤い唇を歪めた。

「悪いな如月後輩、ヒーローは遅れて来るもんだ」

『血塗られた英雄』緋色勝利が、不敵な笑みを浮かべた。
理恵の意識は、何故か遠のいた。

それが安堵のためだったのか、疲労のためだったのかは解らない。

「くそつ、何故貴様が生きて？？がはつ」

覆面男が踵を返そうとし、その顔面が緋色に捕まれた。
一瞬で覆面男の前まで移動したのだった。

「俺を誰だと思ってやがる？ 俺の能力をなんだと思ってる？」

緋色は、獰猛に笑みを作る。

「速度ベクトルを操る？ 違うな、全然違う。俺の能力は、そんな一般枠に捕われる力じゃない。俺の能力は、勝利を約束された力？」

?『勝利の方程式』だ。理屈じゃないんだよ

そして、緋色は血に染まつた。

街の中心部のある病院は、世界で最も天国に近い病院だ。その意味は一つあるのだが、一つはその病院が超高層であると言つ点である。

その最上階にある病室、そこは要人のための病室であつた。超高層であるため狙撃されない、変な所で凄いその病室は、二人部屋である。その窓側に寝ているのは如月理恵だつた。

誘拐犯に受けた傷は少なかつたものの、大事を取つての入院である。最低な一択を迫られていただけ合つて、精神の方に疲労がたまつっていたのか、今は深い眠りについている。

それを見下ろすように、緋色勝利が立つていた。

「……つたく、つまんねー意地張るからだ。馬鹿が」

誰に言つわけでもなくそう呟くと、緋色は踵を返し、病室を後にしようとした。

と。

「ありがとう」

その背に声がかけられ、緋色は動きを止めた。

「……寝てると思った」

そして、不敵な笑みを浮かべた。

「これで借り一つだぜ？」

緋色は振り返り、もう片方のベッドで寝ている男に語りかけた。

ベッドで寝ているのは、紅蓮の髪をした男だった。

その男に話しかけた、立っている男も、燃え上がるような赤髪の男だった。

不意に立っていた男の姿が変わった。

銀色の髪を持つた青年へと姿が変わり、人懐っこい笑みを浮かべた。

「お前は間違いなくヒーローだ、緋色。俺には立てない場所だ。だから、無理矢理にでもその位置に留まつてもらひ。……嫌がらせでな」

「ムクロ……」

ムクロは、犠牲を選んだ青年は、人を殺す事を選んだ青年は語る。

「ヒーローってのは、ピンチの時に駆けつけてくれる奴じゃない。それは白馬の王子様で十分だ。ヒーローは、その行動が他人の心を打つような奴だ。敵を味方に、裏切りを信頼に、ってな。行動の善

悪じやない。そいつがやる事なら、間違いはないと思わせるような奴だ」

「……俺は仲間が居なけりや、何も出来ないぞ」

緋色は、俯き呟いた。

この事件、彼は病室で寝ていただけなのだから。

だが、ムク口は笑つた。

「だからこそ、お前は本当にヒーローだよ。ピンチの時なら誰だって協力させちまうんだから」

？？この俺をもな、などとムク口は言つた。

「なんだよ、今回はお前に殴られるような事はしないぜ？」

ムク口は皮肉氣に笑みを浮かべ、壁に寄り掛かる青年に語りかけた。

「元ナンバーズ、N.O.・ツー、イーグル」

イーグルと呼ばれたのは、白衣に身を包んだ二十歳前後の青年だ。カワセミのような緑色の髪をしているのが特徴的。つんつん髪で前髪が長いが、爽やかなイメージを与える人物だ。

「……今回の件については、僕からは特に言ひ事はない。ただ？？」

と、イーグルの言葉をムクロが遮つた。
うんざりだ、とでも言いたげに。

「そいつは聞き飽きてるな、イーグル。人を殺すなって言いたいんだろ？ そうだよな、『死者をも生き返らせる医者』である、お前だもんな。《天と光の使い》さん」

「僕は死人を生き返させる事は出来ない。ただ、死んでいなければ助ける事が出来るだけだ。だから？？殺すな」

くくくとムクロは笑い、大げさな身振り手振りを加えて語つた。

「なあイーグル、人は自然と他の生物を殺す生き物だ。だからこそ、宗教はそこを戒律で縛る。そうしなかったら、人は人をも殺し、絶滅の一途をたどるからだ。だが、人つて奴は元々、殺人衝動があるんだよ。だから、異教徒なら殺しても良い、戦争だから仕方なく殺し合えるんだ」

「……人は殺し合つべくして生まれた、とでも言いたいのか？」

「じゃねーとオカシイだろ、これほど平和を望む人がいて、どうして世界は平和にならない？ そりや、潜在意識として殺害願望があるからじゃねーのか？」

「……理解出来ないな。やはり、僕たちは解り合えないようだ」

笑みを浮かべ、ムクロは歩き出した。

「正義の敵が悪であれば、どれだけ良かつたかな」

無表情でイーグルはムクロと反対へと歩き出した。

「正義の敵はいつだって正義だ。それが自分にとつての正義であるか、大勢の正義であるかの違いしかない」

窓から差し込む夕日によつて一人の影が床に映つてゐる。不意に人型であつたムクロの影が歪み、奇怪な形へと変化して行つた。

「中途半端な悪は、正義の敵にはなれはしない。正義が正し過ぎて、悪でいることが出来なくなるからだ」

そう言つたムクロの影は、『鬼』の形をしていた。

「また、正義に対抗出来るような絶対悪は、揺るがない悪は、最早それも正義だ。正しいと思えなければ、それを貫き通す事など不可能なのだから」

イーグルの影も形を変え、それは『天使』の形となつていた。

「イーグル、いや、『死者の冒瀆』。俺はお前の敵だ。お前が生き返らせないくらい、俺は人を殺すぜ」

「ムクロ、いや、『生者の蹂躪』。お前は僕の敵だ。お前が殺さない人間を僕は救い続けよう。??いや、お前が救つた人間を、僕は助け続ける」

二人の歪な関係は、歪な世界であつたが故に存在出来た。

第三回四章 例えは勝利の方程式・3（後書き）

感想、評価、意見を頂けると、作者のやる気が出ます。
お手数でなければ、お願いします。

侵略戦争において、七人が侵略者を滅ぼした。

侵略者は昆虫を模した肉体を持ち、プラントと呼ばれる巨大な船により襲来した。最初にそれが襲来したのは日本で、最初にそれを撃退したのも日本であった。そして、その日本を今治めているのは、その七人の一人である。さらに七人の一人である、『死者の冒流』も日本にいる。また、その七人に数えられないが、『血塗られた英雄』と呼ばれる存在も日本にいる。

そのため、誰もが薄々感づいている。

たつたの七人で侵略者を滅ぼした訳はない、という事を。

侵略戦争において英雄視された存在は、七人だけだ。

名を明かしたのが七人しか居なかつた、一般人の大半が地下シェルターに避難し、戦場の様子は戦闘の当事者以外誰一人として知らない、と言うのが理由だ。

七人以外は、平凡な日常を求めた。『英雄視されるために戦つた訳ではない、日常を守るために戦つたのだ』と彼らは語り、それぞれの日常に戻つて行つた。

対して七人は、魔法を使える事を公表し、英雄となつた。
それは、秋山雪日ならばこう語るだろう。

『英雄は犠牲だ。英雄は希望を与える、それと共に絶望をも与える存在だ。救えれば英雄は英雄だが、救えなければ場違いな恨みの対象だ。不幸な者に希望の光を見せて、結局不幸になれば、その不幸は絶望となる。英雄とは、救われない存在だ。好き好んで英雄となる事を選べるのは、よほど自分の実力に自信のある奴か、単純な奴だけだろう』

そして、七人の一人、ヴィルヘルム・ハルデンは前者の人間だつ

た。

ヴィルの顔は青ざめていた。

彼がいるのは、彼の知り合いを集めた屋敷のホールの入り口だ。大理石で出来た床はピカピカに磨き上げられ、天井にはシャンデリアが輝いている。まさに金持ちの屋敷、と言わんばかりだった。

だが今彼の目前に広がるのは、目を覆いたくなる赤色と惨殺死体の数々。首、腹、四肢を切られた死体がごろごろとホールに転がっている。魔法やスキルでやられたのではなく、鋭利な刃物で身体を切断されていた。

そして、ホールの入り口で呆然と立ち尽くす彼に声をかける男が居た。

「英雄、ヴィルヘルム・ハルデンかね？」

三十代半ばの男で、上等なスーツを纏っている。その格好は、場の雰囲気に合っていると言えた。無論、それはこの惨状が生み出される前の話である。そして、男がその中心に居なければ。

だが、それ異常に目を引く物がある。

長剣。

時代錯誤としか言いようのない、色とりどりの宝石で飾られた輝く宝剣を持っていた。売ろうとしても売れない逸品だ。勿論、価値の付けられた物ではない、という意味で。

もつとも、今はべつとりと血が付いており、過去に何人の命を奪ったような、曰く付きの品にしか見えなかつたが。

そして男はその顔を隠す事も無く、ヴィルへと顔を向けた。

「お前はつ！」

ヴィルはその男を知っていた。

男は有名人であったが、数年前からその消息は絶たれていた男だ。その背後にまとわりつくのは、一つの国家の闇。

その国家の闇の存在は、英雄の一人として知っていた。

男の顔は当時から大きく印象が変わり、当時のきりつとした顔立ちは、無精髭に痩せこけた頬と見る影も無くなっている。男がこの数年、厳しい生活を送つて来たのが伺えた。

だが、解らない。

何故自分の元にこの男が来たのか。

けれど、ヴィルはそれを尋ねるだけの冷静な頭脳を持つていなかつた。

ホールで死んでいるのは、他でも無い彼の知り合いだ。

「この野郎ああおおおおおお！」

ヴィルは駆け出していた。手ぶらで、何の装備も無しで。

それは酷く無謀に見えるが、ヴィルは魔法の存在を認めさせた一
人だ。

「…………」

突っ込んで来るヴィルを静かに見据え、男は長剣を竹刀でも扱う
ように軽々と構え、ヴィルと交差した。

交差する瞬間、男の持つた長剣が一秒間に八発もの突きを繰り出
した。

さながらRPGの剣技、魔力が存在していなければ実現不可能な剣技だろう。

だが、ヴィルはそれを全て見切った上で、攻撃の後の隙を付いて男の顔面を鷲掴みにした。そしてそのまま男を地面に叩き付ける。大理石の床に鱗が入り、瞬時、粉々に砕かれ男の顔をその瓦礫に埋め込んだ。

ヴィルヘルム・ハルデン。

魔法使いであり、能力者である。その能力は『時空緩和』。

俗にいう体感時間を作成する能力。彼の扱う魔法は、脳内で詠唱する事で発動する。体感速度を緩やかにする事で男の攻撃を避け、それと同時に脳内で魔法を詠唱、肉体を強化していた。

侵略戦争を終わらせた七人の一人、その実力は十分に合つた。だが、緋色勝利という男を知っている者に取つては、その能力は見劣りするものであつた。

大理石を碎く程強く頭を叩き付けたのだ、こいつも無事ではないだろう。

ヴィルは油断していた。

俗にいう、やつたか？ フラグを立てていた。

ヴィルは、自分の実力に自信を持ちすぎていた。周りが見えなくなる程に。

「駄目だな。所詮英雄、勇者には及ばないな」

その言葉と共に、ヴィルの胸から一本の刃が突き出た。

男が倒れたまま剣を突き出していた。

「がはつーー?」

自分の胸から突き出した剣を一皿見て、ヴィルはよろよろと後ずさりをした。対して男は悠々と立ち上がり、ヴィルから剣を引き抜いた。

男は、まるで無傷だった。男の顔には傷一つない。
そこで、ヴィルは気付いた。

これだけの惨状を生み出しておきながら、男が返り血の一つも浴びていない事に。

剣が引き抜かれると同時に、ヴィルは呻き声と共に血を吐き出した。ふらふらとヴィルは崩れ落ち、男は落ち着いた様子でその剣の血振りをする。

「ふ、巫山戯るな！ 貴様のよつな奴が勇者など！」

ヴィルは傷口を必死に押さえ、必死で男に向かつて吠える。

血液の流れが緩やかで、とても心臓を突き刺された男には見えなかつた。

さすがは七人の英雄の一人だ、と男は感嘆の言葉を述べた。
だが、男は笑つてみせる。

「君は何か勘違いしているようだな。勇者とは、なろうと思つてなれる存在ではないのだよ？ 勇者は、血筋から決まつてゐる。残念ながら、意志の力だけではどうにもならないのだ」

男は憎々しげに、その言葉を吐き出した。

「逆に言えば、なりたくて勇者となつてこる勇者など、存在しない」と言ひ事だ」

男は長剣を振り上げ、その狙いをヴィルの頭部へと付ける。そして、口元を獰猛に歪め、その言葉を呴いた。

「これは『勇者の復讐』だ」

第四章 四魔戦・1（後書き）

感想・指摘・意見・評価などを頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7353o/>

例えは勇者の模造品

2011年8月24日18時24分発行